

# 旭・小島古墳群

— 上前原・堂場・内出前・永不地区 —

小島西土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書Ⅲ

2005

本庄市教育委員会





# 旭・小島古墳群

— 上前原・堂場・内出前・永不地区 —

小島西土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書Ⅲ

2005

本庄市教育委員会







山の神古墳出土土人物埴輪



## 序

本庄市においては、昨春、新幹線本庄早稲田駅が開業し、今後ますますの飛躍が期待されていますが、交通の要衝としての当市の歴史は古く、江戸時代には中山道の中心的な宿場町として大いに繁栄したことがよく知られています。また、中世においては山内上杉氏による「五十子陣」の設営に見られるように、上野・武蔵間の連絡路確保のための重要な防御拠点となり、また、古代においては渡来人が作ったされる公卿塚古墳出土の埴輪が示すように、遙か朝鮮半島との交渉もあったことが想定されています。そうした歴史的背景をもつ本庄市は多くの貴重な埋蔵文化財にめぐまれ、本庄台地を中心に旧石器時代から近世まで多様な遺跡が分布しています。

本書に報告した旭・小島古墳群の発掘調査成果は、小島西土地区画整理事業にもなるものです。この土地区画整理事業は昭和63年度から始まり、現在も事業が継続中ですが、この間、さまざまな開発にともない数多くの発掘調査が実施されてきました。その結果、旭・小島古墳群にはすでに消滅している古墳が多数存在すること、古墳群の形成期間が4世紀から7世紀にかけて300年以上に及ぶこと、古墳群の範囲が1km四方以上の広大なものであることなどの事実が判明し、県内でも最大規模の古墳群であることがわかってまいりました。また、古墳群の構成も、古墳時代前期における方墳群の築造を契機に、中・後期には前方後円墳や大型円墳が造営され、さらに終末期には多数の小形円墳が築かれるというようにきわめて複雑な様相を示し、学術的にも貴重な遺跡であることが認知されつつあります。

本書には、蚤影山古墳、山の神古墳のように、将来、史跡公園として整備が期待される古墳の発掘成果とともに、すでに消滅した古墳跡の調査記録も数多く取られています。

今後は、本書が学術研究の発展に資するとともに、一般にも広く活用されることによって郷土史への関心や埋蔵文化財への理解が一層深められることを願ってやみません。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、ご指導、ご教示を賜りました方々、現地調査にご協力いただいた関係諸機関、各位に心よりの御礼を申し上げます。

平成17年3月

本庄市教育委員会

教育長 福 島 巖



## 例 言

1. 本書は埼玉県本庄市小島2丁目、3丁目および大字下野堂地内に所在する旭・小島古墳群発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、本庄市小島西土地地区画整理事業にともない、事前の記録保存を目的として、本庄市教育委員会が実施したものである。
3. 発掘調査地点ごとの調査期間、調査面積、調査原因および調査担当者は、それぞれ各節の冒頭に記したとおりである。
4. 整理調査期間は以下のとおりである。  
自 平成16年4月1日  
至 平成17年1月31日
5. 整理調査および本書の編集担当者は以下のとおりである。  
本庄市教育委員会社会教育課 太田博之
6. 本書の執筆担当者および執筆分担は以下のとおりである。  
本庄市教育委員会社会教育課 太田博之 I、II、III-5~15、IV  
同 松本 完 III-1~4
7. 本書に掲載した発掘現場写真の撮影は各発掘調査担当者が行なった。
8. 本書に掲載した出土遺物、遺構および遺物の実測図ならびに写真、その他本報告に関係する資料は本庄市教育委員会において保管している。
9. 発掘調査から整理、報告書の刊行に至るまで、以下の方々から貴重な御助言、御指導、御協力を賜った。ご芳名を記し感謝申し上げます。(順不同・敬称略)

秋元 陽光 新井 端 石橋 充 稲村 繁 犬木 努 井上 裕一 入澤 雪絵  
内山 敏行 江原 昌俊 大谷 徹 賀来 孝代 加藤 一郎 風間 栄一 加部 二生  
車崎 正彦 小林 修 坂本 和俊 佐々木 幹雄 島田 孝雄 志村 哲 杉山 晋作  
清喜 裕二 滝沢 誠 鳥羽 政之 長井 正欣 中里 正憲 中沢 良一 日高 慎  
深澤 敦仁 山崎 武 若狭 徹 大熊 季広 鈴木 徳雄 外尾 常人 恋河内 昭彦  
金子 彰男 田村 誠 徳山 寿樹 長瀧 蔵康 松澤 浩一 丸山 修 矢内 勲

10. 本報告の発掘調査、整理調査および報告書の編集・刊行に関係する本庄市教育委員会の組織は以下のとおりである。

教 育 長 坂本敬信 (平成元・2年度)  
塩原 暁 (平成3～10年度)  
福島 巖 (平成11～16年度)

〈本庄市教育委員会事務局〉

事 務 局 長 荒井 茂 (平成元年度)  
金井善一 (平成2～5年度)  
荒井正夫 (平成6～8年度)  
中村 勝 (平成9年度)  
渡辺正彦 (平成10・11年度)  
倉林 進 (平成12・13年度)  
揖斐龍一 (平成14～16年度)

参 事 宮本 清 (平成2年度)  
社会教育課長 荒井正夫 (平成元年度)  
坂上英夫 (平成2～5年度)  
中島正和 (平成6～9年度)  
恩田高治 (平成10年度)  
阿部 均 (平成11・12年度)  
田中靖夫 (平成13・14年度)  
吉田敬一 (平成15・16年度)

同 課 長 補 佐 中島正和 (平成元年度) [兼務]  
吉田敬一 (平成2～6年度)  
小暮浩一 (平成7・8年度)  
中村文男 (平成9～11年度)  
福島保雄 (平成12～14年度)  
桜場幸男 (平成15・16年度)  
上野良一 (平成16年度)

文化財保護係  
係 長 中島正和 (平成元年度) [兼務]  
長谷川 勇 (平成2～6年度)  
増田一裕 (平成7～14年度)  
吉田 稔 (平成15・16年度)

文化財保護係 長谷川 勇 (平成元年度)  
増田一裕 (平成元～6年度)  
太田博之 (平成元～15年度)  
赤尾直行 (平成元～3年度)  
佐藤好司 (平成3～9年度)  
遠藤優子 (平成4～6年度)  
塩原 浩 (平成7・8年度)  
関根君江 (平成9・10年度)  
我妻浩子 (平成11～15年度)  
松本 完 (平成12～15年度)  
町田奈緒子 (平成13～15年度)  
逆井洋美 (平成16年度)

調査担当者 長谷川 勇 (平成元～3年度)  
佐藤好司 (平成3～9年度)  
増田一裕 (平成10～14年度)  
太田博之 (平成12～16年度)  
松本 完 (平成12～16年度)  
町田奈緒子 (平成13～15年度)

## 凡 例

1. 本書所収の遺跡全体図におけるX・Y座標値は国土標準座標第IX系に基づく。
2. 各遺構における方位針は座標北を示す。
3. 本書掲載の遺構図ならびに遺物実測図の縮尺は、原則的に以下のとおりである。

### 〔遺構図〕

遺構平面図…1/80・1/100・1/160・1/320

土層・遺構断面図…1/40

### 〔遺物実測図・拓影図〕

埴輪 …1/4

須恵器 …1/4

土師器 …1/4

その他のものについては、個別にスケールを示した。

4. 本書の本文中および観察表で用いた円筒埴輪の各部名称は、突帯を下から上に向かって順に第1突帯、第2突帯、第3突帯とし、各段を基部の側から口縁部に向かって順に第1段、第2段、第3段……とした。
5. 円筒埴輪観察表の「底部・巻き」の「左・右」は、基部を成形する粘土板の巻き合わせの方向を示し、製作者側（上）からみて左端を上重ねたものを「右」、右端を上重ねたものを「左」とした。
6. 円筒埴輪観察表の「底部・圧痕」の「棒状」、「木目状」等の記載はあくまでも視覚的な分類によるものである。
7. 遺構断面図の水準数値は海拔を示す。単位はmである。
8. 遺構断面図のスクリーントーンのうちストライプは地山のローム層を示し、アミは墳丘盛土層を示す。
9. 観察表中の遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人色彩研究所色票監修の新版「標準土色帖」2000年版によった。
10. 本書で使用した地形図は、国土地理院発行数値地図1/50,000「高崎」に加筆したものをを用いた。
11. 本書で使用した位置図は、本庄市発行「本庄市都市計画図（デジタル版・1/2,500対応）」に加筆したものをを用いた。
12. 本書の引用・参考文献は巻末に一括して記載した。



# 目 次

序	
例言	
凡例	
目次	
I 調査に至る経過	1
II 遺跡の環境	
1 地理的環境	2
2 歴史的環境	2
3 旭・小島古墳群の概要	6
III 調査の成果	
1 上前原13号墳	10
2 上前原14号墳	13
3 上前原15号墳	17
4 上前原16号墳	21
5 蚕影山古墳	26
6 山の神古墳	33
7 御手長山古墳	55
8 堂場12号墳	78
9 堂場13号墳	81
10 堂場14号墳	86
11 堂場15号墳	91
12 内出前1号墳	92
13 内出前2号墳	99
14 永不1号墳	100
15 永不2号墳	104
IV 結 語	108
引用・参考文献	
写真	

## 挿図目次

図1	周辺の遺跡	3	図40	御手長山古墳	57・58
図2	旭・小島古墳群分布図	8	図41	御手長山古墳土層断面図(2)	59
図3	調査区位置図	9	図42	御手長山古墳土層断面図(3)	59
図4	上前原13号墳	11・12	図43	御手長山古墳土層断面図(4)	60
図5	上前原13号墳土層断面図	13	図44	御手長山古墳出土円筒埴輪実測図(1)	61
図6	上前原14号墳土層断面図	14	図45	御手長山古墳出土円筒埴輪実測図(2)	62
図7	上前原14号墳	15・16	図46	御手長山古墳出土円筒埴輪拓影図(1)	63
図8	上前原15号墳土層断面図	17	図47	御手長山古墳出土円筒埴輪拓影図(2)	64
図9	上前原15・16号墳土層断面図	18	図48	御手長山古墳出土円筒埴輪拓影図(3)	65
図10	上前原15号墳	19・20	図49	御手長山古墳出土円筒埴輪拓影図(4)	66
図11	上前原16号墳土層断面図	22	図50	御手長山古墳出土朝顔形埴輪実測図	67
図12	上前原16号墳	23・24	図51	御手長山古墳出土形象埴輪実測図(1)	68
図13	蛭影山古墳	27・28	図52	御手長山古墳出土形象埴輪実測図(2)	70
図14	蛭影山古墳土層断面図(1)	29	図53	御手長山古墳出土形象埴輪実測図(3)	72
図15	蛭影山古墳土層断面図(2)	30	図54	御手長山古墳出土形象埴輪実測図(4)	73
図16	蛭影山古墳出土円筒・朝顔形埴輪拓影図	31	図55	御手長山古墳出土形象埴輪実測図(5)	74
図17	蛭影山古墳出土形象埴輪実測図	32	図56	御手長山古墳出土形象埴輪実測図(6)	75
図18	蛭影山古墳出土土器実測図・拓影図	32	図57	御手長山古墳出土形象埴輪実測図(7)	76
図19	山の神古墳土層断面図(1)	34	図58	御手長山古墳出土土器実測図	77
図20	山の神古墳	35・36	図59	堂場12号墳土層断面図	78
図21	山の神古墳土層断面図(2)	37	図60	堂場12号墳	79・80
図22	山の神古墳土層断面図(3)	38	図61	堂場13号墳土層断面図(1)	81
図23	山の神古墳出土円筒埴輪実測図(1)	39	図62	堂場13号墳土層断面図(2)	82
図24	山の神古墳出土円筒埴輪実測図(2)	40	図63	堂場13号墳・15号墳	83・84
図25	山の神古墳出土円筒埴輪実測図(3)	41	図64	堂場14号墳土層断面図(1)	86
図26	山の神古墳出土円筒埴輪拓影図(1)	42	図65	堂場14号墳	87・88
図27	山の神古墳出土円筒埴輪拓影図(2)	43	図66	堂場14号墳土層断面図(2)	89
図28	山の神古墳出土円筒埴輪拓影図(3)	44	図67	堂場14号墳出土土器実測図	90
図29	山の神古墳出土円筒埴輪拓影図(4)	45	図68	堂場15号墳土層断面図	91
図30	山の神古墳出土朝顔形埴輪実測図(1)	46	図69	内出前1号墳土層断面図	92
図31	山の神古墳出土朝顔形埴輪実測図(2)	47	図70	内出前1号墳	93・94
	拓影図(1)	47	図71	内出前1号墳出土土器実測図	95
図32	山の神古墳出土朝顔形埴輪拓影図(2)	48	図72	内出前2号墳	97・98
図33	山の神古墳出土形象埴輪実測図(1)	49	図73	内出前2号墳土層断面図	99
図34	山の神古墳出土形象埴輪実測図(2)	50	図74	永不1号墳	101・102
図35	山の神古墳出土形象埴輪実測図(3)	51	図75	永不1号墳土層断面図	103
図36	山の神古墳出土形象埴輪実測図(4)	52	図76	永不1号墳出土土器実測図	104
図37	山の神古墳出土形象埴輪実測図(5)	53	図77	永不2号墳土層断面図	104
図38	山の神古墳出土土器実測図	54	図78	永不2号墳	105・106
図39	御手長山古墳土層断面図(1)	56			



## I 調査に至る経過

昭和63年本庄市長茂鏡良平から、市内小島地区において「小島西土地画整理事業」の計画があり、これに関係する埋蔵文化財の所在及び取扱いについての協議の申し入れが本庄市教育委員会に出された。本庄市長から協議のあった「小島西土地画整理事業計画」は、本庄市大字小島、下野堂、万年寺地区におよぶ大規模なものであり、道路、下水道の整備計画域も広範であることから、当該事業地に埋蔵文化財が存在する場合、相当程度の影響が及ぶことが予測された。本庄市教育委員会事務局では、これを受けて、埼玉県教育委員会発行の「本庄市遺跡分布地図」をもとに、当該開発計画予定地における埋蔵文化財包蔵地の所在を確認した。その結果、同地には埼玉県選定重要遺跡である旭・小島古墳群(53-171)の所在することが判明した。

本庄市教育委員会では、このような状況を踏まえ、ただちに旭・小島古墳群の保存について本庄市と協議を開始した。その結果、本庄市教育委員会教育長と本庄市長との間で、旭・小島古墳群の保存に関する「本庄都市計画事業小島西土地画整理事業地内埋蔵文化財に関する協定書」が締結され、1)事業施行区域は埼玉県選定重要遺跡の範囲内であることから、現在墳丘を有する古墳のみならず事業区全域協議対象とすること、2)本庄市指定文化財131号古墳(万年寺八幡山古墳)、132号古墳(万年寺つつじ山古墳)、136号古墳(蜷影山古墳)、137号古墳(山の神古墳)の4古墳は保留地として公有地化を図るとともに、周堀についても可能な限り現状保存を図ること、3)前項に掲げた古墳以外については、古墳跡その他すべての遺構についてを発掘調査の対象とし、確実な記録保存の措置を講ずること、4)調査の結果重要な遺構が発見された場合は、保存措置について協議すること等が謳われた。

この協定書の締結を経て、本庄市教育委員会は、昭和63年8月25日付け本教社発第229号で、埼玉県教育委員会あてに当該開発計画にかかる埋蔵文化財の取り扱いについての協議を行った。埼玉県教育委員会からは平成63年12月28日付け教文第847号で「埋蔵文化財の取り扱いについて」の回答があり、1)本庄市教育委員会教育長と本庄市長が締結した「本庄都市計画事業小島西土地画整理事業地内埋蔵文化財に関する協定書」との通り実施すること、2)ただし、市指定文化財135号古墳(前の山古墳)の石室については調査終了後、136古墳(蜷影山古墳)、137号古墳(山の神古墳)の存在する公有地に復元保存し、活用を図ること、3)調査中に重要な遺構等が確認された場合には、別途協議をおこなうことの指導があった。

現地での発掘調査は平成元年4月から開始し、平成15年度現在もお断続的に実施している。調査原因は、道路・下水道建設、調整池整備、個人住宅その他建造物の建設、曳家、宅地、駐車場その他の造成工事等開発行為に伴うものが主であるが、131号古墳(万年寺八幡山古墳)、132号古墳(万年寺つつじ山古墳)等公有地化の図られた区域は、公園としての土地利用が計画されており、これらについては保存整備を目的とした範囲確認調査も実施している。整理調査は発掘調査と平行しつつ平成元年度から断続的に行っている。

なお、各地点の発掘調査ならびに整理調査期間、調査担当者、調査原因・目的、調査面積等の情報は各節の冒頭に記したとおりである。

## II 遺跡の環境

### 1 地理的環境

本市の地形は利根川右岸に広がる低地と、市街地をのせる台地とに区分される。低地部には利根川の氾濫による自然堤防が発達し、同川沿いに妻沼低地、加須低地へと連続している。いっぽう、台地部は身馴川扇状地と神流川扇状地との複合地形からなり、本庄台地と呼称され、立川期に対応するものとされる。身馴川扇状地は西側を第三系の残丘である生野山、大久保山といった児玉丘陵に、東側を松久丘陵、櫛引台地によって画され、身馴川、志戸川などが北東方向へ流れている。河川の周辺は沖積化が著しく、自然堤防状の微高地が発達し、遺跡の多くはこの上に立地している。神流川扇状地は群馬県鬼石町浄方寺付近を扇頂部とし、扇端部は児玉郡上里町大字金久保から本市大字鶴森にかけて広がっている。この扇状地を開析して流れる中小河川には女廻川、男廻川などがあり、周辺には沖積地の形成が顕著である。本書に報告する旭・小島古墳群は、本市大字小島から上里町大字保原にかけての本庄台地扇端部に立地している。台地縁部は東流する小山川の浸食により比高差6～10mの段丘崖が発達する。また、周辺の台地上には南南西から北北東の方向に幾筋かの埋没谷があり、狭長な微低地の形成が見られる。

### 2 歴史的環境

児玉地域は地理的にも上野国に隣接し、武蔵国にありながら過去において常に隣国の影響下にあった地域である。また、古墳時代においては美里町南志戸川遺跡、同日の森遺跡などにみる畿内系、東海系土器の流入、児玉町ミカド遺跡で推定された初期須恵器窯の存在など当該期における流通・生産の中心地としての地位を占めていたと考えられる。さらに、和泉期における甕の導入に見るような先進性や本市公卿塚古墳の格子タタキ技法による円筒埴輪から想定される渡来系工人の移入も含め、その地域的特殊性についてはすでに多くの議論がなされている。本節ではこれらの成果をふまえつつ、児玉地域の古墳の変遷を概観し、旭・小島古墳群をめぐる歴史的環境の理解としたい。

児玉町鷺山古墳は、現在、児玉地域において最古とされる古墳である(坂本1986)。女廻川中流域の小丘陵上に位置し、手焙形土器の破片が採集されたことにより、以前から有力な古式古墳として注目されてきたが、その後の調査の結果、全長60mの前方後方墳となることが判明した。特異な形状を呈する前方部、出土土器などから、築造は4世紀中葉以前に遡るものとされ、県内でも最古の古墳として位置づけられるようになった。しかし、出土した底部穿孔壺形土器は口縁部にも円孔を穿ち、外面調整にはハケを主体的に用いている。このことから、底部にのみ穿孔を有し、ナデ調整による壺形土器に比べ、より儀器化が進行し、かつ埴輪への傾斜を深めた段階のものとする評価も可能であろう。鷺山古墳の帰属時期は、なお検討の余地を残すといえる。

美里町長板聖天塚古墳(径50m)は志戸川右岸の丘陵上に占地する円墳である。粘土槨と木棺直葬の計6基の埋葬施設から稷雲文方格規矩鏡、獸首鏡、滑石製模造品などが出土している。築造時期は鏡の型式、精製品を含む滑石製の刀子の形態などから、前期後半を降らないと考えられる。また、近隣の美里町川輪聖天塚古墳は長副化の進行した特異な壺形埴輪を持ち、長板聖天塚古墳に次ぐ時期の



築造とされる。大久保山丘陵上に立地する本庄市北堀前山2号墳は従来、径28mの円墳とされてきたが本庄市教育委員会による2・3次調査の結果一辺30m前後の方墳となることが確認された（南毛古墳文化研究会2001・松本2002）。埋葬施設に粘土槨を有し、直刃鎌・剣・刀子等が出土しているほか周堀から土師器甕が検出されている。この北堀前山2号墳と同一尾根上の上位に位置する本庄市北堀前山1号墳は、その立地から築造時期は北堀前山2号墳を遡るものと推定される。現在は径30～40mの円墳とされるが、墳裾から南西方向の尾根上に若干の高まりを認めることから、全長60～70m程度の前方後円墳となる可能性も考えられている。

中期前葉から中葉にかけては生野山丘陵に児玉町生野山將軍塚古墳(径60m)、児玉町金鑽神社古墳(径68m)、女堀川流域に本庄市公卿塚古墳(径60m)などの大型の円墳が相次いで築造される。児玉地方で古墳がもっとも大型化するのはこの段階であり、いずれも定型化した埴輪を持ち、生野山將軍塚古墳、金鑽神社古墳では段築・葦石の存在も確認されている。また、生野山將軍塚・金鑽神社・公卿塚の3古墳では埴輪に格子タタキ技法の存在することが知られている。生野山將軍塚での実態は明らかではないが、公卿塚ではヨコハケ及びナデ調整によるものと共伴し、金鑽神社古墳ではヨコハケを欠き、一次タテハケのみのものがこれに加わる。格子タタキ技法による埴輪についてはこれまでも初期須恵器、半島系軟質土器などとの系譜的な関係が論じられ、製作に渡来系工人の関与があった可能性は高い。

これら3古墳に比べやや規模の小さい志戸川流域の美里町志戸川古墳(径40m)、小山川上流域の児玉町長沖157号墳(径32m)ではⅢ式の円筒埴輪を出土し、格子タタキ技法を認めない。なお、公卿塚古墳では盾、家、志戸川古墳では短甲形埴輪の草摺部分が出土している。形象埴輪群全体の組成は明らかではないが、定型化した円筒埴輪とともに形象埴輪も導入されている事実を確認できる。詳細は不明ながら志戸川左岸の水田地帯に存在する美里町道瀬山古墳(径40m)、同勝丸稲荷古墳(径30m)もこの頃の築造と推定される(美里町1986)。

中期後葉には前段階のような直径60mクラス的大型円墳の築造は認められず、首長墳は小山川上流の長沖14号墳(径34m)、生野山丘陵の生野山9号墳(径42m)など30～40m台の円墳となる。なお、生野山9号墳では人物埴輪、馬形埴輪の存在が確認され、同種の埴輪としては県内における出現期の資料である。また、古式群集墳もこの段階に形成を開始する。美里町塚本山古墳群の塚本山73号墳(径12m)、同77号墳(径14m)、本庄市塚合古墳群の本庄東小学校1号墳(径19m)、同2号墳(径12m)、同旭・小島古墳群の三空山2号墳(径22m)、上前原5号墳(規模未詳)、杉の根7号墳(規模未詳)などいずれも10～20m前半台の小型円墳で、Ⅳ式の2条突帯3段構成の円筒埴輪を樹立し、TK208段階並行の土器を伴う。美里町広木大町古墳群、本庄市西五十子古墳群、同東五十子古墳群、岡部町白山古墳群などはやや遅れて、Ⅴ式の円筒埴輪とTK23・47段階並行の土器を出土する群集墳である。さらに、MT15段階に造営が開始される神川町青柳古墳群では、いち早く横穴式石室を導入することが知られている。

後期後葉段階に入るとそれまで古墳の存在が知られていなかった地域にも新たに築造が開始される。とくに神流川流域の植竹・関口・元阿保・四軒在家・大御堂などの古墳群は周辺地域の開発の進展にともなってこの時期新たに出現してくる群集墳である。広木大町古墳群、塚本山古墳群、旭・小島古墳群、塚合古墳群、西五十子古墳群、東五十子古墳群などにも横穴式石室を埋葬施設とする小型

円墳が認められ、古式群集墳中に混在もしくは隣接するように群在する。

また、後期段階には首長墓として前方後円墳が採用されるようになる。小山川上流域では見玉町長沖古墳群の長沖25号墳(40m)、同31号墳(51m)、同秋山古墳群の秋山諏訪山古墳(60m)、同生野山古墳群の生野山鏡子塚古墳(58m)、生野山16号墳(58m)、小山川中流の岡部町四十塚古墳群の寅稲荷古墳(52m)、本庄市塚合古墳群中の大林二子山古墳(規模未詳)、同旭・小島古墳群の下野堂二子塚古墳(規模未詳)、神流川流域の神川町青柳古墳群の白岩鏡子塚古墳(46m)、中新里諏訪山古墳(42m)などが知られる。

終末期には岡部町前原愛宕山古墳(辺37m)のような方墳と旭・小島古墳群の上里町浅間山古墳(径38m)のような円墳とが前方後円墳に代わる首長墓として採用されている。また各地の群集墳も後期後葉段階からの連続的な造営が確認できる。

埴輪生産遺跡は、見玉地域で4箇所を確認している。また、未確認ながら埴輪生産遺跡の所在を想定できる地点が複数存在している。この地域では、鴻巣市生田塚窯や深谷市割山窯のような大規模な操業は見られず、狭い地域に小規模な生産遺跡が散在する点に特色がある。

美里町宇佐久保埴輪窯跡は、上武山地の北東側に連なる丘陵の端部に位置し、南北を二つの小谷によって挟まれ、東方へ延びる舌状丘陵の北側裾部に占地している。埴輪窯跡は、採土により掘削された丘陵の断面で、いずれも焼土層の落ち込みとして確認されたもので、窯体の規模や構造が判明するものはない。分布調査において確認できた窯跡は12基で、掘削による丘陵断面はさらに東西方向に延長していたが、他には窯跡を認めなかったことから、報告者はこの丘陵斜面に構築された窯の総数は、調査時に確認した12基を上回らないと予測している(山川ほか1981)。

見玉町八幡山埴輪窯跡は、かつて県立見玉高等学校の敷地内に所在した埴輪窯跡群である。1930年、八高線敷設工事の土取り中に発見され、その際、人物埴輪、馬形埴輪などが出土した(埼玉県1982)。その後、1961に高等学校の校地拡張工事に伴い、2基の埴輪窯を調査している。窯は「半地下式有段登窯」とされ、円筒埴輪、女子人物埴輪の頭部を検出している(柳1961)。現在、遺物の所在が明らかではなく、窯の操業年代、埴輪の型式的特徴などは不明である。

本庄市赤坂埴輪窯跡は、女堀川右岸の本庄台地北東端部に位置する。工場建設に際する整地作業中に、焼土とともに馬形埴輪が出土し、また、その後、工場内に機械を設置するため掘削をおこなったところ、ふたたび焼土とともに大型の馬形埴輪と家形埴輪を出土したことなどから埴輪窯跡の存在が想定されている(菅谷1976c)。本庄市教育委員会では、この際に出土したと考えられる家形埴輪片1点を保管している。

見玉町蛭川埴輪窯跡は、町立共和小学校の校庭を整地した際に、多量の埴輪と焼土が出土したとき、埴輪窯が存在した可能性が考えられている(鈴木1983)。遺跡は、女堀川中流の右岸に発達した自然堤防上に占地する。すでに一帯の耕地整理が終了しているため、地形の原状は著しく変化し、出土地点の詳細を確認することは難しく、現在では正確な出土地点も特定できなくなっている。その後、同小学校敷地内の近接地点でも発掘調査を実施しているが、埴輪や焼土の出土を確認していない。埴輪窯跡が実在した場合でも、さほど広範囲に分布するものではないことが予測される。

なお、実態は全く不明ながら、美里町から大里郡岡部町にかけての山崎山周辺にも埴輪生産遺跡の存在を指摘する意見がある(橋本・佐々木ほか1980)。



### 3 旭・小島古墳群の概要

旭・小島古墳群は本庄台地北縁部に立地し、本庄市大字小島、同万年寺から児玉郡上里町大字神保原にかけて分布する。群中央に南南西から北北東方向へ伸びる埋没谷が存在し、現在でも微低地を形成しており、古墳群はこの微低地を隔てて大きく東西二群に分れる。前方後円墳、帆立貝式古墳、円墳、方墳の混成による古墳群で、前期から終末期まで、断続的な造営を認める。以下、時期を追って古墳群の形成過程を概述する。

旭・小島古墳群の形成は西群北半に群在する方墳の築造をもって開始されると考えられる。現在まで20基余りが検出されている。

万年寺つつじ山(辺25m)は、高さ1.7mの墳丘が残存し、確認調査時に、表土直下で、刀子、斧、直刃鎌、短冊形鉄斧などの石製模造品が出土している。出土地点は墳丘中心から北西方向に大きく外れる位置にあり、埋蔵施設その他の遺構に伴う状況とは認定できない。前方後円墳共通編年4期に該当すると考えられる(南毛古墳文化研究会2001)。

万年寺10号墓(辺24m)では、周堀の立ち上り部から石剣が出土している。碧玉製とされ、埋蔵施設に伴う状況では確認されていないが、型的には通有の古墳副葬品のうちに見られるものと同形である。

林7号墓、同8号墓は、1辺30mを超える大型の方墳になると推測され、群集墳を主体的に構成するような小型円墳をはるかに凌ぐ規模を有する。また、林11号墓では木棺直葬の埋葬施設の一部が検出されている。

これらの方墳は、これまで「方形周溝墓」として一括される場合が多かった(並木1976・菅谷1976 a・埼玉県1982)。しかし、円墳とされてきた本庄市北堀前山2号墳が、最近の調査の結果、一辺25m方墳である事実が確認されたことや、万年寺つつじ山、万年寺10号墓などに見るように低墳丘方墳の副葬遺物に古墳副葬品と同様の品目が含まれていること、さらに前期の小型方墳群が列島各地に確認できることなどを考慮すると、旭・小島古墳群中の方墳についても「方形周溝墓」とする従来の理解に対して再検討が必要である。

万年寺八幡山古墳(径43m)は、埋葬施設に箱式石棺を有することが知られていたが(本庄市1986)、近年の確認調査で石棺内から鉄剣2本が出土した。この箱式石棺は墳丘中心を大きくはずれる位置にあることから、同墳には未確認の中心主体部が存在すると考えらる。埴輪を伴わず、数次の周堀調査によっても遺物を検出できていないため築造時期の詳細は不明であるが、前期に遡る可能性も考えられる(南毛古墳文化研究会2001)。南東側に隣接する万年寺つつじ山古墳とは双方の周堀が重複する関係にあるが、覆土の切り合いは確認できていない。

中期中葉に属する古墳は明らかではない。当該期の児玉地域は首長墓に本庄市公卿塚古墳(径65m)、児玉町金鎖神社古墳(径68m)、同生野山將軍塚古墳(径60m)、同長沖157号墳(径32m)、美里町志渡川古墳(径40m)などの大・中型円墳の存在が目立つが、現状において旭・小島古墳群には中期の有力古墳が認められない。また、上記の諸古墳にはすでに埴輪の樹立も認められるが、旭・小島古墳群では埴輪の導入も他に遅れるようである。

中期後葉には群集墳の築造が開始され、埴輪も導入される。三笠山2号墳(径43m)では、2次調整B種ヨコハケの円筒埴輪に和泉後半期の土師器内斜口縁杯が共伴する。また、上前原5号墳(径26

m)でも2次調整B種ヨコハケの円筒埴輪を備えることが判明しており、同時期には東群においても確実に古墳の造営が開始されている。円筒埴輪は2条突帯3段構成の小型品で、半円形の透孔をもつ。家、人物、馬などの形象埴輪は確認できない。北浦3号墳は埴輪をもたないが、出土した直立口縁をもつ土師器は、典型的な坏蓋模倣坏出現以前の型式で、和泉期後半段階に該当し、築造時期は中期後葉に遡る(太田1990)。さらに、出土遺物がなく所属年代を確定できない小型円墳の中にも、当該期の築造と推測される事例が存在する。

後期初頭においても群集墳の造営は継続し、三笠山8号墳(規模不詳)では円筒埴輪、朝顔形埴輪とともに家、女子人物、男子武装人物、盾持人物、馬、鳥など豊富な形象埴輪が加わっている。武装人物は埼玉稲荷山古墳出土例に酷似した肩庇付冑の表現があり注目される。この後期初頭から前半にかけては三笠山7号墳(29m)、三笠山9号墳などの帆立貝式古墳を中核とし、三笠山1・3～6号墳号墳、杉ノ根7号墳など低平な墳丘と竪穴系埋葬施設を有する小規模な円墳が多数築造され、前段階からの連続的な群集墳造営を認める。

後期後半には東群に大型円墳が集中するようになる。小島御手長山古墳(径42m)はその中で最大の規模を有し、角閃石安山岩の加工丸石を用いた横穴式石室が検出されている。副葬品に挂甲、直刀、鉄鏃、馬具、などがあり、埴輪は円筒、朝顔、家、人物、大型の馬などが出土している。隣接する坊主山古墳(径36m)、山の神古墳、蛭影山古墳、前の山古墳、堂場13号墳も、埋葬施設に横穴式石室を備え埴輪を樹立する古墳で、築造時期は後期のうちでもとくに末葉段階に集中すると考えられる。坊主山古墳では直刀、刀装具、鉄鏃、玉類、前の山古墳では耳環、ガラス玉が出土し、また、山の神古墳、蛭影山古墳、前の山古墳では段築、葦石の存在が確認されている。いっぽう、西群の上里町側にも神保原浅間山古墳(径30m)があり、埴輪を備え、横穴式石室からは直刀、鉄鏃、耳環、玉類のほか銅鏡が出土している。

下野堂二子山古墳は旭・小島古墳群中唯一の前方後円墳である。墳丘はすでに削平を受け段築、葦石、埋葬施設などの状況は不明であるが、航空写真、地籍図の分析から全長60m前後の規模と推定される。試掘調査では年代を示す資料が得られていないが、埴輪が確認されないことを根拠に埴輪生産停止後の築造とすれば後期末葉の時期が考えられる。

終末期古墳には、下野堂開拓1号墳(径22m)、下野堂御手長山古墳(径20m)、堂場地区に集中する堂場1～9号墳など、不整形の周堀をめぐらす直径10～20m前半の円墳が知られる。下野堂開拓1号墳(径22m)では石室攪乱層からは鉄製の金交具、刀子、釘が出土し、石室前底部から大量の土師器・須恵器片のほか青銅製の巡方3点、丸柄2点が検出されている。堂場1～9号墳では7世紀前半から後半代までの土器が相伴しており長期間の追葬が想定される。終末期の有力な古墳には方墳を採用する地域もあるが、群内での所在は現状で確認できない。

なお、三笠山古墳は直径64m、高さ3.2m、周堀幅26mを測る群内最大の大型円墳であったが、全面的な発掘調査にもかかわらず埋葬施設の所在を確認できていない。調査前の墳丘高は3m強で、墳丘径と比較してきわめて低平であったことを考えると、本来の墳丘が、後代に埋葬施設とともに削平を受けたことも想定される。しかし、墳丘、周堀からの出土遺物は皆無であり、埋葬行為自体が施行されなかった可能性も否定できない。調査では、墳丘構築土中に火山噴出物と思われる灰層の堆積を検出している。

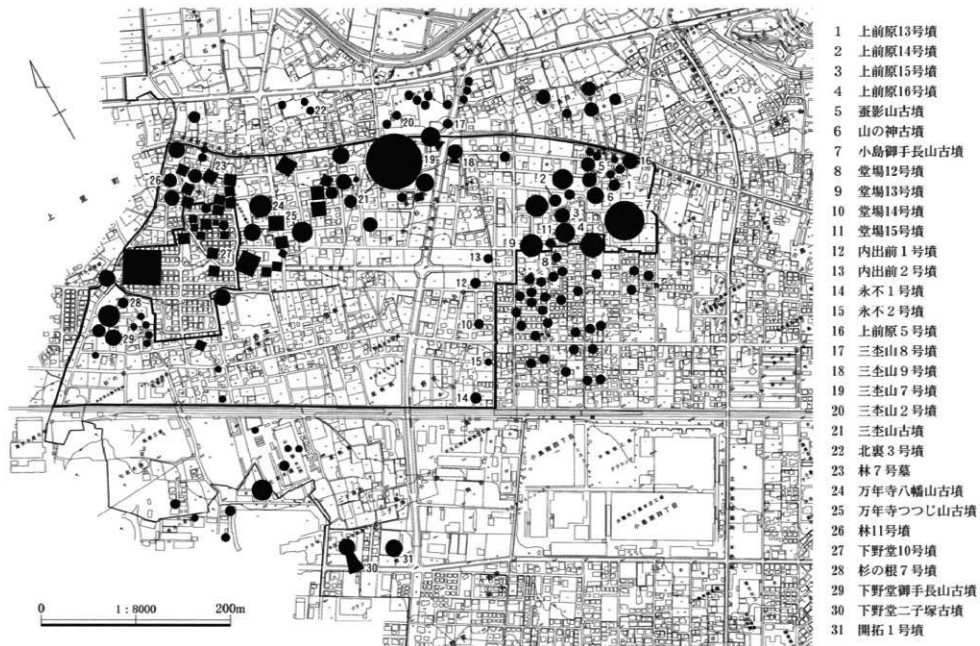


図2 旭・小島古墳群分布図

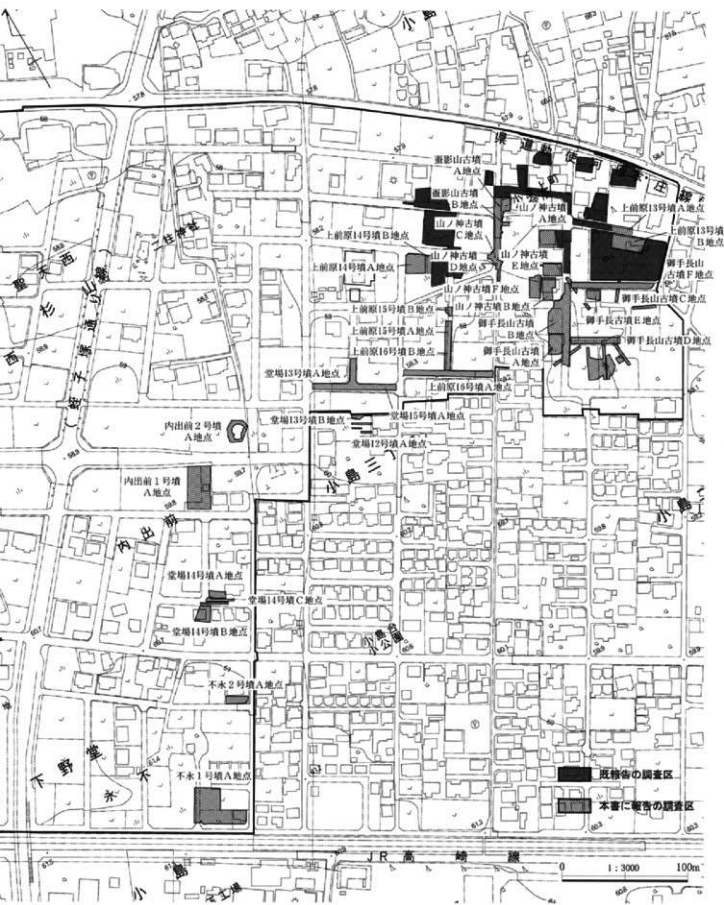


図3 調査区位置図

### III 調査の成果

#### 1 上前原13号墳

##### 〔A地点〕

調査期間	平成3年5月22日～平成3年5月27日
調査面積	240㎡
調査原因	区画整理に伴う市道建設
調査担当	本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司
備考	同一調査区内で上前原1号墳の周堀を検出〔上前原1号墳B地点〕

##### 〔B地点〕

調査期間	平成8年9月24日～平成8年11月23日
調査面積	2,100㎡
調査原因	区画整理に伴う宅地造成
調査担当	本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司
備考	同一調査区内で上前原1号墳の周堀〔上前原1号墳C地点〕および御手長山古墳の周堀〔御手長山古墳F地点〕を検出

##### (1) 遺構

本庄市小島2丁目地内において、中心をX=27,490、Y=-59,275付近におく。周囲には西側に上前原1号墳、山の神古墳、南西側に御手長山古墳が所在する。調査着手の時点で墳丘盛土を完全に失っており、確認調査によってはじめて所在が判明した。A・B地点の調査により全体の1/4前後を検出した。平面形が不整な円形であるため必ずしも正確ではないが、墳丘径17m前後の円墳と推定される。表土が直接ローム層を被覆する状態で、墳丘盛土、旧表土とも完全に失われている。埋葬施設の痕跡は見られない。

周堀の立ち上がり内外ともかなり乱れており、周堀幅にはかなりの広狭が見られる。周堀底面および斜面にも複雑な凹凸が見られる。西側には周堀の途切れる箇所があり、通路状の遺構が存在した可能性がある。A地点では掘り込みが浅く、緩やかな落ち込みとなっている。B地点では南側で著しく幅を増し、深さも最大となる。確認面での周堀上幅は、A地点での最大5.0m、B地点での最大5.4m、深さはA地点での25cm、B地点で50cmを測る。

周堀覆土は11層に分けられる。1層中にはAs-Bの混入が認められる。上層の2～4層まではローム粒子を少量含む黒灰褐色土ないし暗灰褐色土が堆積するのに対し、下層の5～11層まではローム粒子・ブロックを多量に含む土層が堆積している。Hr-FAの堆積は確認できない。

##### (2) 遺物

周堀覆土、表土を含めて出土遺物は、時期限定できない少数の土師器片のみであった。埴輪は全く

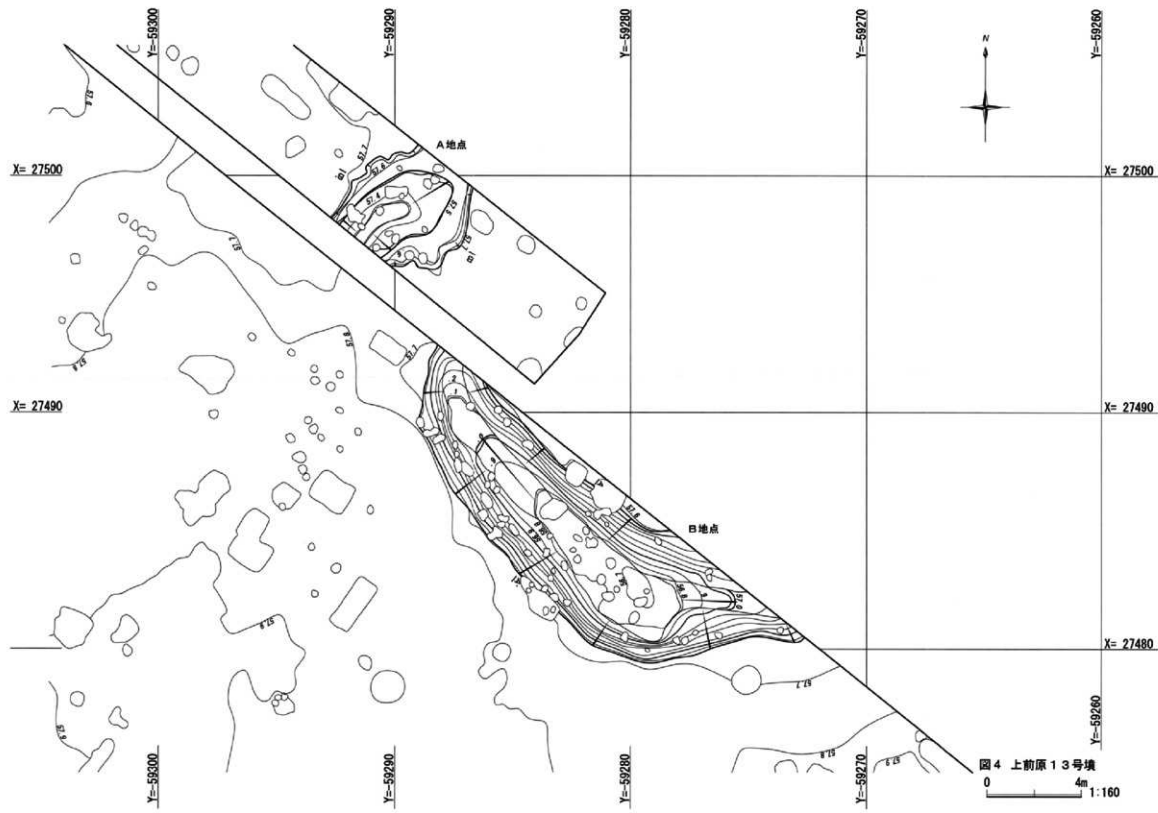
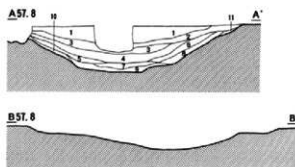


图4 上前原13号墳  
0 4m 1:160





#### 上前原13号墳土層説明

- 1 黒灰褐色土 A・Bを多量に含む。
- 2 黒灰褐色土 ローム粒子を少量含む。
- 3 暗灰褐色土 ローム粒子を少量含む。
- 4 暗灰褐色土 ローム粒子を多量に含む、炭化物ブロックを少量含む。
- 5 暗灰褐色土 ローム粒子を多量に含む。
- 6 黒灰褐色土 ローム粒子を多量に含む。
- 7 暗灰褐色土 ロームロームブロックを多量に含む。
- 8 黒褐色土 ロームロームブロックを多量に含む。
- 9 暗褐色土 ロームロームブロックを多量に含む。
- 10 褐色土 ロームロームブロックを多量に含む。
- 11 灰褐色土 ロームロームブロックを多量に含む。



図5 上前原13号墳土層断面図

出土していない。

### (3) 小 結

伴出遺物がないため構築時期は確定できない。周堀が内外ともに不規則に広がり、墳丘平面形が不整な円形になることや埴輪をもたないことから、7世紀まで降下する可能性が考えられる。

## 2 上前原14号墳

### [A地点]

調査期間	平成9年7月29日～平成9年8月8日
調査面積	243㎡
調査原因	区画整理に伴う宅地造成
調査担当	本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司

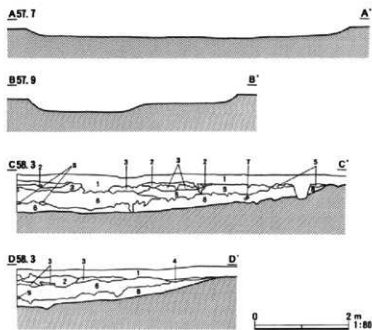
### [B地点]

調査期間	平成15年4月3日～平成15年4月8日
調査面積	360㎡
調査原因	区画整理に伴う宅地造成
調査担当	本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 太田博之・松本完・町田奈緒子
備 考	同一調査区内で上前原3号墳の周堀を検出 [上前原3号墳C地点]

### (1) 遺 構

本庄市小島3丁目地内にあって、中心をX=27,540、Y=-59,450付近におく。周囲にはやや距離をおいて北東側に前の山古墳(上前原4号墳)、東側に上前原3号墳、南側に上前原15号墳が所在する。調査着手の時点で墳丘盛土を完全に失っており、確認調査によってはじめて所在が判明した。A・B地点の調査により全体の1/3前後を検出した。表土層は現地表下17～34cmの厚さを測る。とくにA地





上前原14号墳B地点土層説明 [C-C'・D-D']

- 1 表 土
- 2 暗褐色土 1層に近いが、ややローム多く、色調明るい。旧耕作土。
- 3 暗褐色土 2層に近いが、黒褐色土が多い。2・5層土の混合土。
- 4 暗褐色土 1・6層土の混合土。
- 5 黒褐色土 古墳周溝覆土に通常の黒褐色土にロームもしくは3層土がかなり混入する。
- 6 黒褐色土 古墳周溝覆土に通常の黒褐色土。中央は黒褐色土の純層に近いが、縁に寄るにつれて黒褐色土減少する。上下の境は著しく乱れる。
- 7 褐色土 ロームブロック。
- 8 褐色土 黒褐色土とロームの不均質な混合土。

図6 上前原14号墳土層断面図

点では擾乱が随所に及んでおり、遺構の残存状態は良好ではない。墳丘径15m前後の円墳と推定される。

表土が直接ローム層を被覆する状態であり、墳丘盛土、旧表土ともに失われている。埋葬施設の痕跡は見られない。

周堀墳丘側は比較的整った円弧を描くが、外側はかなり乱れており、周堀幅に広狭が見られる。A地点北西縁では著しく幅を増し、本来の周堀外形を推定することが困難である。確認面での周堀上幅は、A地点の広がった部分で6.9m、細い部分では3.2mを測る。周堀の断面形は船底形に近く、A地点では堀底に凹凸が目立つ。深さは20～52cmである。

周堀覆土は8層に分けられる。黒褐色土とロームの不規則な混合土である8層は、周堀底の第一次堆積土、その上に旧表土の黒褐色土を主とする5・6層が堆積し、周堀はほぼ埋まり切ったようである。As-B、Hr-FAの堆積は確認できない。

## (2) 遺 物

周辺を含めて遺物は、少数の時期限定できない土器器小片のみであった。

## (3) 小 結

伴出遺物がなため構築時期は確定できないが、A地点北西縁で周堀が不規則に大きく広がり、不整な形態になるかに見え、また埴輪が全く出土していないことからすれば、構築時期は7世紀以降になる可能性が考えられる。

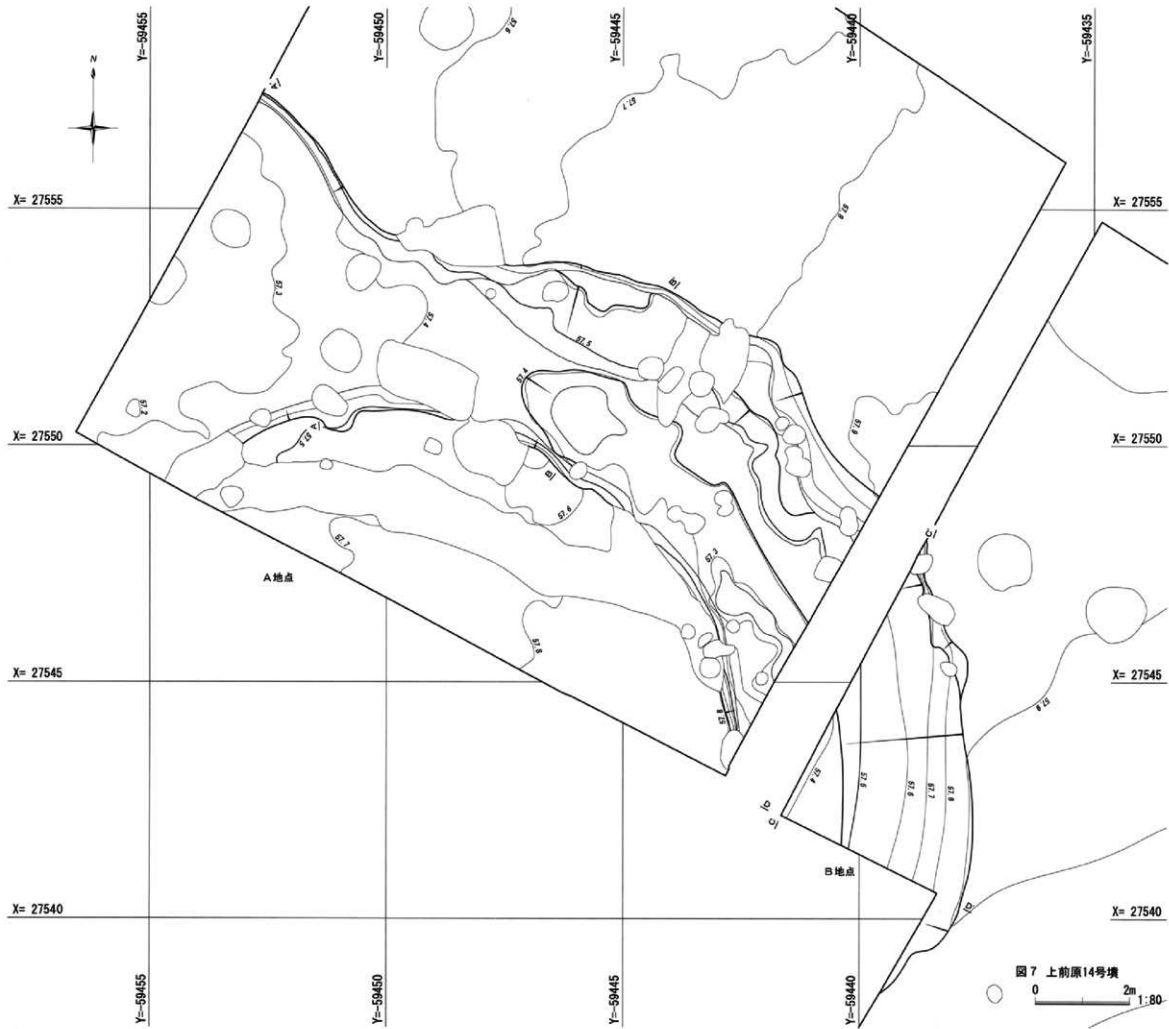


图7 上前原14号墳

0 2m 1:80



### 3 上前原15号墳

#### [A地点]

調査期間 平成14年5月28日～平成14年5月30日

調査面積 195㎡

調査原因 区画整理に伴う市道建設

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 太田博之・松本完・町田奈緒子

備考 同一調査区内で上前原16号墳の周堀を検出 [上前原16号墳B地点]

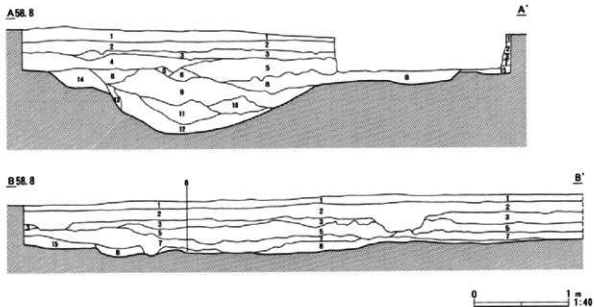
#### [B地点]

調査期間 平成15年6月5日～平成15年6月9日

調査面積 30㎡

調査原因 区画整理に伴う市道建設

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 太田博之・松本完・町田奈緒子



上前原15号墳B地点土層説明 [A-A'-B-B']

- |  |  |
|--|--|
| 1 現道の敷砂利                                     | 8 褐色土 5層に近いが、ロームがかなり多い。下部にロームブロックが集中する。    |
| 2 暗褐色土 やや粒子の粗い暗褐色土。旧耕作土。                     | 以下15層まで15号墳周堀及び隣堀内土壌面土。                    |
| 3 褐色土 1層に比し、色調が明るく、所々粒径の大きいAs-Aが集塊する。        | 9 褐色土 8層に近いが、さらにロームが多い。以下15層まで、磨耗した大小礫を含む。 |
| 4 褐色土 暗褐色土とロームの混合土を主に、少量の黒褐色土を含む。            | 10 褐色土 9層に近いが、ローム、礫が多い。                    |
| 5 暗褐色土 暗褐色土とロームの混合土に、同量程度の黒褐色土が混入する。粘性しまりなし。 | 11 褐色土 9層に近いが、黒褐色土が多い。                     |
| 6 暗褐色土 5層に近いが、黒褐色土が若干多い。                     | 12 褐色土 黒褐色土とロームの混合土。                       |
| 7 褐色土 5層に近いが、ロームが若干多い。                       | 13 褐色土 12層に近いが、ロームが多い。                     |
|  | 14 褐色土 4層に近いが、ロームが多い。                      |
|  | 15 褐色土 7層に近いが、ロームが多く、若干しまる。                |

図8 上前原15号墳土層断面図

## (1) 遺構

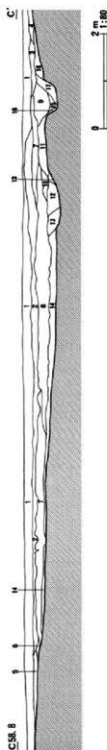
本市小島3丁目地内において、中心をX=27,505、Y=-59,455付近におく。周囲には北側に上前原14号墳、北東側に上前原3号墳が所在し、南西側に上前原16号墳と重複する。調査着手の時点で墳丘盛土を完全に失っており、確認調査によって初めて所在が判明した。遺構の残存状態は良好ではない。B地点では、周堀墳丘側は浅くなり途絶し、南東側調査区界では薄い覆土が切れ切れとなり、南西端で途切れる様が観察できた。掘り込みの浅い部分では、周堀自体すでに遺存していないのであろう。

A地点では、周堀が浅かったため、上前原16号墳の周堀外壁上部が墳丘側の弧とは異なった形で外側に広がることしか観察できず、2基の古墳周堀の重複を認識できなかった。B地点の調査時点で、改めて上前原16号墳と周堀が重複する別の古墳があることを確認した。

周堀内外壁はやや不整な弧を描き、掘り込みも浅い。A地点では、上前原16号墳周堀と重複し、外壁上部を切って構築されている。周堀は、A地点で幅5.4m、深さ15~20cm、B地点では幅3.6m、最も残りのよい北東端で深さ20cm前後である。B地点では横断面船底形を呈し、北側に向かって深くなるようであった。

A地点では7層を周堀覆土としたいが、7層は周堀推定範囲内にとどまらないため問題が残る。B地点の周堀覆土はロームに暗褐色土あるいは黒褐色土が混ざった土であり、やはり上位の層との境がかなり不明瞭であった。

B地点の北縁で長軸長3m前後の楕円形の土坑と重複している。土坑は深さ70cm前後、ゆるやかな



上前原15号墳A地点とB地点土層説明【C-C】

- |        |                                       |         |                                |
|--------|---------------------------------------|---------|--------------------------------|
| 1 表土   | 黄い黄褐色~褐色土。ガガサとして、硬を含む。見附作土。           | 9 暗褐色土  | ロームブロック、黒褐色土が均一に混じる。           |
| 2 黄褐色土 | ロームブロックを主体として、1層の土が混ざる。               | 10 褐色土  | 12層に対し黒褐色土が少ない。                |
| 3 褐色土  | ロームブロックを主体として、黒褐色土を多く混雑に含む。           | 11 褐色土  | 14層に近いが、黒褐色土が少ない。              |
| 4 褐色土  | ローム質土。2層より粒子が細かい。                     | 12 褐色土  | ロームブロックを主体として、黒褐色土、小礫など不規則に含む。 |
| 5 暗褐色土 | 表土。1層より黒褐色土を多く含む。                     | 13 褐色土  | 14層に近いが、若干ロームブロック多い。           |
| 6 暗褐色土 | 黒褐色土を多く含む。3層より若干粒子が細かい。               | 14 褐色土  | ロームブロックを主体として、黒褐色土、小礫など不規則に含む。 |
| 7 暗褐色土 | 暗褐色土、黒褐色土。2層(上部)、ロームブロック(下部)が不規則に混ざる。 | 15 暗褐色土 | 12層に近いが、黒褐色土とロームブロックが分離している。   |
| 8 褐色土  | 暗褐色~黒褐色土を主体として、ロームブロックを不規則に含む。        | 16 褐色土  | 17層と同じ。                        |
|        |                                       | 17 褐色土  | ロームブロックを主体として、黒褐色土を多く混雑に含む。    |
|        |                                       | 18 褐色土  | 17層より黒褐色土が少ない。                 |

図9 上前原15・16号墳土層断面図

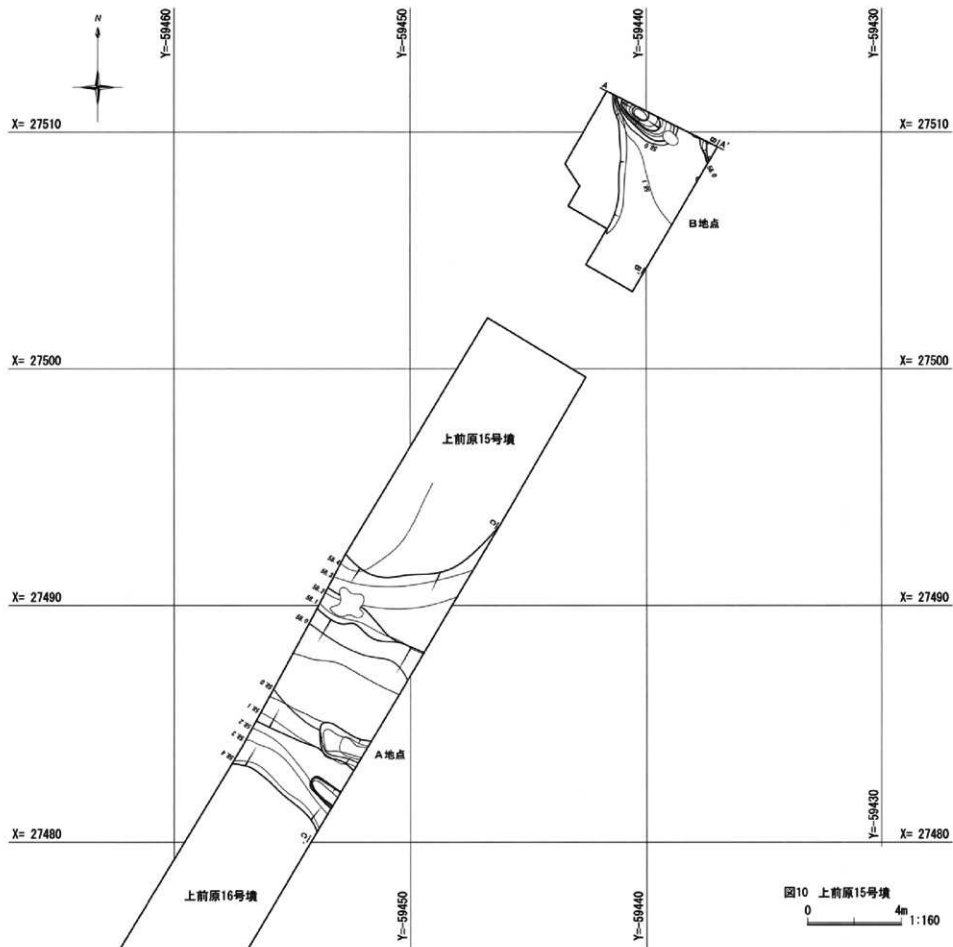


图10 上原15号墳  
0 4m 1:160



傾斜をもって掘り込まれており、土坑の覆土と周溝覆土に大きな違いは見られない。土層断面では周溝の埋没過程の初期に掘り込まれ、周溝の埋没に伴って埋まったものと見ることができる。

## (2) 遺 物

遺物は、極少数の時期限定できない土器小片のみであった。

## (3) 小 結

伴出遺物がないため構築時期を確定することはできないが、周堀の掘り込みが浅く、平面设计が不整な円形を呈するかに見えることからすれば、構築時期は7世紀以降になる可能性が考えられる。

# 4 上前原16号墳

### [A地点]

調査期間	平成3年6月13日～平成3年6月20日
調査面積	350㎡
調査原因	区画整理に伴う道路建設
調査担当	本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 長谷川勇・佐藤好司

### [B地点]

調査期間	平成14年5月28日～平成14年5月30日
調査面積	195㎡
調査原因	区画整理に伴う道路建設
調査担当	本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 太田博之・松本完・町田奈緒子
備 考	同一調査区内で上前原15号墳の周堀を検出 [上前原15号墳A地点]

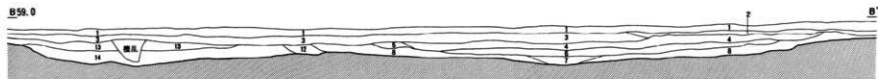
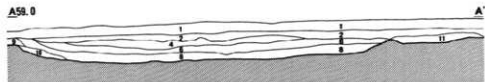
## (1) 遺 構

本庄市小島3丁目地内にあって、中心をX=27,475、Y=-59,465付近におく。北東側で上前原15号墳と周堀が重複し、やや距離をおいて西側に堂場13号墳が存在する。調査着手の時点で墳丘盛土を完全に失っており、確認調査によってはじめて所在が判明した。A・B両地点の調査によっても確認できたのは、周堀の極一部である。表土層は現地表下20～34cmの厚さを測る。遺構の残存状態は良好ではない。墳丘部は著しく歪んでいるが、B地点およびA地点東半では周堀がはっきり弧を描くこと、またこの一帯に分布する古墳の墳形はほぼ円墳のみであることなどから、円墳と見るのが最も無理がないであろう。北東―南西方向での墳丘径は20m前後と推定することができる。

B地点での所見では、表土が直接ローム層を被覆する状態であった。墳丘盛土、旧表土ともに失われており、埋葬施設の痕跡は見られない。

上述したように周堀は北東側ではおおむね弧を描くが、南西側ではとくに歪みが著しい。A地点中央では周堀は浅くなり屈曲して途切れ、さらに西側では調査区界に沿うように直線的な形状となる。平面形が不定形なのは、时期的な特徴とともに、掘り込みが浅く平面形の確認自体むづかしいことが





上前原16号墳A地点土層説明 [A-A'・B-B']

- |  |   |
|--|---|
| <p>1 灰褐色土 As-Aを多量に含みザラつく。礫(径5mm±)を含む。</p> <p>2 暗褐色土 As-Aを多量に含みザラつく。ロームブロックを多量に含み、礫(径5mm±)を含む。</p> <p>3 灰褐色土 As-Aを含みザラつく。礫(径5mm±)を含む。1層よりやや暗い。</p> <p>4 暗灰褐色土 As-Aを含みザラつく。ロームブロックを含む。</p> <p>5 暗灰褐色土 ロームブロックを少量含み、礫(径5mm±)を含む。</p> <p>6 黒灰褐色土 As-Aを含みザラつく。礫(径5mm±)を含む。</p> <p>7 暗褐色土 ロームブロックを露降り状に含む。黒色土ブロック、礫(径5mm±)を含む。</p> | <p>8 暗黄褐色土 ロームブロックを多量に含み、礫(径5mm±)を含む。</p> <p>9 暗褐色土 ロームブロックを露降り状に含み、礫(径5mm±)を含む。</p> <p>10 暗黄褐色土 ロームブロックを多量に含み、礫(径5mm±)を含む。</p> <p>11 暗黄褐色土 ロームブロックを露降り状に含み、礫(径5mm±)を含む。</p> <p>12 暗褐色土 ロームブロックを含む。</p> <p>13 暗灰褐色土 As-Bを含みザラつく。褐色土ブロックを露降り状に含む。</p> <p>14 暗褐色土 ロームブロックを含む。12層より暗い。</p> |
|--|---|

図11 上前原16号墳土層断面図

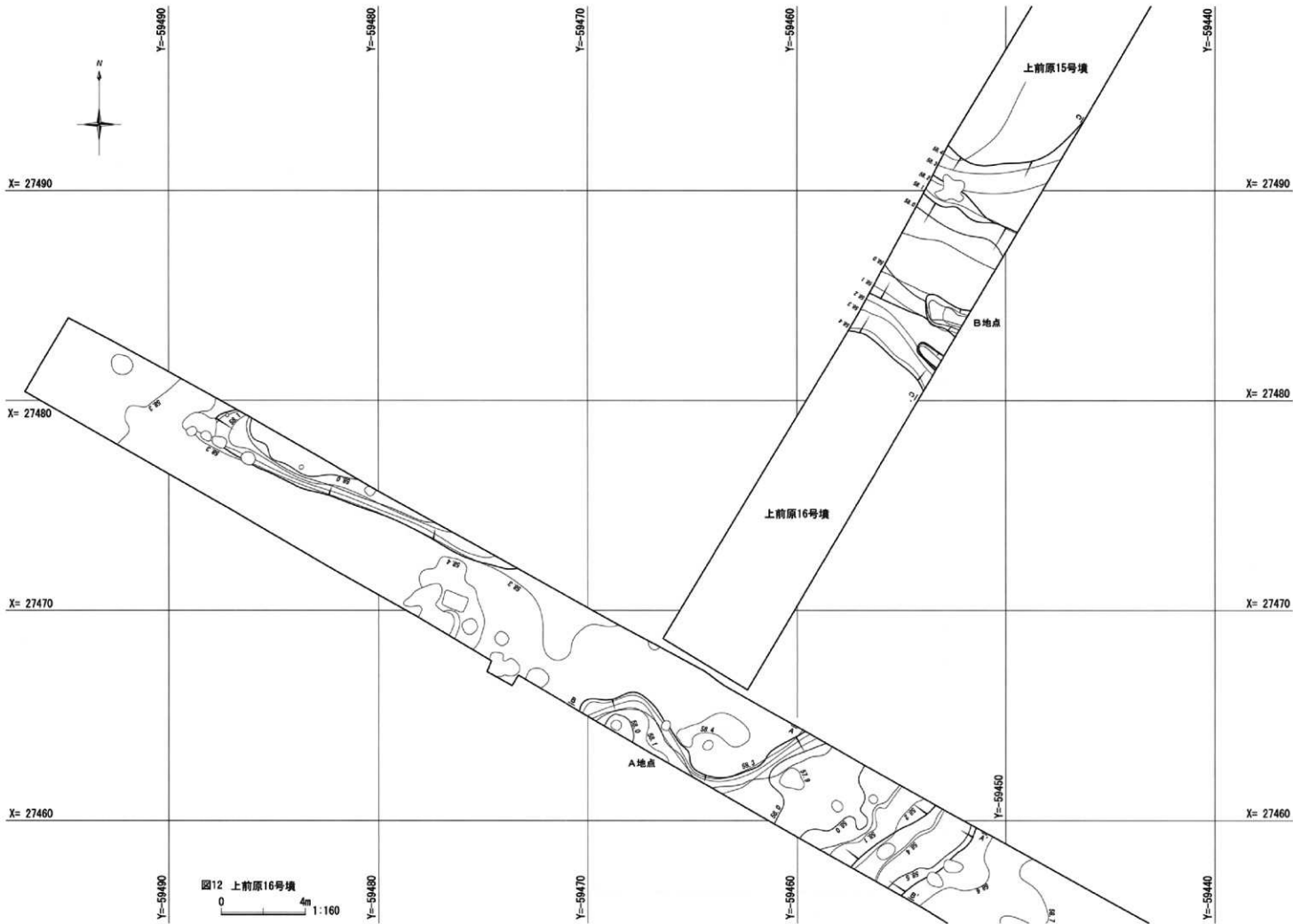


图12 上前原16号墳  
0 4m 1:160



一因している。また掘り込みが浅い部分では周堀自体遺存しない可能性もある。堀幅は、A地点の南東部分で9m前後、B地点では8m前後である。A地点の周堀横断面は両壁ともにゆるやかな船底形で深さ40～55cm、B地点では墳丘側の壁がやや急で、外壁は極々ゆるやかに立ち上がる形態であり、深さ35～46cmである。A地点の堀底には凹凸が目立つようである。

周堀覆土は、A地点のやや込み入った部分を除けば、4、5層に分けられる。A地点の13層は「As-B」を含むとする所見を得ているが、周堀覆土としてよいか微妙な層準であり、「As-B」についても検討の余地がある。いずれにせよ、周堀覆土はロームを主に暗褐色土ないしは黒褐色土の混入する土層がほとんどで明瞭な特徴を欠き、覆土の認定が容易ではなかったことを記しておく。

B地点の南東縁で、周堀と重複する縦長の土坑を2基検出している。土坑の平面形は、それぞれやや歪んだ隅丸長方形、楕円形で、断面形は船底形に近い。北側の土坑が深さ29cm、南側の土坑が深さ49cmである。土坑の覆土は周溝覆土より黒褐色土の含有量が多い。土層断面では周堀の埋没過程のある段階に掘り込まれたものであることが観察できた。

## (2) 遺 物

B地点の周堀の墳丘寄りの覆土中で、須恵器の大甕胴部片を検出したが、細かな時期比定はできなかった。

## (3) 小 結

伴出遺物がないため構築時期を確定することはできないが、とくにA地点では周堀内形が円弧を復元できないまでに平面設計が崩れ、また埴輪が全く出土していないことからすれば、構築時期は7世紀以降になる可能性が考えられる。

## 5 蚤影山古墳

### [A地点]

調査期間	平成2年3月15日～平成2年3月28日
調査面積	106㎡
調査原因	区画整理に伴う宅地造成ならびに市道建設
調査担当	本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 長谷川勇

### [B地点]

調査期間	平成2年8月27日～平成2年9月14日
調査面積	270㎡
調査原因	区画整理に伴う市道建設
調査担当	本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 長谷川勇・佐藤好司
備考	同一調査区内で山ノ神古墳の周堀を検出 [山ノ神古墳C地点]

### (1) 遺 構

蚤影山古墳は山の神古墳、万年寺八幡山古墳とともに群内で墳丘を残す数少ない古墳である。本庄市小島3丁目地内において、墳丘の中心をX=27,545、Y=-59,365付近におく。周囲には南側に山の神古墳、北側に上前原2号墳が所在する。

過去の土取りなどにより、墳裾部を中心に改変が進行しているが、現在でも直径18.5m、高さ3.3mの規模を有している。墳丘南側は下半部が土取りによって崖面をなし、上半部も墳頂にかけて大きく削り取られている。北東側にも崩落もしくは客土によると思われる張り出しがある。墳丘東側の等高線もやや直線的であり、この部分も何らかの改変を被っているものと思われる。調査は墳丘北側の周堀部分にかかるA地点とこれに連続する墳丘北西から西側にかけてのB地点で実施した。

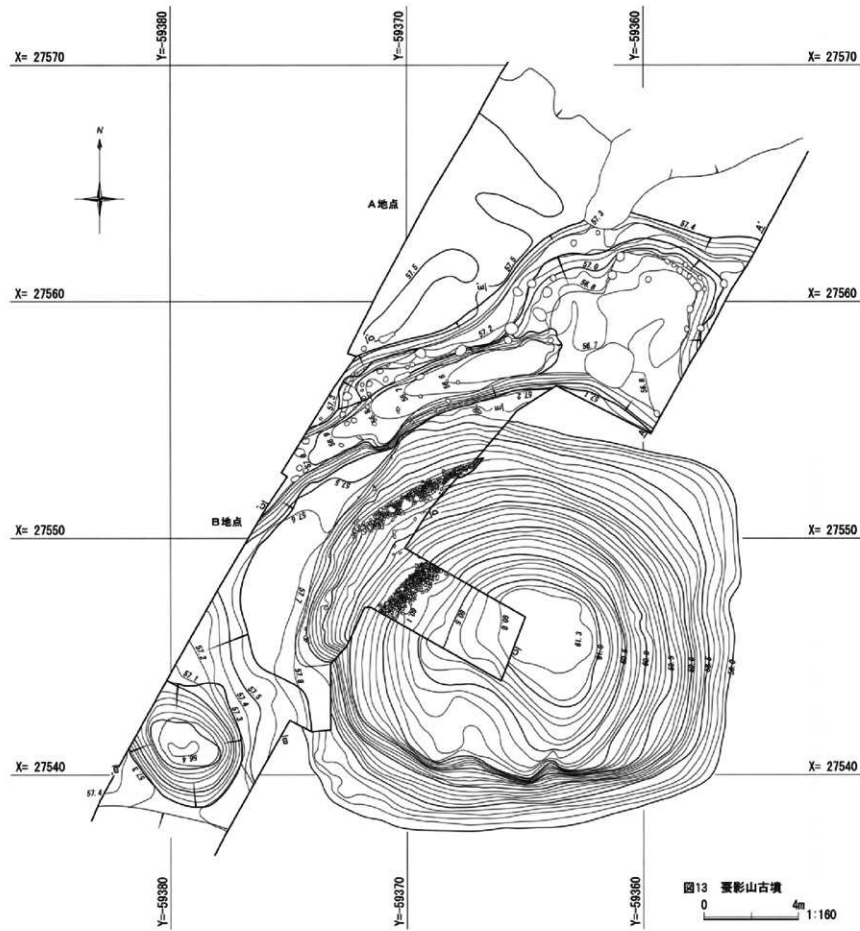
#### a. 墳丘

墳丘はB地点で検出している。北側から北西側にかけて比較的良好に残存しているのに対し、西側では裾部から中段付近にかけて土取りによって大きく削られている。

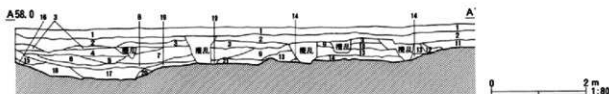
葺石は墳丘下段と中段とに検出している。墳丘斜面の全面を被覆するものではなく、墳丘を帯状にめぐるタイプである。

下段の葺石は墳丘北側から北西側にかけて残存し、墳丘西側ではわずかな礫が散在していたのみで完全に消滅していた。また、残存部分も上半部の崩落が著しく全段の残存している箇所は見当たらない。根石も随所で崩落し断続的に遺存している。石材はすべて河原石を用いている。石材の大きさは長径15cm前後の楕円礫を中心とし、20cmを超えるやや大型の礫や10cm前後の小型の礫も混在している。根石にはやや大型の礫を選んでいるが、縦方向の目通しは設定していないようである。本来は10段以上に積み上げていたものと推測される。

中段の葺石は下段に比べ比較的良好に残っている。下段と同様にすべて河原石を用いて構築している。長径15cm前後を主体とする楕円礫を用い、14～16段程度積み上げている。積み方はやや粗略で、根石にはとくに大型の礫を用いず、また縦方向の目通しも設定していないようである。







蜷影山古墳A地点土層説明 [A-A']

1 表 土		12 暗灰褐色土	ロームブロックを少量含む。
2 淡黄褐色土	白色バミスを多量に含む。	13 褐色土	ロームブロックを少量含む。
3 淡黄褐色土		14 暗黄褐色土	ロームブロックを少量含む。
4 黒灰褐色土	白色バミスを少量含み、黄褐色土ブロックを多量に含む。	15 暗褐色土	ロームブロックを多量に含む。
5 黒色土	As-Bを多量に含む。	16 暗黄褐色土	ロームブロックを多量に含む。
6 黒灰褐色土	As-Bを多量に含む。	17 黒褐色土	ロームブロックを多量に含む。
7 黒灰褐色土	As-Bを多量に含む、ロームブロックを少量含む。	18 暗褐色土	ロームブロックを多量に含む。8,15層より明るい。17層より暗い。
8 暗灰褐色土	As-B、ロームブロックを少量含む。	19 暗褐色土	ロームブロックを含み、黒色土ブロックを少量含む。
9 暗灰褐色土	As-B、ロームブロックを多量に含む。	20 黄褐色土	ロームブロック、黒色土ブロックを多量に含む。
10 暗褐色土	ロームブロック、黒色土ブロックを少量含む。	21 暗黄褐色土	ロームブロックを多量に含む、黒色土ブロックを少量含む。
11 暗褐色土	ロームブロックを少量含む。		

図14 蜷影山古墳土層断面図(1)

テラス部の存在は明確ではない。上位の葦石に対応する墳丘中段のテラスは、断面C-C'でわずかにそれらしい平坦面を観察できる。しかし、この部分には埴輪樹立の痕跡がなく、幅も狭く、若干の傾斜を有することから、本来のテラス面はすでに消滅しているようである。

墳丘テラス部の原状も判然としえない。断面C-C'では地山の23層をローム面近くまで掘り込んだテラス状の平坦面が観察されるが、断面D-D'では23層が葦石下端から緩斜面を形成し、周堀へと連続している。平面的にも断面C-C'で観察される平坦面は安定的に存在するのではなく、この平坦面の形成は後代の削り込みによると判断すべきものであろう。墳丘西側において下段の葦石がほとんど消滅していることに符合するものと考えられる。

#### b. 周堀

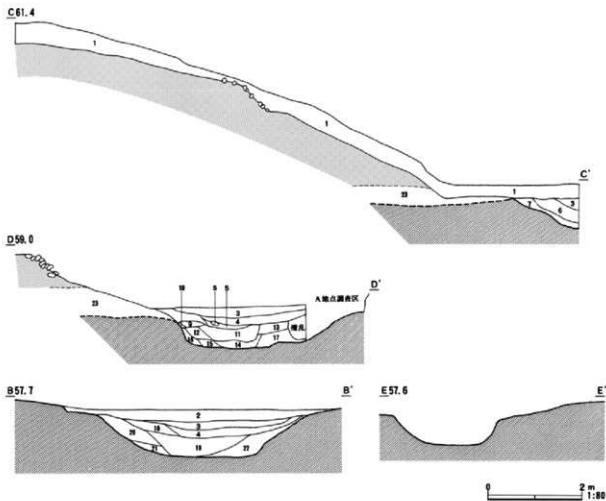
周堀は北側から西側からにかけて連続的に巡っている。内側立上りの平面形は整円をなさず、東西に長い楕円形を呈する。ところにより幅幅の変化が著しく、北側および南西側では外側に大きく張り出している箇所が存在する。周堀底面にも相当の起伏があり、とくに南西側の一角には確認面からの深さ1.0mを測る土坑状の掘り込みが存在する。この部分の掘削はローム層下の白色粘質土層にまで掘削及び一部は白色粘質土層下の礫層に達している。

覆土は黒褐色から暗褐色系の土層で占められる。全体にロームブロックを含み、上位から中位にかけての一部にAs-Bを含んでいる。Hr-FAの堆積は認められない。

#### (2) 遺物

遺物はすべて周堀覆土からの出土で、原位置を保つ資料は存在せず、特定の層位に集中する傾向も認めない。出土量は少なく、ほとんどが小片である。





蛋形山古墳B地点土層説明 [B-B'・C-C'・D-D']

- |                             |          |                                |
|-----------------------------|----------|--------------------------------|
| 1 灰褐色土                      | 13 灰褐色土  | ロームブロック、暗褐色土ブロックを少量含む。         |
| 2 灰褐色土 As-Bを多量に含む。          | 14 黒灰褐色土 | ロームブロックを多量に含む。                 |
| 3 黒褐色土 As-B、暗褐色土ブロックを多量に含む。 | 15 黒灰褐色土 | ロームブロックを少量含む。                  |
| 4 黒色土                       | 16 黒灰褐色土 | 白色パミスを多量に含む。しまり強。              |
| 5 黒褐色土                      | 17 黒褐色土  | ロームブロックを多量に含む。                 |
| 6 暗褐色土                      | 18 黒灰褐色土 | 白色パミス、ロームブロックを少量含む。            |
| 7 暗黄褐色土                     | 19 暗褐色土  | 礫(径5mm土)を少量含む。                 |
| 8 暗褐色土                      | 20 暗褐色土  | 白色パミス、ロームブロック、礫(径5~10mm)を少量含む。 |
| 9 黒褐色土                      | 21 暗褐色土  | 礫(径10~15mm)を少量含む。              |
| 10 暗褐色土                     | 22 暗褐色土  | ロームブロック、暗褐色土ブロックを少量含む。         |
| 11 暗褐色土                     | 23 暗黄褐色土 | 地山層                            |
| 12 黒褐色土                     |          |                                |

図15 蛋形山古墳土層断面図(2)

a. 埴輪

円筒埴輪 [1~9] (図16、写真23)

すべて破片資料で、全体の段構成、各段の幅も不明である。

外面調整は一次調整の縦位のハケによるもののみで、二次調整を施す資料は存在しない。内面調整は縦位および斜位のハケもしくはナデによる。ナデ調整は個体によりやや粗雑なものがあり、輪襞痕を明瞭に残す例も認められる。

突帯は断面形が崩れた台形を呈するものが大半を占める。一部に断面形が三角形を呈するものがわずかに含まれる。

透孔は全形を確認できる資料がなく、また穿孔位置ならびに穿孔数も不明である。4には至みのある半円形の透孔を認める。

線刻の存在する個体は含まれない。

胎土は片岩を含有しているものがほとんどで、1には海綿骨針が混入している。焼成は個体に関係なく総じて良好である。還元焼成の個体は存在しない。色調は大正品がにぶい橙色ないし明赤褐色を呈する。

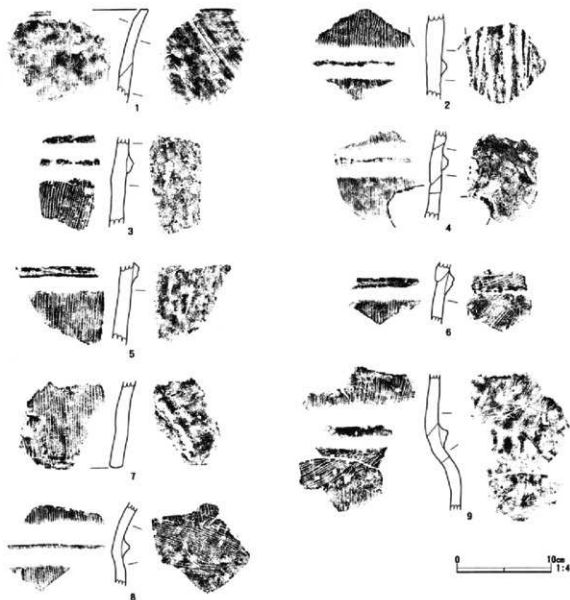


図16 墨影山古墳出土土円筒・朝顔形埴輪拓影図



図17 蛭影山古墳出土形象埴輪実測図

形象埴輪 [1・2] (図17、写真23)

馬 [1] (図17、写真23)

1は馬形埴輪の脚部と判断される。脚の前後左右は特定できないが、上端部での直径は12cm程度となり、かなり大型の製品である。成形は粘土組織み上げにより、調整は外面が縦位および斜位のナデ、内面が縦位および横位ナデである。胎土には砂粒とともに角閃石安山岩を含み、焼成は良好で、色調はにぶい明橙褐色を呈する。

器種不明 [2] (図17、写真23)

2は円筒形の本体に断面三角形の粘土帯を貼付している。人物埴輪の裾部となる可能性がある。調整は外面が縦位ハケのちナデ、内面が不定方向のナデである。胎土には砂粒とともに角閃石安山岩を含み、焼成は良好で、色調はにぶい明橙褐色を呈する。

#### b. 土器

須恵器 [1] (図18、写真23)

1は須恵器大甕の頸部片である。内面に同心円状の当具痕が観察され、頸部には断面三角形の補強帯をもつ。胎土に石英、白色粒を含み、焼成は甘く軟質で、色調は黄灰色を示す。

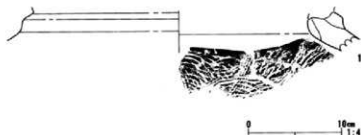


図18 蛭影山古墳出土土器実測図・拓影図

#### 蛭影山古墳出土土器観察表

番号	器種	法量(cm)	形態・成形手法的特徴	調整手法的特徴	胎土・色調	備考
1	須恵器 大甕	口径 — 底径 — 器高 —	頸部に補強帯。	外面—ヨコナデ。 内面—同心円文。	石英・白色粒 内外—黄灰色 断面—橙褐色	頸部片。

#### (3) 小 結

蛭影山古墳の平面形は東西方向に長い楕円形を呈し、長径24～25m、短径22m前後の規模を有すると推測される。出土遺物が少なく確言はできないが、出土した円筒埴輪の型式や頸部補強帯を持つ須恵器大甕の存在から、築造年代は6世紀末葉と考えられる。埋葬施設は不明であるが、想定される築造年代から横穴式石室を備えると考えるのが妥当であろう。

## 6 山の神古墳

### [A地点]

調査期間	平成2年3月5日～平成2年3月20日
調査面積	283㎡
調査原因	区画整理に伴う宅地造成ならびに市道建設
調査担当	本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 長谷川勇
備考	同一調査区内で上前原1号墳の周堀を検出 [上前原1号墳A地点]

### [B地点]

調査期間	平成2年7月30日～平成2年8月10日
調査面積	278㎡
調査原因	区画整理に伴う宅地造成
調査担当	本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 長谷川勇・佐藤好司

### [C地点]

調査期間	平成2年8月27日～平成2年9月14日
調査面積	270㎡
調査原因	区画整理に伴う市道建設
調査担当	本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 長谷川勇・佐藤好司
備考	同一調査区内で蜷影山古墳の周堀を検出 [蜷影山古墳B地点]

### [D地点]

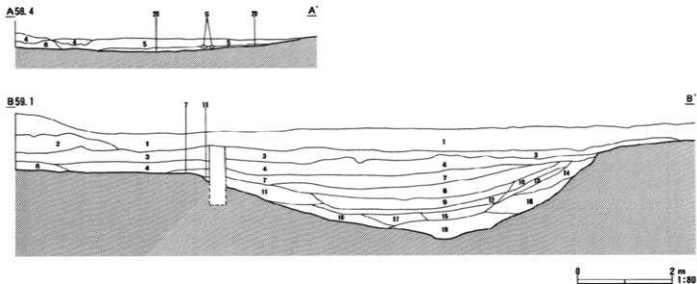
調査期間	平成2年10月13日～平成2年11月27日
調査面積	160㎡
調査原因	区画整理に伴う市道建設
調査担当	本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 長谷川勇

### [E地点]

調査期間	平成4年3月18日～平成4年3月26日
調査面積	175㎡
調査原因	区画整理に伴う宅地造成
調査担当	本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 長谷川勇・佐藤好司

### [F地点]

調査期間	平成11年2月2日～平成11年2月26日
調査面積	214㎡
調査原因	区画整理に伴う宅地造成



山の神古墳B地点土層説明【A-A'・B-B'】

- |          |          |  |
|----------|----------|--|
| 1 表土     | 11 黒灰褐色土 | A <sub>0</sub> -Bを多量に含み、礫(径2~20mm)を少量含む。 |
| 2 暗灰褐色土  | 12 黒褐色土  | ロームブロックを少量含み、暗褐色土ブロックを多量に含む。             |
| 3 暗褐色土   | 13 暗灰褐色土 | ロームブロックを少量含み、暗褐色土ブロックを多量に含む。             |
| 4 暗褐色土   | 14 暗褐色土  | ロームブロックを多量に含む。                           |
| 5 灰褐色土   | 15 灰褐色土  | 黒色土ブロック、礫(径10~15mm)を多量に含む。               |
| 6 暗褐色土   | 16 暗褐色土  | ロームブロックを少量含む。                            |
| 7 灰褐色土   | 17 黒褐色土  | 礫(径10~30mm)を多量に含む。                       |
| 8 灰褐色土   | 18 灰褐色土  | 礫(径2~20mm)を少量含む。                         |
| 9 暗灰褐色土  | 19 暗褐色土  | ロームブロック、礫(径10mm)を少量含む。                   |
| 10 黒暗褐色土 | 20 暗黄褐色土 | ロームを主体とする。礫(径10~20mm)を少量含む。              |

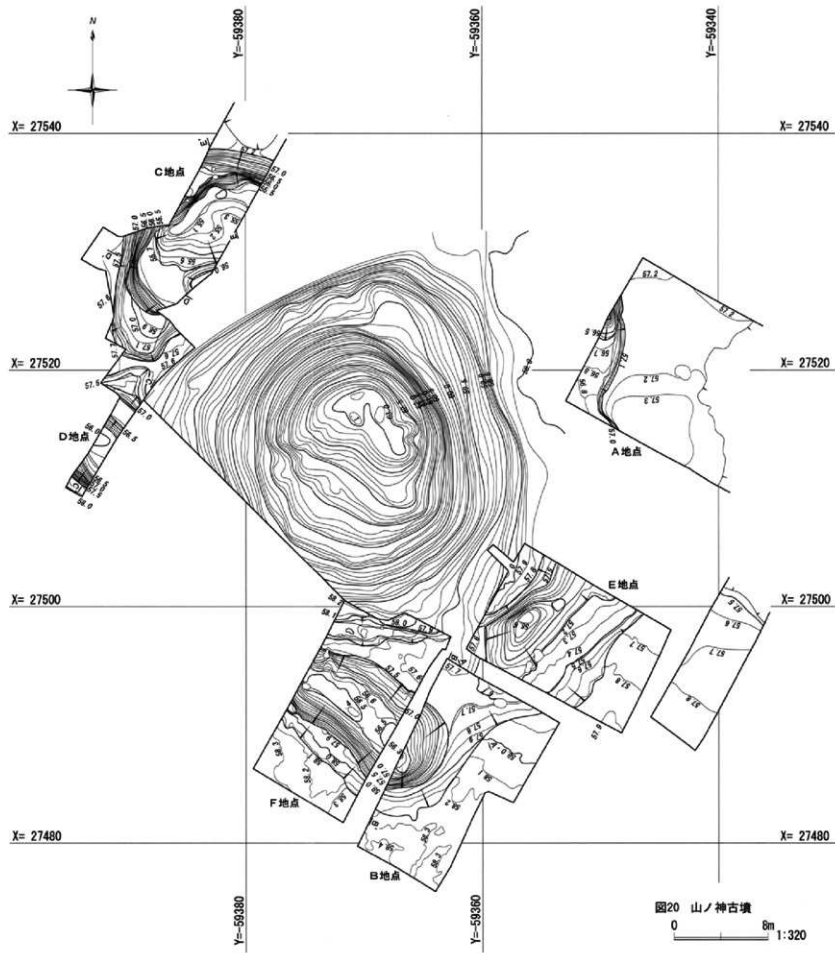
図19 山の神古墳土層断面図1)

調査担当

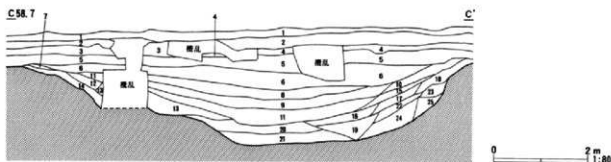
本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 増田一裕

(1) 遺構

山の神古墳は群内では墳丘を残す数少ない古墳のひとつで、南西側は墳丘裾部が直線的に切断され、各所に等高線の乱れがあるものの、万年寺八幡山古墳とともに比較的良好な遺存状態を保っている。墳丘の中心をX=27.515、Y=-59.370付近におく。周囲には北側に張影山古墳、東側に上前原1号







山之神古墳D地点土層説明 [C-C']

- |          |                          |          |                               |
|----------|--------------------------|----------|-------------------------------|
| 1 客土     |                          | 14 暗黄褐色土 | ロームを主体とする。                    |
| 2 灰褐色土   | 白色バミスを含む。しまり強。           | 15 黒灰褐色土 | ロームブロックを多量に含む。粘質強。            |
| 3 暗褐色土   | 白色バミスを多量に含む。             | 16 暗褐色土  | ロームブロックを多量に含む。                |
| 4 暗褐色土   | 白色バミスを多量に含む。ところにより純層をなす。 | 17 暗黄褐色土 | ロームブロックを多量に含む。                |
| 5 灰褐色土   | ロームブロックを少量含む。砂粒を多量に含む。   | 18 暗黄褐色土 |                               |
| 6 暗灰褐色土  |                          | 19 暗褐色土  | ロームブロックを多量に含む。礫(径10mm±)を少量含む。 |
| 7 暗褐色土   | ロームブロックを少量含む。            | 20 暗黄褐色土 | 礫(径2~30mm)を多量に含む。             |
| 8 暗灰褐色土  | As-Bを多量に含む。              | 21 暗褐色土  |                               |
| 9 黒褐色土   | As-Bを多量に含む。              | 22 褐色土   | ロームブロックを多量に含む。                |
| 10 黒灰褐色土 | As-Bを多量に含む。              | 23 暗褐色土  | ロームブロック、黒色土ブロックを多量に含む。        |
| 11 黒褐色土  | 礫(径10~30mm)を少量含む。粘性强。    | 24 黄褐色土  | ロームブロックを多量に含む。                |
| 12 暗黄褐色土 | ロームブロックを少量含む。            | 25 暗黄褐色土 | ロームを主体とする。黒色土ブロックを少量含む。       |
| 13 暗黄褐色土 | ロームブロック、礫(径2~20mm)を少量含む。 |          |                               |

図21 山之神古墳土層断面図②

墳、南東側に御手長山古墳が所在する。調査はA~F地点まで6次にわたって実施しているが、すべてが周堀に対するもので、墳丘の具体的な様相は判明していない。

周堀は墳丘西側で1箇所途切れる部分が存在する。ところにより堀幅の変化が見られ、南側では外側に大きく張り出している箇所があり、北西側にも堀幅の広がる部分が存在する。周堀底面にも相当の起伏がある。とくに、堀幅の広い南側および北西側の部分では掘削がローム層下の白色粘質土層にまで及び、底面に礫層が露出している。

覆土は黒褐色から暗褐色系の土層で占められる。全体にロームブロックを含み、中位にAs-Bを含んでいる。Hr-FAの堆積は認められない。

## (2) 遺物

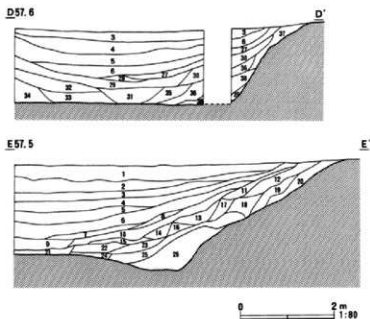
遺物はすべて周堀覆土及び表土からの出土で、原位置を保つ資料は存在しない。埴輪はB・E・Fに集中し、C・Dでも出土しているが、上層からの出土が多く、また特定の層位に集中する傾向も認められず、配列を復原できるだけの情報は得られていない。

### a. 埴輪

#### 円筒埴輪 [1~49] (図23~29、写真24~30)

円筒埴輪は全形の判明する資料が存在しない。1・4のように、中間に1段を隔てて透孔を上下に配する個体が存在する。4条突帯5段構成品の大型品を含むことがわかる。また、5・15のようにや





山の神古墳C地点土層説明【D-D'・E-E'】

- |          |                                      |          |                                      |
|----------|--------------------------------------|----------|--------------------------------------|
| 1 暗褐色土   | ロームブロック、砂粒を少量含む。                     | 22 暗褐色土  | ロームブロックを多量に含む。                       |
| 2 黒褐色土   | ロームブロック、砂粒を少量含む。                     | 23 暗灰褐色土 | ロームブロックを多量に含む、暗褐色土ブロックを少量含む。         |
| 3 暗褐色土   | ロームブロックを多量に含む。                       | 24 暗黄褐色土 | ロームブロック、礫(径10mm±)を少量含む。              |
| 4 灰褐色土   | 暗褐色土ブロックを多量に含む。                      | 25 黒褐色土  | ロームブロックを多量に含む。                       |
| 5 灰褐色土   | ロームブロックを少量含む。                        | 26 黄褐色土  | ロームを主体とする。                           |
| 6 黒褐色土   | As-Bを多量に含む。                          | 27 黒褐色土  |                                      |
| 7 黒褐色土   | ロームブロックを少量含む。粘質強。                    | 28 黒褐色土  | ロームブロック、礫(径10mm±)を少量含む。              |
| 8 暗褐色土   | ロームブロックを少量含む。粘質強。                    | 29 暗灰褐色土 | 礫(径5~10mm)を多量に含む。                    |
| 9 黒灰褐色土  | ロームブロック、礫(径5~20mm)を少量含む。             | 30 灰褐色土  | 白色バミス、ロームブロック、暗褐色土ブロック、黒色土ブロックを少量含む。 |
| 10 黒灰褐色土 | ロームブロック、礫(径3~10mm)を少量含む。             | 31 暗褐色土  | 黒色土ブロックを少量含む、礫(径5~20mm)を多量に含む。       |
| 11 暗灰褐色土 | 暗褐色土ブロックを多量に含む。                      | 32 暗褐色土  | 暗褐色土ブロック、礫(径3~30mm)を多量に含む。粘性強。       |
| 12 暗褐色土  | ロームブロックを少量含む。                        | 33 暗褐色土  | 礫(径3~30mm)を多量に含む。粘性強。                |
| 13 黄褐色土  | ロームを主体としとする。黒色土ブロック、礫(径2~10mm)を少量含む。 | 34 暗褐色土  | 砂粒、礫(径2~10mm)を多量に含む。                 |
| 14 暗黄褐色土 | ロームを主体としとする。黒色土ブロック、礫(径2~10mm)を少量含む。 | 35 暗灰褐色土 | ロームブロック、礫(径5mm±)を少量含む。               |
| 15 暗黄褐色土 | ロームを主体とする。                           | 36 暗褐色土  | ロームブロックを多量に含む、礫(径5mm±)を少量含む。         |
| 16 暗黄褐色土 | ロームブロック、黒色土ブロック、礫(径2~10mm)を少量含む。     | 37 暗黄褐色土 | ロームブロックを多量に含む、礫(径2~10mm)を少量含む。       |
| 17 暗黄褐色土 | ロームブロック、黒色土ブロックを少量含む。                | 38 暗黄褐色土 | 礫(径2~10mm)を少量含む。                     |
| 18 暗灰褐色土 | ロームブロックを少量含む。                        | 39 暗褐色土  | 礫(径2~30mm)を多量に含む。                    |
| 19 暗褐色土  | 黒色土ブロックを少量含む。                        |          |                                      |
| 20 暗茶褐色土 | ロームを主体とする。                           |          |                                      |
| 21 暗黄褐色土 | ロームブロック、礫(径5~20mm)を多量に含む。            |          |                                      |

図22 山の神古墳土層断面図③

や径の小さな個体は3条突帯4段構成品となる可能性が高い。

外面調整はいずれも1次調整の縦位のハケのみで、2次調整を欠いている。底部調整を施す個体は確認できない。

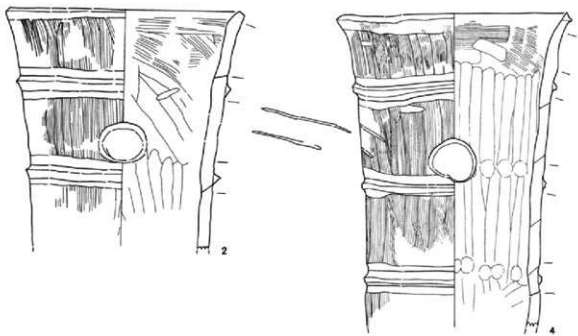
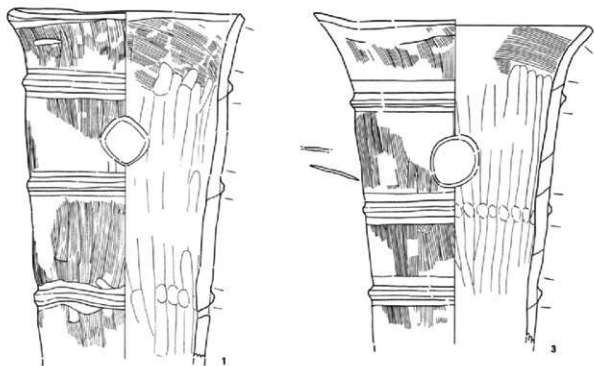


図23 山の神古墳出土土円筒埴輪実測図(1)

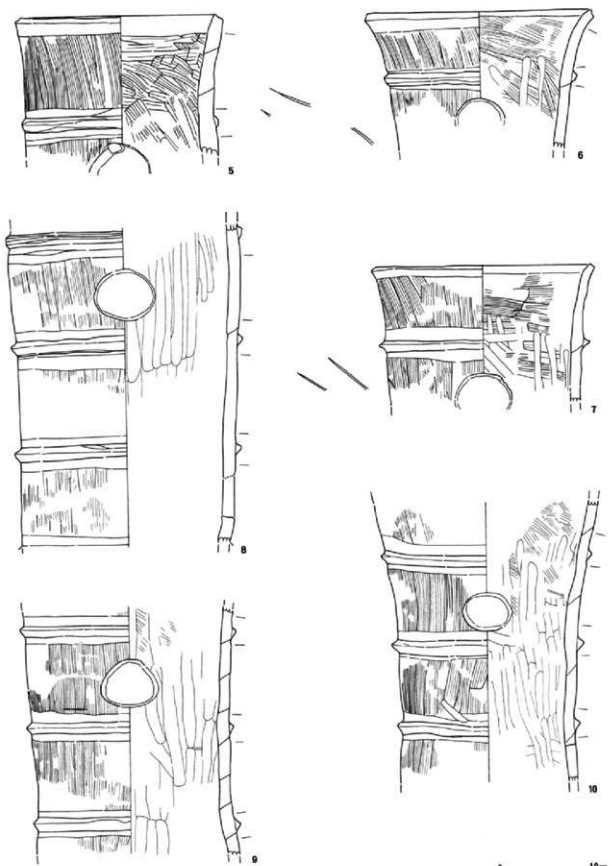


図24 山の神古墳出土円筒埴輪実測図(2)

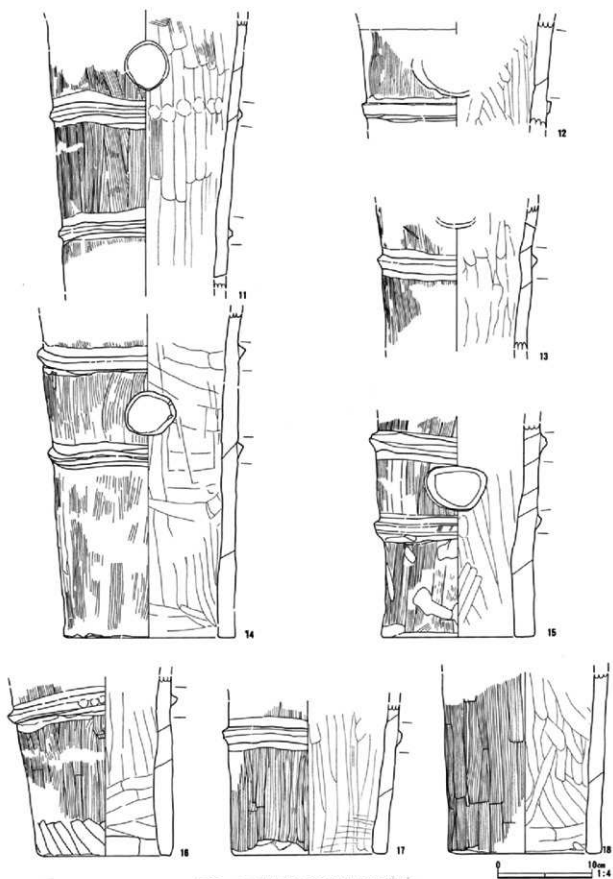


図25 山の神古墳出土土円筒輪実測図(3)

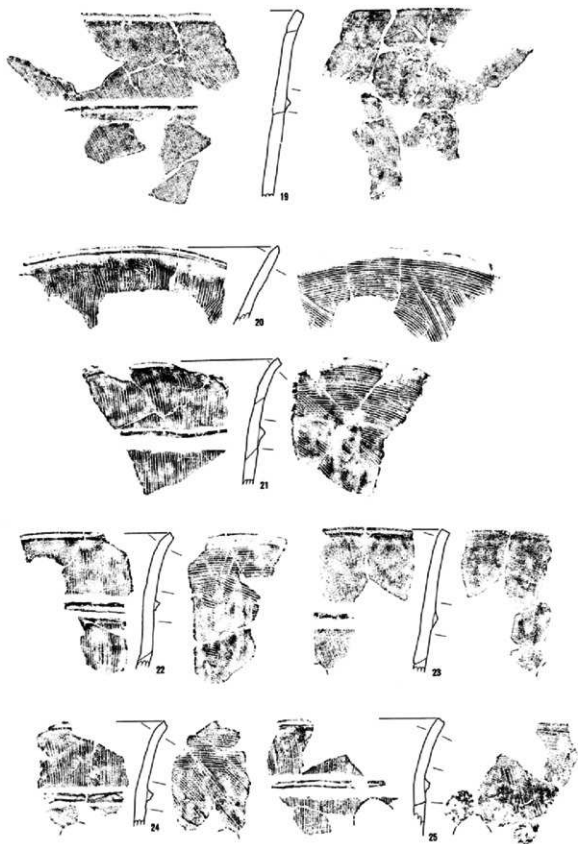
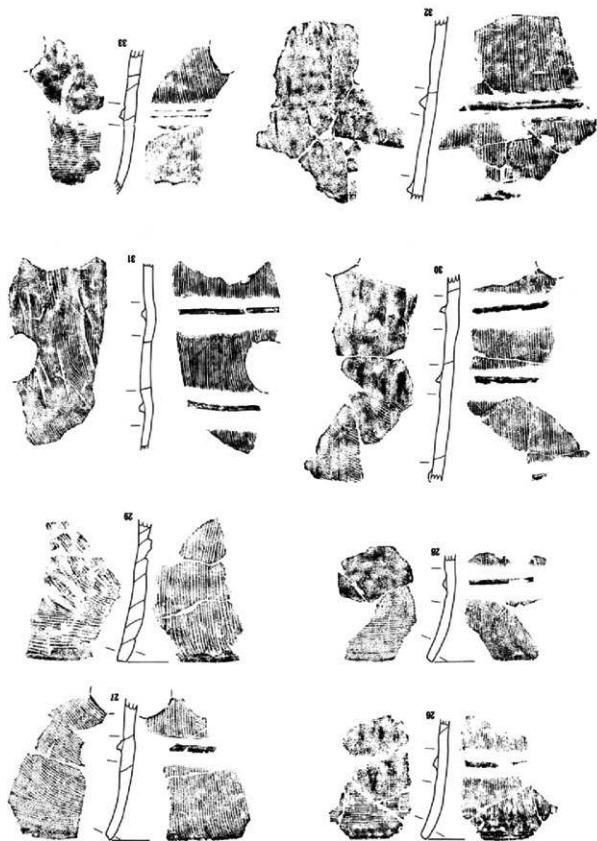


図26 山の神古墳出土土円筒埴輪拓影(1)

図27 山の神古墳出土円筒埴輪拓影図2)



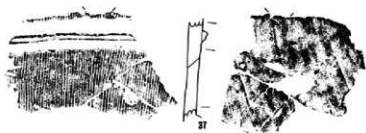
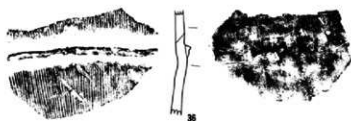


図28 山の神古墳出土円筒埴輪拓影(図3)



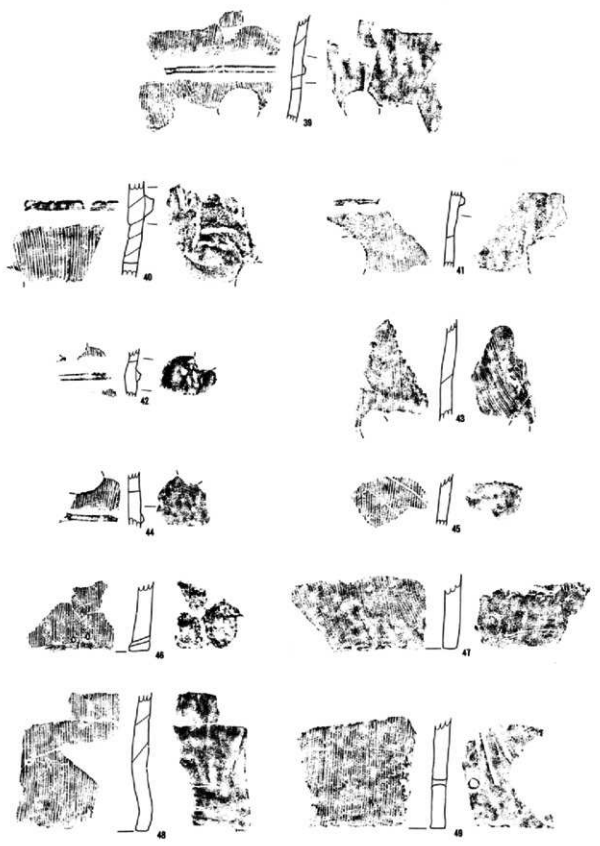


図29 山の神古墳出土円筒埴輪拓影(4)



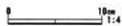
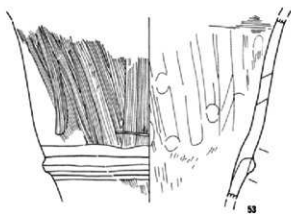
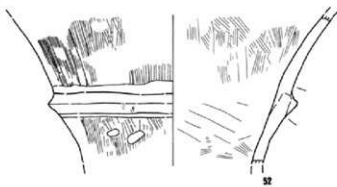
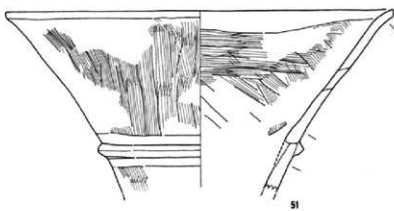
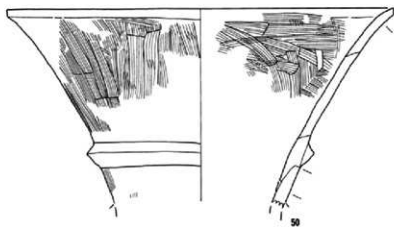


図30 山の神古墳出土朝顔形埴輪実測図(1)

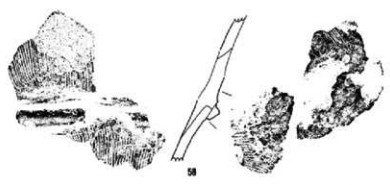
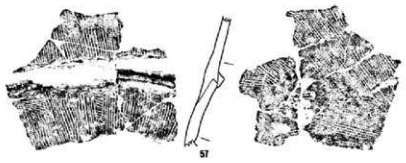
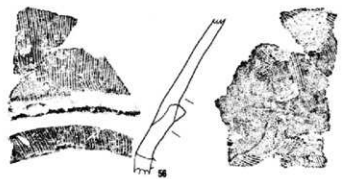
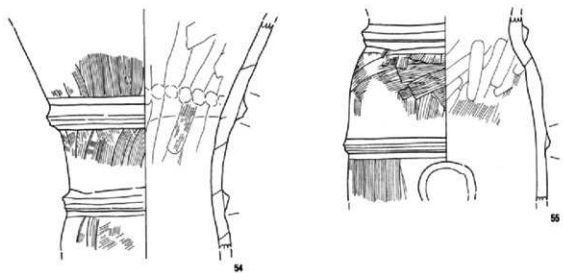


図31 山の神古墳出土朝顔形埴輪実測図(2) 拓影図(1)

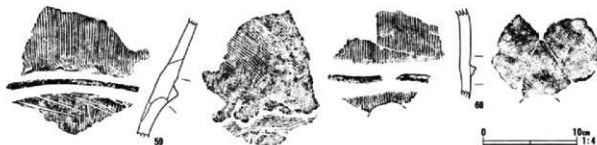


図32 山の神古墳出土朝顔形埴輪拓影図2)

内面調整は斜位のハケおよび縦位ないし斜位ナデによる。ナデ調整は個体によりやや粗雑なものがある。ハケは上位2段に対応する範囲にほぼ限定される。口唇部は内外面・端面とも横位のナデを施している。

突帯は断面形が崩れた台形を呈するものが大半を占めるが、2・7のように断面形が三角形を呈するものも含まれる。

透孔はすべて円形であるが、歪みがあり不整形をなすものが多い。4条突帯5段構成の大型品は第2・4段に、一対を90°づつ角度を違えながら穿っている。段中の穿孔位置は個体により異なる。

線刻は上から2段目に斜位2条の直線を加えるものが多い。

胎土は全体に砂粒を含有しているが、結晶片岩を含むものと角閃石安山岩を含むものがある。焼成は総じて良好である。還元焼成の個体は認めない。色調は明赤褐色からにぶい橙色までの幅が存在する。

#### 朝顔形埴輪 [50~60] (図30~32、写真31・32)

朝顔形埴輪も全形の判明する資料が存在しない。全体にやや細身で肩の張りが弱く、口縁部は開きや外彎の度合いも小さい。

外面調整は一次調整のみで、二次調整を欠いている。55には肩部に斜位のハケを認める。

内面調整は胴部から肩部にかけて縦位ないし斜位のハケおよびナデ、頸部、口縁部は斜位のハケおよびナデで、口唇近くは横位のハケとなっている。口唇部は内外面・端面とも横位のナデを施している。

突帯は断面形が崩れた台形や三角形を呈するものが大半を占める。円筒埴輪に比べ、器面へのなでつけを丁寧に行っている。

透孔は判明する資料が少ない。55は円形透孔である。線刻はとくに目立たない。

胎土は全体に砂粒を含有しているが、円筒埴輪と同様に結晶片岩を含むものと角閃石安山岩を含むものがある。焼成は総じて良好で、還元焼成の個体は認めない。色調は橙色が主体で、にぶい橙色、明赤褐色を呈する個体が僅かに含まれる。

#### 形象埴輪 [1~22] (図33~37、写真32~35)

##### 家 [1~2] (図33、写真32)

1は屋根に表現される板状格子の一部である。幅広の粘土帯の表面に緒状の突起が付く。調整は全面にナデを施している。裏側は剝離面となっている。胎土には砂粒を含み、焼成は良好で、色調は明橙褐色を呈する。2は壁の下端部である。調整は外面が縦位のハケ、内面が縦位および横位のナデで

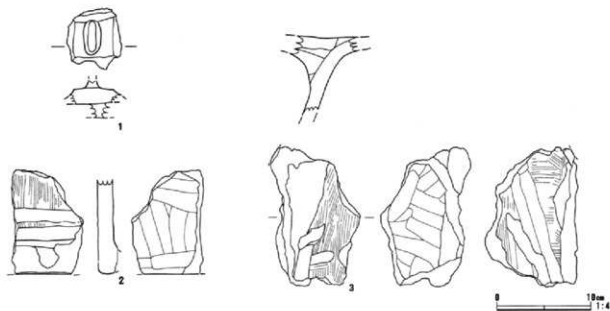


図33 山の神古墳出土土形象輪軸実測図(1)

ある。下縁近くに横位の突帯を貼付し、横位のナデを加えている。胎土、焼成、色調は1と同様である。

盾 [ 3 ] (図33、写真32)

3は盾の一部である。盾持人物となる可能性を残す。円筒形の本体表面に板状の盾を貼付している。調整は盾表面が縦位のハケ、盾裏面が不定方向のナデ、内面が縦位および横位ハケとの斜位のナデが重複する。胎土には砂粒を含み、焼成は良好で、色調はにぶい明橙褐色を呈する。

人物 [ 4～16 ] (図34～36、写真33・34)

4は笑う人物埴輪である。成形は粘土紐積み上げにより、頭頂部は周囲から絞り込んで塞いでいる。外面調整は縦位のハケののち胸から肩、顔面にかけて不定方向のナデを加えている。内面は全面が縦位のナデである。胴部中位に断面三角形の突帯がめぐる。腕部は中実成形で、胴部を開けた孔にソケット状に差し込んでいる。肩から急激に屈曲し両手を腹部に当てている。手には親指のみが表現され、他は省略している。顔面部は頭部本体にU字状の粘土板を貼付して輪郭を表す。眼孔、口ともヘラ状工具を用いて弧状に切り抜き、笑う表情を表現している。耳孔は存在しない。側頭部に美豆良が付く。美豆良は円筒形の粘土柱に細い粘土紐を螺旋状に巻き付け、これを側頭部を開けた孔に直角に差し込んでいる。頭部には鉢巻状の粘土帯がめぐる。胎土には砂粒を含み、焼成は良好で、色調はにぶい明橙褐色を呈する。

5・6は3片に分れているが、胎土、焼成が酷似することから同一個体と認定し、4を参考に笑う人物埴輪として復原した。外面調整は縦位のハケで顔面にナデを加えている。内面は全面が縦位のハケおよびナデである。胴部中位に断面台形の突帯がめぐる。腕部は欠失しているが、胴部に右手の一部が残っている。線刻により指を表現している。頸部には円形の粘土板を連ね首飾りを表す。顔面部は頭部本体にU字状の粘土板を貼付して輪郭を表す。眼孔、口ともヘラ状工具を用いて弧状に切り抜き、笑う表情を表現している。側頭部に美豆良が付く。美豆良は円筒形の粘土柱に細い粘土紐を螺旋

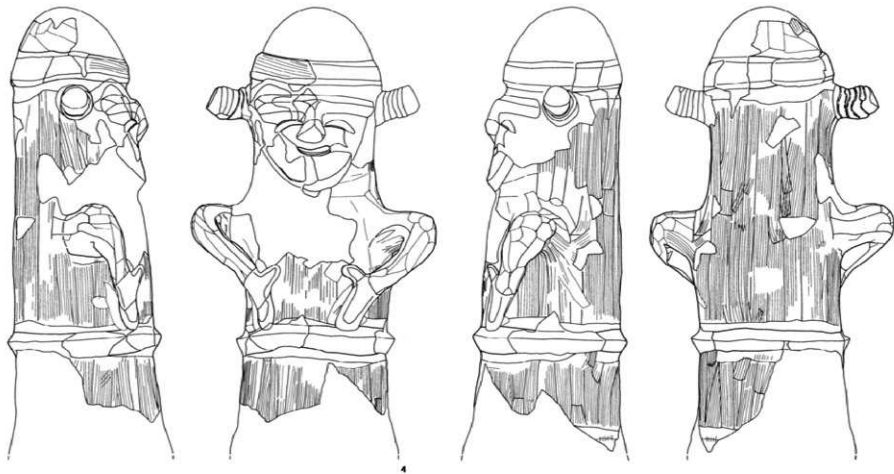


図34 山の神古墳出土土形象埴輪実測図(2)

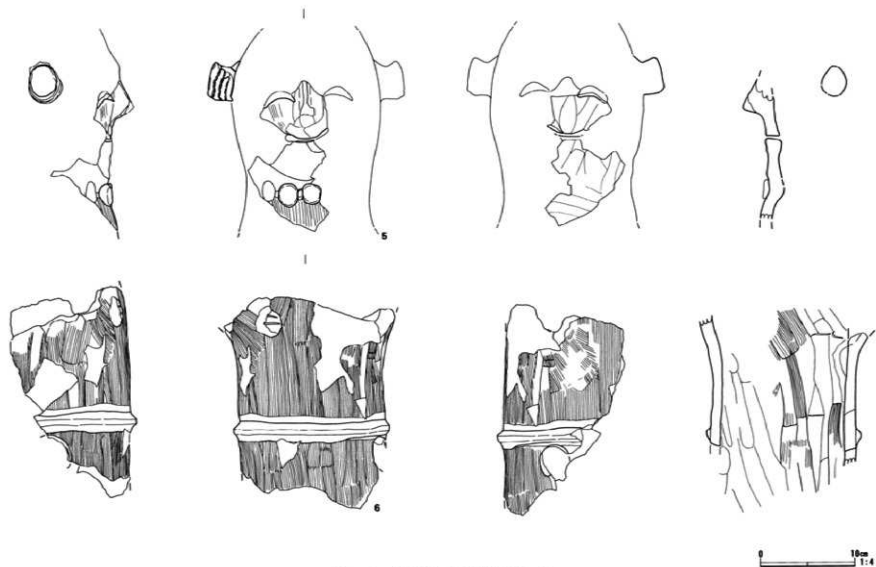


図35 山の神古墳出土土形象輪実測図3)

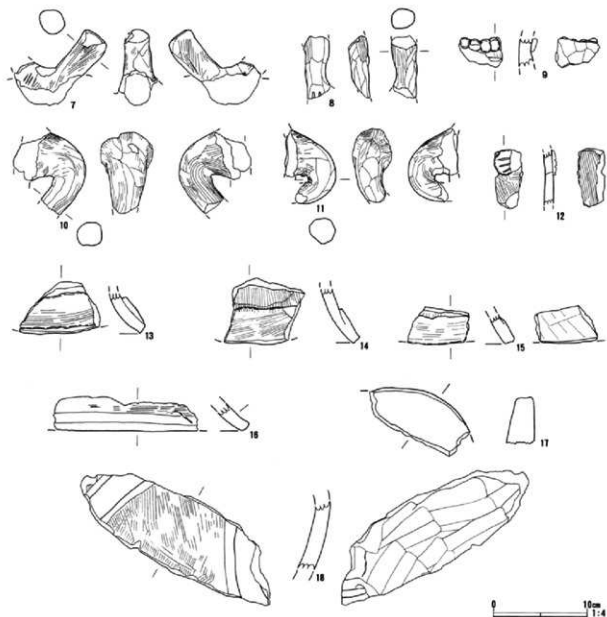


図36 山の神古墳出土形象埴輪実測図4)

状に巻き付け、これを側頭部に開けた孔に直角に差し込んで取り付けているようである。胎土には砂粒を含み、焼成は良好で、色調は明橙褐色を呈する。

7は頭頂部から剝落した髷である。V字状に曲げた円筒形の粘土柱で、調整は不定方向のハケおよびナデを施している。胎土には砂粒を含み、焼成は良好で、色調はふい明橙褐色を呈する。盾持人物の頭頂に付いていたものであろう。

8は顔面から剝離した鼻である。調整は縦位のハケおよびナデを施している。下面にはヘラ状工具の先端で刺突を加え鼻孔を表現している。胎土には砂粒を含み、焼成は良好で、色調は明赤褐色を呈する。

9は頭部の破片である。調整は外面が縦位のハケおよびナデ、内面が斜位のナデである。円形の粘土板を連ね首飾りを表す。胎土には砂粒を含み、焼成は良好で、色調は明赤褐色を呈する。

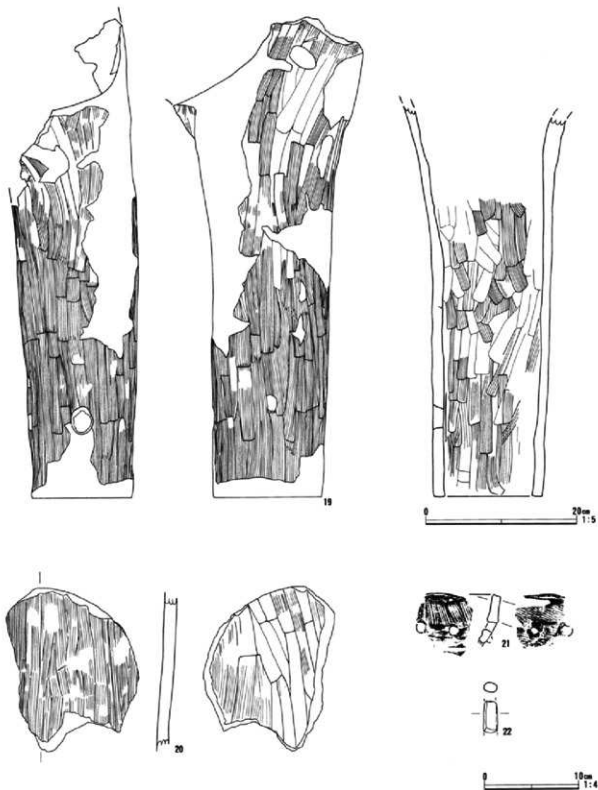


図37 山の神古墳出土土形象埴輪実測図5)

10・11は胸である。ともに中夾成形で、先端を欠いている。調整はハケとナデを併用している。胎土には砂粒を含み、焼成は良好で、色調はにぶい明橙褐色を呈する。全体に短く屈曲も著しいことから4のような小型の半身像に伴うものであろう。



12は胴の表面に付く手の一部である。胴部の調整は内外面とも縦位のハケである。手は線刻で指を表現している。胎土には砂粒を含み、焼成は良好で、色調は明赤褐色を呈する。

13~16は大型人物埴輪の裾部と考えられる破片である調整は表面に縦位のハケを施し、裾部に幅広い粘土帯を貼付し、その上に横位のハケを加えている。裏面は斜位のナデである。胎土には砂粒を含み、焼成は良好で、色調は明赤褐色を呈する。

馬 [17~20] (図36・37、写真34・35)

17は鞍橋の一部である。前輪か後輪かの区別は判然としない。調整は両面とも丁寧なナデを施している。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調はにぶい明橙褐色を呈する。

18は尻の一部である。調整は外面がハケのちなデ、内面がナデである。外面には幅広い粘土帯で表した尻蹠の刻痕がある。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は明橙褐色を呈する。

19・20は脚である。19は大型品の脚で、前後左右の別は判然としない。成形は粘土紐積み上げにより、調整は外面が縦位のハケおよびナデ、内面が縦位ないし斜位のハケおよびナデである。基部から10cmの位置に4×3cmの縦長楕円形の透孔がある。20は脚中位の小片である。調整は外面が縦位のハケ、内面が縦位ないし斜位のハケおよびナデである。19・20胎土には砂粒を含み、焼成は良好で、色調はにぶい明橙褐色を呈する。

器種不明 [21・22] (図37、写真35)

21は下辺に幅の狭い粘土帯の刻痕があり、その上に2個の小孔を穿っている。調整は外面が縦位のハケ、内面が斜位のハケである。胎土は細かい砂をわずかに含み、焼成は良好で、色調は明橙褐色を呈する。

22は棒状の小片である。調整は全面がナデである。胎土には砂粒を含み、焼成は良好で、色調はにぶい明褐色を呈する。

## b. 土器

土師器 [1・2] (図38、写真35)

1は丸底で球状の体部をもつ土師器である。2は短頸壺であるが、かなり大型の部類の属する。ほぼ完形で、山の神古墳の築造時期を示す資料であろう。

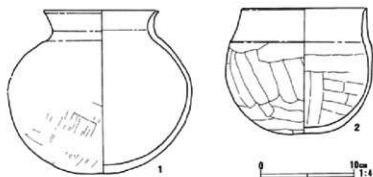


図38 山の神古墳出土土器実測図

### 山の神古墳出土土器観察表

番号	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 壺	口径 12.1 底径 — 器高 17.4	丸底。胴部大きく膨らむ。口縁部は外反して開く。	外面—胴部にヘラケズリの痕跡があるが、摩滅のため不明。内面—口縁部ヨコナデ、胴部～底部ナデ。	黒色粒・白色粒 赤褐色粒 内外一色	胴部最大径 19.5cm
2	土師器 短頸壺	口径 13.4 底径 — 器高 13.4	丸底気味で体部との境不明瞭。口縁部と体部との境にわずかな後。	外面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラナデ。	黒色粒・白色粒 赤褐色粒 内外一色	ほぼ完形 体部最大径 15.7cm

### (3) 小 結

山の神古墳では周掘覆土や表土層から相当量の埴輪片が出土しているが、全形をとどめるものは存在しない。円筒・朝顔形埴輪に加え、家・人物・馬などの形象埴輪を備えるが、大刀・靱・柄・鬚など器財埴輪の存在は確認できない。

円筒埴輪には幾つかのタイプが見られ、他段に比較して最上段幅の狭い個体が目立つ。こうした特徴を有する円筒埴輪は古墳群内の前の山古墳や御手長山古墳にも存在しているが、この二古墳は埋葬施設に横穴式石室を採用し、とくに、御手長山古墳では出土した副葬遺物や須恵器などから6世紀末葉の築造時期が想定されている。また、山の神古墳の土師器短頸壺と同形の資料は、前の山古墳においても出土している。これらのことから、山の神古墳の築造時期は、前の山古墳や御手長山古墳とほぼ同時期の6世紀末葉に想定されるだろう。埋葬施設にも前の山古墳や御手長山古墳と同様に横穴式石室を備えたと考えられる。

## 7 御手長山古墳

### [A地点]

調査期間	平成2年5月21日～平成2年5月31日
調査面積	176㎡
調査原因	区画整理に伴う宅地造成
調査担当	本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 長谷川勇・佐藤好司

### [B地点]

調査期間	平成2年8月24日～平成2年9月7日
調査面積	577㎡
調査原因	区画整理に伴う宅地造成ならびに市道建設
調査担当	本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 長谷川勇・佐藤好司

### [C地点]

調査期間	平成2年3月7日～平成2年3月19日
調査面積	300㎡
調査原因	区画整理に伴う市道建設
調査担当	本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 長谷川勇

### [D地点]

調査期間	平成3年4月20日～平成3年5月29日
調査面積	195㎡
調査原因	区画整理に伴う市道建設
調査担当	本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 長谷川勇・佐藤好司

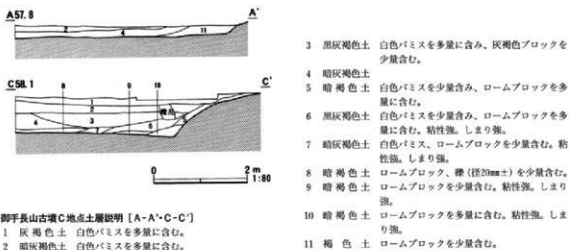


図39 御手長山古墳土層断面図(1)

[ E 地点 ]

**調査期間** 平成8年7月29日～平成8年8月23日  
**調査面積** 100m<sup>2</sup>  
**調査原因** 区画整理に伴う宅地造成  
**調査担当** 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司

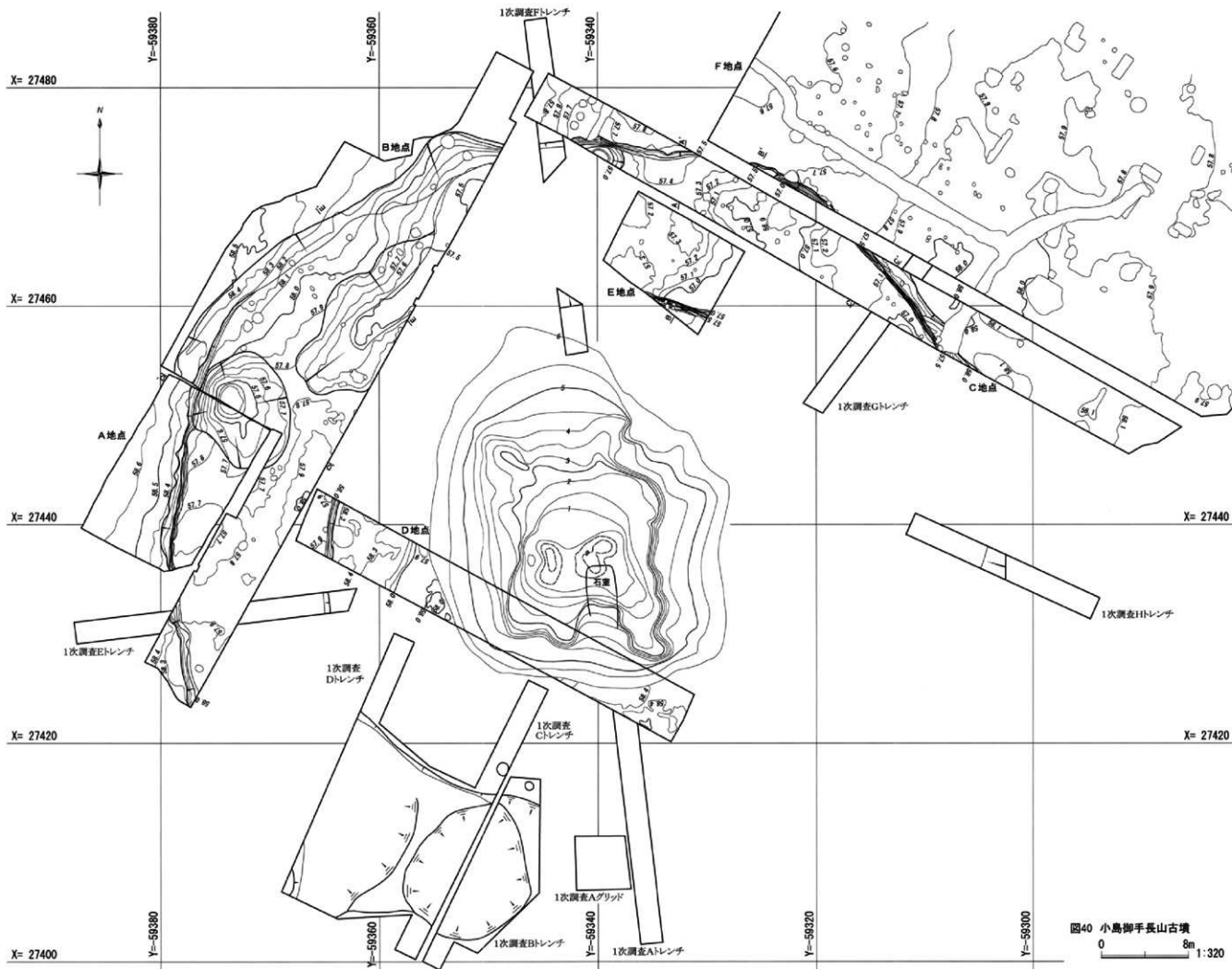
[ F 地点 ]

**調査期間** 平成8年9月24日～平成8年11月23日  
**調査面積** 2,100m<sup>2</sup>  
**調査原因** 区画整理に伴う宅地造成  
**調査担当** 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司  
**備考** 同一調査区内で上原原1号墳の周堀 [上原原1号墳C地点] および上原原13号墳の周堀 [上原原13号墳B地点] を検出

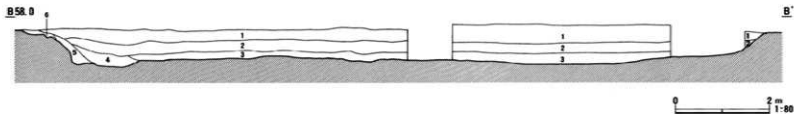
(1) 遺 構

御手長山古墳は昭和52年に墳丘および埋葬施設に対する調査（以下「1次調査」と称する）が行われ、横穴式石室と種々の副葬物、埴輪などが検出されている。横穴式石室は面取り加工した角閃石安山岩の河原石を壁材に用いている。副葬物には挂甲、直刀、鉄鏃、馬具、耳環、ガラス玉などがある。埴輪は円筒、家、人物、が報告され、とくに家は組合式入母屋形屋根をもつ大型品で椽に特異な煙突状の突起をもつ点が注目される。

墳丘は1次調査の後に完全に削平され、現在はまったく残っていない。中心をX=27,435、Y=-59,340付近におく。周囲には北西側に山の神山古墳が所在する。調査はA～F地点まで6次にわたって実施しているが、すべて周堀に対するものである。



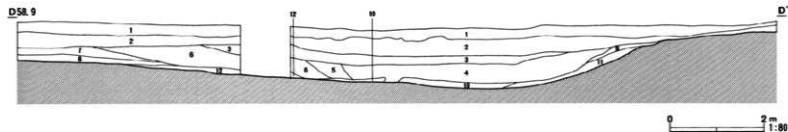




御手長山古墳C・E・F地点土層説明【B-B'】

- |                                  |                       |
|----------------------------------|-----------------------|
| 1 暗灰褐色土 礫(径5~10mm)を少量含む。         | 4 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。 |
| 2 黒灰褐色土 礫(径5~10mm)を少量含む。         | 5 褐色土 ロームブロックを多量に含む。  |
| 3 暗褐色土 ロームブロック、礫(径5~20mm)を多量に含む。 | 6 黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。 |

図41 御手長山古墳土層断面図(2)



御手長山古墳A・B地点土層説明【D-D'】

- |                                   |                                     |
|-----------------------------------|-------------------------------------|
| 1 暗褐色土 白色パミス、礫(径5mm±)を少量含む。       | 7 暗黄褐色土 ロームブロックを多量に含み、黒色土ブロックを少量含む。 |
| 2 黒褐色土 礫(径5mm±)を少量含む。             | 8 黄褐色土 ロームを主体とする。                   |
| 3 暗褐色土 礫(径5mm±)を少量含む。             | 9 暗灰褐色土 ロームブロックを少量含む。               |
| 4 黒褐色土 As-Bを多量に含む。                | 10 暗褐色土 礫(径5mm±)を多量に含む。粘質強。         |
| 5 暗灰褐色土 As-Bを多量に含む。               | 11 黄褐色土 ロームブロックを少量含む。               |
| 6 暗灰褐色土 As-Bを多量に含み、礫(径5mm±)を少量含む。 | 12 褐色土 礫(径5mm±)を少量含む。               |

図42 御手長山古墳土層断面図(3)

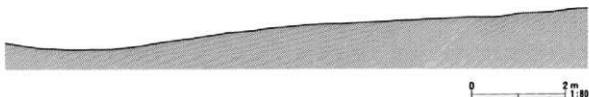


図43 御手長山古墳土層断面図(4)

周堀は幅15.2mを測る。墳丘北東側から西側にかけて、整円を描き、堀幅を変えることなく安定的にめぐっている。ただし、墳丘南側の石室主軸線上に設定された1次調査AトレンチおよびAグリッドでは周堀が見られず、石室開口部前面には周堀の途切れる箇所が存在する。

堀底は墳丘北東から北側にかけては平坦であるが、北から北西側にかけて堀底中央に不整形の落ち込みが見られる。また、西方の外側立ち上がり寄りにも不整形の深い落ち込みがある。さらに、南西側の1次調査B～Dトレンチにおいても円形の窪みが存在する。

覆土は黒褐色から暗褐色系の土層で占められる。全体にロームブロックを含み、中位にAs-Bを含んでいる。Hr-FAの堆積は認められない。

## (2) 遺物

周堀覆土および表土から相当量の埴輪を出土している。原位置を保つ資料は存在しない。周堀覆土の資料も上層からの出土が多く、また特定の層位に集中する傾向も認められず、配列を復元できるだけの情報は得られていない。

### a. 埴輪

**円筒埴輪** [1～62] (図44～49、写真36～41)

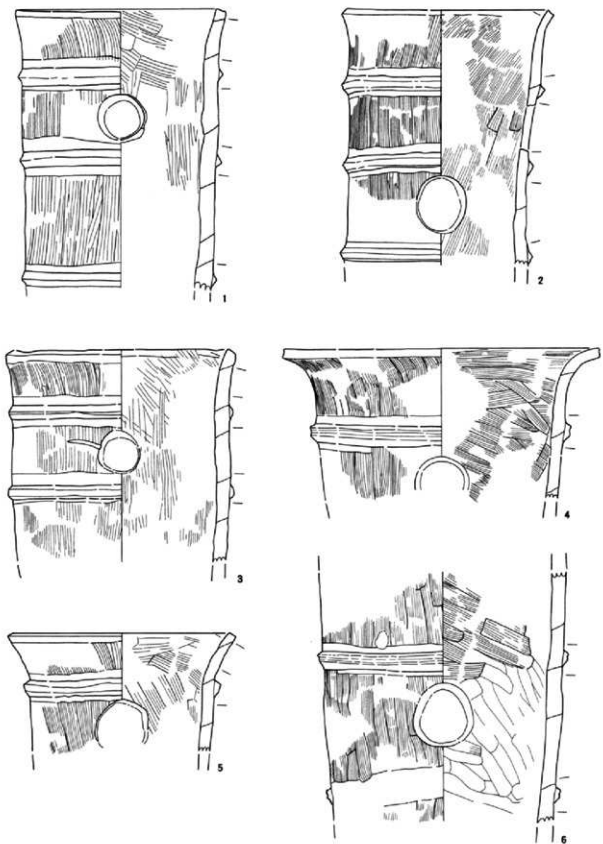
円筒埴輪は全形の判明する資料が存在しない。2のように透孔が2段連続して存在する個体が確認される。径のやや小さな資料が多いことから、3条突帯4段構成体が主体を占めると思われる。ただし、4・6のような径の大きな資料もあり、これらは4条突帯5段構成体の大型品となる可能性もある。

外面調整はいずれも1次調整のみで、2次調整を欠いている。46～49のように板押圧による底部調整を施す個体を確認できる。

内面調整は縦位および斜位のハケおよびナデである。ハケは上位3段に対応する範囲にほぼ限定される。口唇部は内外面・端面とも横位のナデを施している。

突帯は断面形が崩れた台形を呈するものが大半を占め、1・17のように断面形が三角形を呈するものが含まれる。

透孔はすべて円形であるが、歪みがあり不整形をなすものが多い。3条突帯4段構成体は第2・3段に、一對を90°づつ角度を違えながら穿っている。段中の穿孔位置は個体により異なる。線刻を加える個体は確認できない。



0 10cm 1:4

图44 御手長山古墳出土円筒埴輪実測图(1)



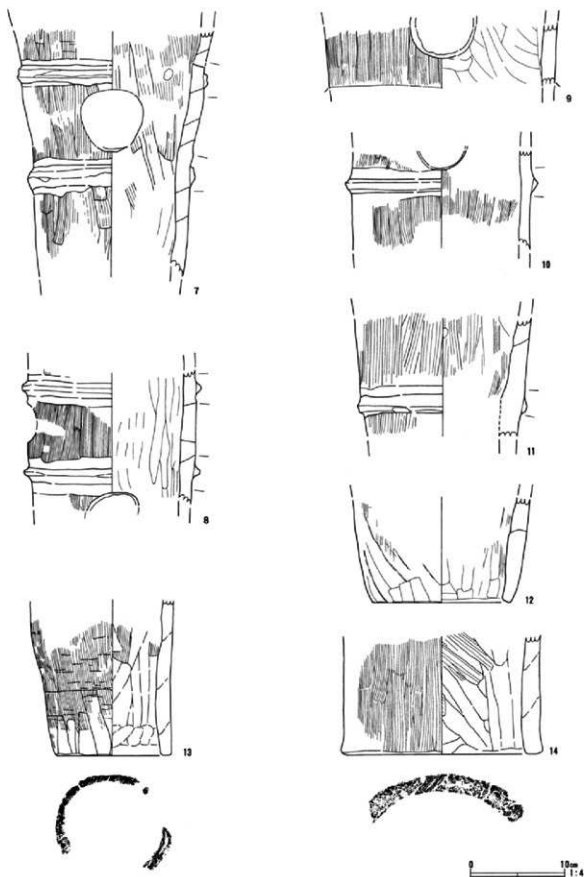
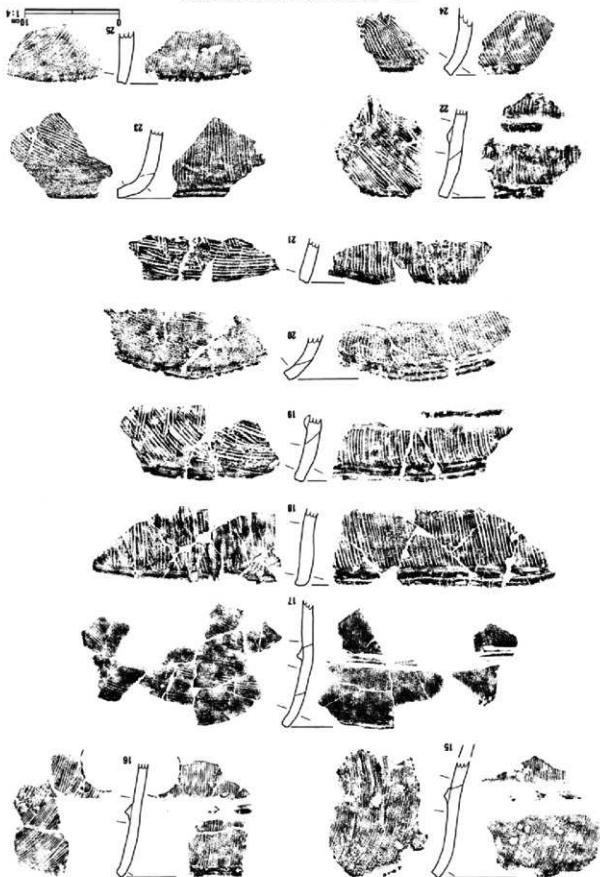


图45 御手長山古墳出土円筒輪実測(図2)

圖46 獅手長山古墳出土円筒埴輪石影(1)



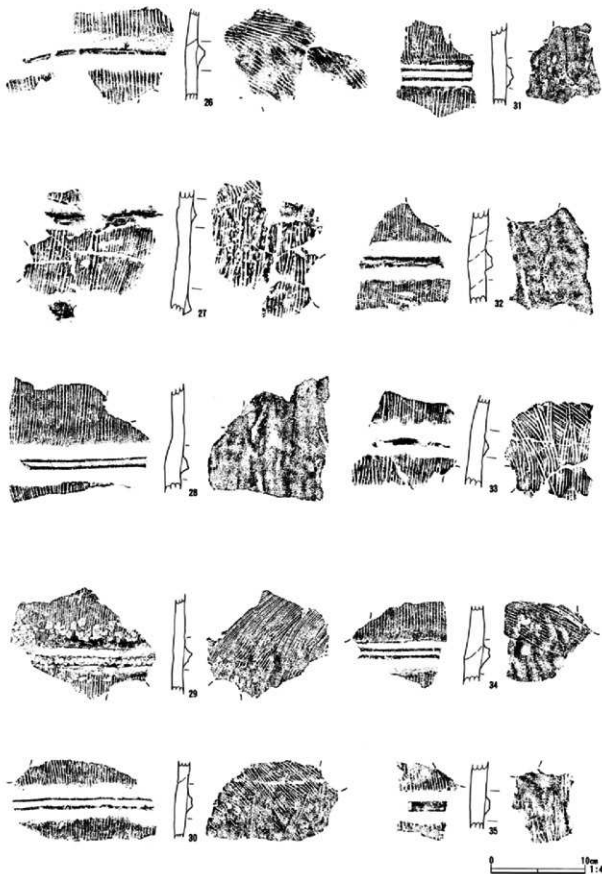
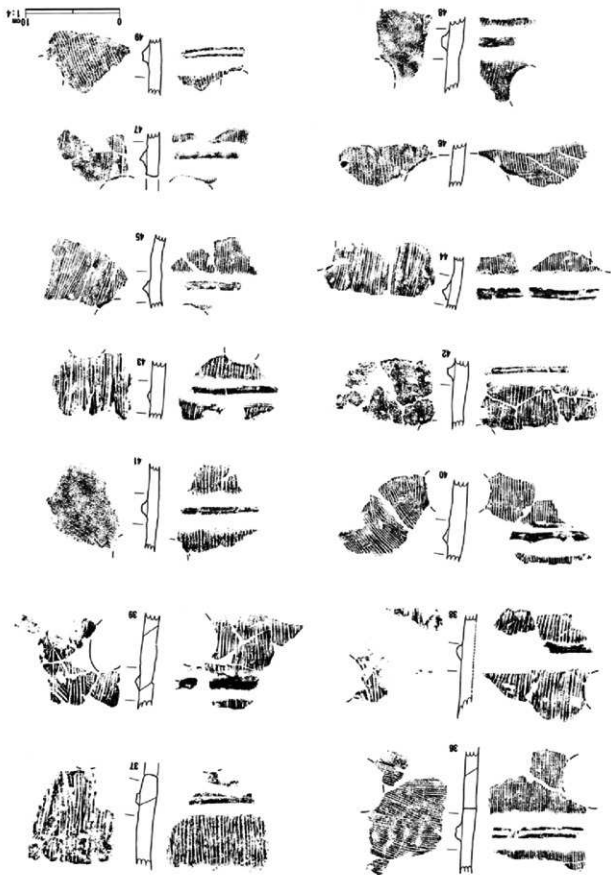


図47 御手長山古墳出土土甎筒埴輪拓影(2)

圖48 仰手長山古墳出土丹波織紋形影(3)



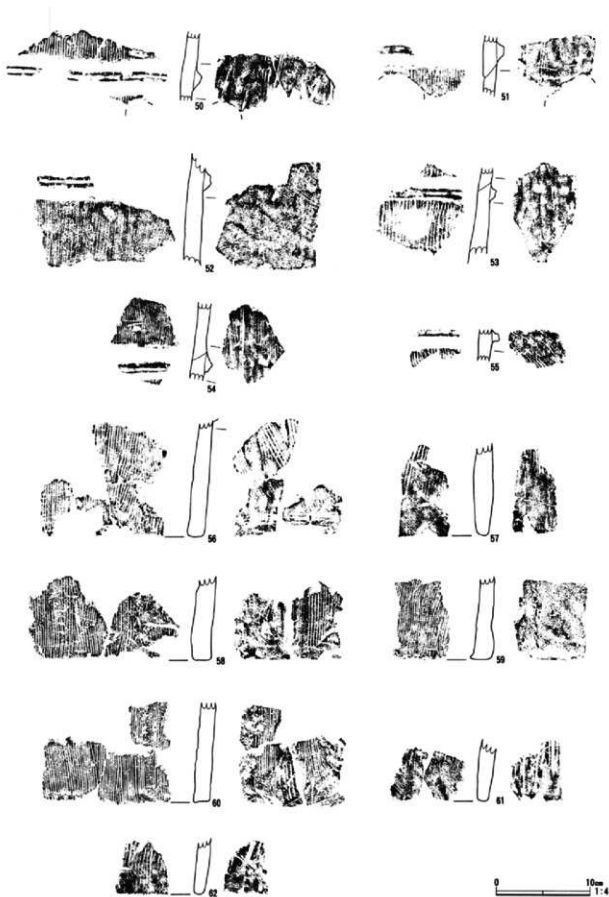


图49 御手長山古墳出土土陶筒輪拓影(4)

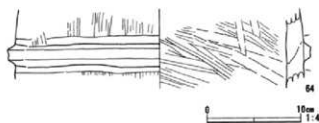
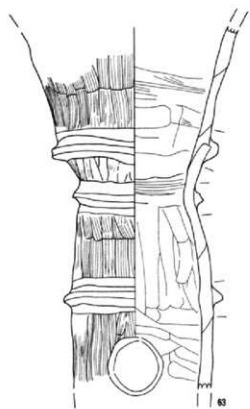


図50 御手長山古墳出土朝顔形埴輪実測図

形象埴輪 (図51～57、写真42～47)

家 [1～15] (図51、写真42・43)

1は組合式入母屋形屋根の上半部下端である。外面は縦および斜位のハケを施した後、格子状の線刻を入れている。下縁には突帯を貼付し、横位のナデを加えている。裏側は剝離面となっている。胎土には砂礫を多く含み、焼成は良好で、色調はにぶい明褐色を呈する。

2は壁の一部と考えられる破片である。横方向へ緩やかに湾曲している。調整は外面が縦位のハケ、内面が斜位のハケおよびナデである。横位の突帯を貼付し、横位のナデを加えている。胎土にはきわめて微細な砂粒を含み、焼成は良好で、色調は明橙褐色を呈する。

3は壁の下端部である。調整は外面が縦位のハケ、内面が斜位のナデである。下縁近くに横位の突帯を貼付し、横位のナデを加えている。胎土には石英と雲母の混じる細砂粒を含み、焼成は良好で、色調は明赤褐色を呈する。

胎土は全体に砂粒を含有しているが、結晶片岩を含むもの、角閃石安山岩を含むもの、結晶片岩・角閃石安山岩とも含まないものの3種があり、板押圧による底部調整を施す個体は結晶片岩を含むものと対応するようである。焼成は総じて良好である。還元焼成の個体は認めない。色調は明赤褐色からにぶい橙褐色までの幅が存在する。

朝顔形埴輪 [63・64] (図50、写真42)

63は細身の朝顔形埴輪である。肩部の張りが緩やかで、口縁部の開きも小さく、口縁上半の外側もきわめて小さいようである。

外面調整は1次調整のみで、2次調整を欠いている。肩部調整も含め、すべて縦位のハケである。内面調整は胴部から肩部にかけて縦位および斜位のナデ、頸部は横位のハケで、口縁部下半は斜位のハケおよびナデである。

突帯は断面形が突出度の高い台形を呈し、円筒埴輪に比べ、器面へのナデつけを丁寧に施している。胴部最上段に1対の円形透孔を配する。線刻はない。

胎土は砂礫を多く含み、焼成は良好で、色調は橙褐色を呈する。

64は突帯上位が内側に湾曲することから、これを肩部と見て朝顔形埴輪に含めた。

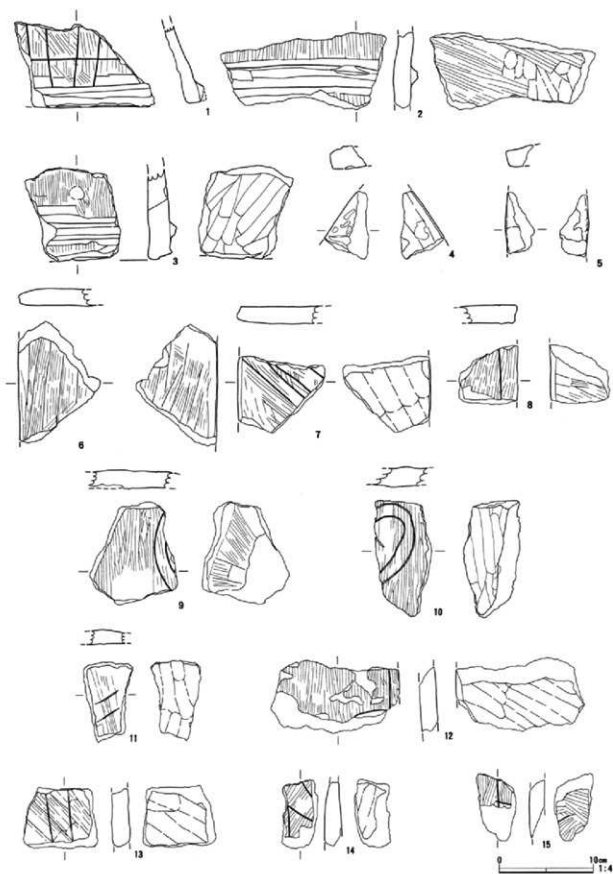


图51 御手長山古墳出土形象埴輪実測图(1)

4～15は屋根および壁の一部と思われる破片である。線刻の形状から盾の縁辺部の可能性のある破片を含むが、きわめて平板できわめて厚手の造りであることから家として区分した。調整は外面が縦位および斜位のハケ、内面が不定方向のハケおよびナデである。全体に胎土には砂礫を多く含み、焼成は良好で、色調はにぶい明褐色を呈する。

9・10には弧状の線刻があり屋根の一部である。また、7・8・13・14などの直線的な線刻の入る個体も同様であろう。12は壁の一部と考えられる破片である。横方向へ緩やかに湾曲している。調整は外面が縦位のハケ、内面が斜位のナデである。外面には縦位に1条の線刻がある。

人物 [16～21] (図52、写真43)

16は美豆良と考えたが、馬の尾の可能性を残す。断面円形の棒に丁寧なナデを加え、その上から細い粘土紐を螺旋状に巻き付けている。胎土は精製され砂粒をほとんど含まず、焼成は良好で、色調は明橙褐色を呈する。

17は頭部本体から剥離した耳である。左右の区別は判然としない。高さのある環状の耳表現で中央に耳孔を穿っている。調整は全面的に粗いナデで、剥離面には頭部本体のハケ調整の圧痕が残っている。胎土は砂礫を多く含み、焼成は良好で、色調はにぶい明褐色を呈する。18の鼻と同一個体で、盾持人物の耳の表現と考えられる。

18は顔面から剥離した鼻である。きわめての鷲鼻で、下面にはヘラ状工具の先端で刺突を加え鼻孔を表現している。調整は全面的に丁寧なナデが施されている。胎土には砂礫を多く含み、焼成は良好で、色調はにぶい明褐色を呈する。17の耳と同一個体で、盾持人物の鼻の表現であろう。

19は美豆良である。中実成形で、先端が尖る。左右の区別は判然としない。調整は縦位のハケおよびナデを粗く施している。胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調はにぶい明橙褐色を呈する。

20は側頭の一部である。調整は外面が縦位のハケ、内面が不定方向のハケおよびナデである。耳の表現と思われる環状粘土の貼付があり、内部にはナデを加えている。胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調はにぶい明赤褐色を呈する。

21は腕である。左右の区別は判然としない。中実成形で、調整は全面に丁寧なナデを加えている。胎土は精製され砂粒をほとんど含まず、焼成は良好で、色調は明橙褐色を呈し、16の美豆良とした資料と同様である。

馬 [22～43] (図52～55、写真44～46)

22・23は馬の左側頭の一部である。22は円筒形に造出した頭部本体の下側に粘土板を追加して頸部を成形している。調整は外面がハケ、内面が粗いハケおよびナデである。環状鏡板付轡の表現がある。環状鏡板の立間に近い鼻革と頬革の交差部分には円形で中央に円錐状の突起が付く辻金具を表現し、鼻革と頬革の下端部には四銜を表現する方形の飾金具が付く。頬革の下には引手の剥離痕がある。胎土は精製され粗砂をほとんど含まず、焼成は良好で、色調は明橙褐色を呈する。

23は円筒形の頭部本体をもたず、粘土板を「U」字状に曲げて形成するタイプと思われる。調整は外面がハケ、内面が粗いハケおよびナデである。剥離痕から鏡板付轡の表現があったことがわかるが、頬革を残し大半が剥落している。鏡板の型式も不明である。頬革の表面にヘラ状工具による線刻と刺突で、革の縫い目の表現がある。上端に眼孔の一部が残る。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調はにぶい明橙褐色を呈する。



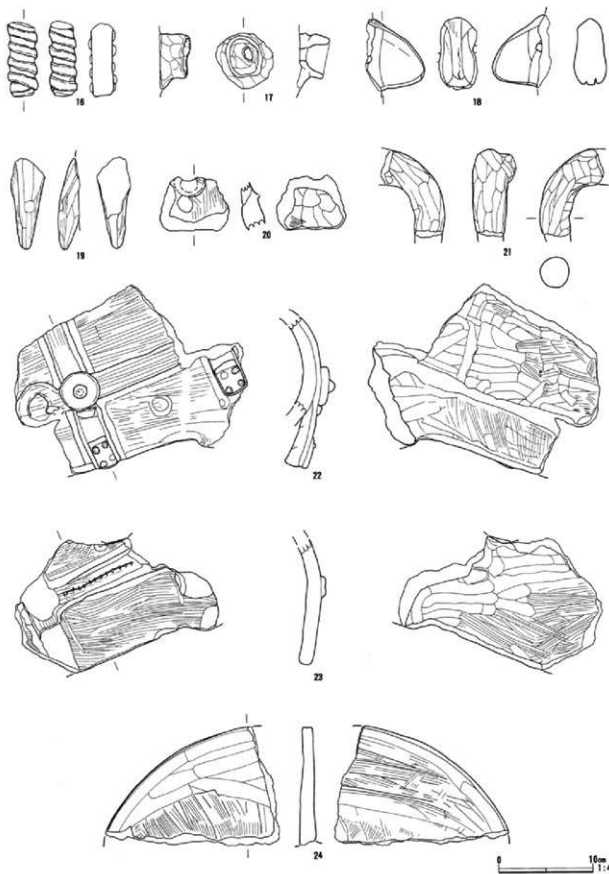


图52 御手長山古墳出土形象埴輪実測(四)

24は鞍橋の一部と判断した。前輪か後輪かの区別はつかない。調整は両面とも内寄りに放射状のハケを施し、外縁近くは曲線に沿ってハケもしくはナデを加えている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調はにぶい明橙褐色を呈する。

25は左障泥の後下隅周辺の破片である。調整は外面が横位ハケのちナデ、内面が縦位および横位のハケである。表面には外縁に沿って2条の線刻が走り、裏面には胴部本体に接合するための粘土帯が残る。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調はにぶい明橙褐色を呈する。

26は部位を特定できないが、障泥の可能性を残す。板状の破片で横方向へ緩やかに湾曲している。調整は外面が縦位および斜位のハケ、内面が斜位のハケで著しく摩耗している。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調はにぶい明橙褐色を呈する。

27も部位を特定できないが、幅広の粘土紐の剥離痕を残すことから馬の一部である可能性を考えた。板状の破片で、湾曲がない。調整は外面が縦位あるいは横位のハケ、内面が斜位のハケである。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調はにぶい明橙褐色を呈する。

28は湾曲の状態から尻の一部と判断した。調整は外面がハケのちナデ、内面が粗いナデおよびハケである。幅広の粘土帯で尻繫を表し、四銚を打つ方形の飾金具が付く。胎土は精製され粗砂をほとんど含まず、焼成は良好で、色調は明橙褐色を呈する。

29～33は脚部である。成形はいずれも粘土紐積上による。調整は外面が縦位のハケ、内面が同じく縦位の粗いハケである。29は脚の付根から中位にかけての部位である。前後の区別がつかないが、前脚ならば左、後脚ならば右である。30～32は基部から中位にかけての部位である。成形には切開再接合技法は用いていない。また、蹄を表す切り込みも認めない。底面に作業台の木目圧痕が残る。胎土は精製され粗砂をほとんど含まず、焼成は良好で、色調は明橙褐色を呈する。

34～40は本体から脱落した馬具の一部である。34は雲珠・辻金具の脚もしくは飾金具で面繫ないし尻繫から剝離したものであろう。方形の粘土板の上に粘土粒を貼付して四銚を表している。調整はハケのちナデを施している。35も面繫ないし尻繫から剝離した辻金具で、22の面繫に表現された辻金具と同形である。調整は全面にナデを加えている。36～40は面繫ないし尻繫から剝離した鈴で、36～38が中実成形、39・40が中空成形という違いがある。調整は36～38が丁寧なナデであるのに対し、39・40はやや粗いナデを施している。

41は尾の可能性はあるが、他の部品に比べ極度に小型であり、部位の特定が難しい。別器種の部品となることも考えられる。調整は粗いハケを施している。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調はにぶい明橙褐色を呈する。

42・43は胸繫から剝離した馬鐔である。鐘を縦に半裁したような形態で、左右の下縁に弧状の挟り込みがある。調整は外面が縦位のハケ、内面が縦位のナデである。縦に1条の線刻を施したのち、左右対称に弧状の線刻を4本加える。さらに、正面にあたる縦横の線刻の交点と弧状線刻の左右の終点に円形の粘土粒をしている。上端にU字状の粘土紐を貼付している、内面に舌の表現はない。胎土は精製され、粗砂をほとんど含まず、焼成は良好で、色調は明橙褐色を呈する。

器種不明 [44～60] (図56・57、写真47・46)

44～48は家の可能性がある。44は方形の透孔があり壁面に設けられた出入口の一部とも見られる。上半は剝離痕があるが、原形の推測は難しい。調整は外面が縦位のハケ、内面が斜位のハケである。

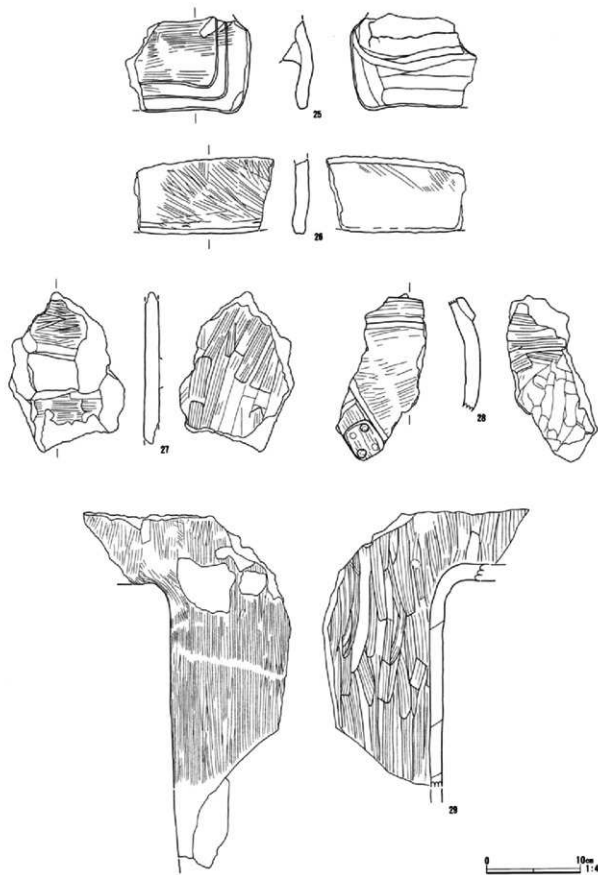


图53 御手長山古墳出土形象埴輪実測図(3)

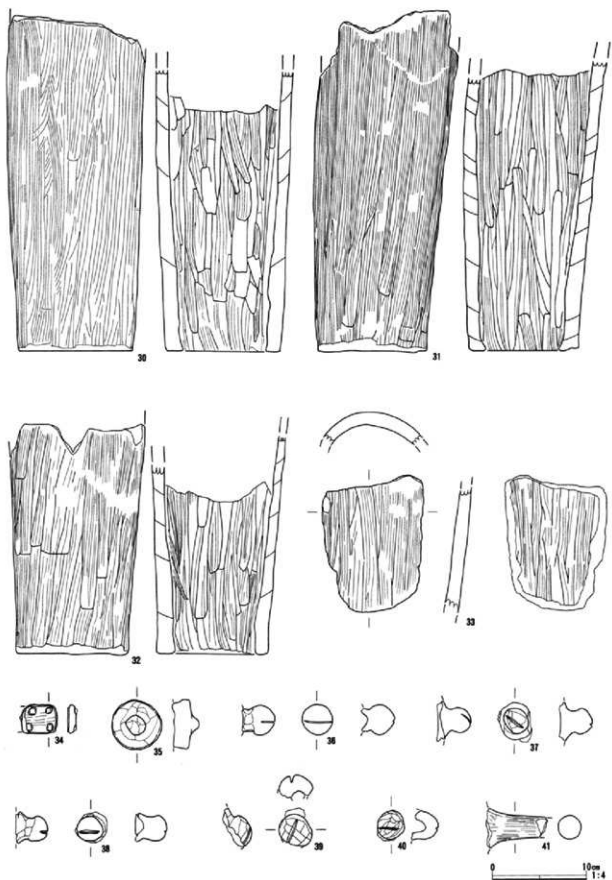


图54 御手長山古墳出土形象埴輪実測図(4)

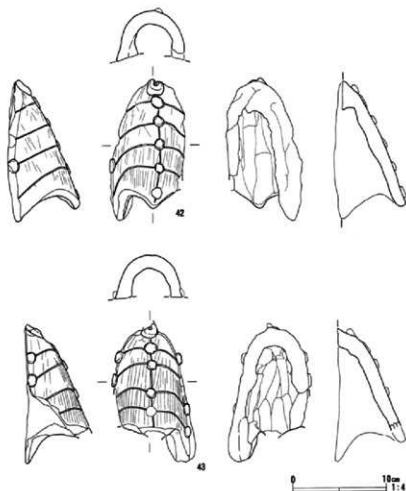


図55 御手長山古墳出土土形象埴輪実測図5)

45は突帯下に円形透孔がある。調整は外面が縦位のハケ、内面が斜位のハケである。家であれば妻側の壁となろう。46は小片であるが入母屋形屋根上半の妻部の破片となる可能性が考えられる。調整は外面がナデ、内面がハケである。外面には弧状の線刻が入る。47・48は棟から伸びる煙突状部品の先端から垂下する鰭状部の破片と思われる。調整は全面に粗いハケを施している。44～48は全体に胎土には砂礫を多く含み、焼成は良好で、色調はにぶい明褐色を呈する。

49は緩やかに湾曲する破片で、調整は表裏とも粗いハケとナデで、片面に弧状の線刻を2条加えている。

50・51は薄い方形の板状部品で、表裏とも作業台の木目圧痕が残り、表面には刷毛目工具による波状文を加えている。51は横方向に湾曲している。50・51とも裏側は剝離面となっている。胎土は精製され粗砂をほとんど含まず、焼成は良好で、色調は明橙褐色を呈する。

52は円蓋状の部分で調整は内外面ともナデである。双脚人物の台部天井の一部となる可能性がある。胎土には砂礫を多く含み、焼成は良好で、色調はにぶい明褐色を呈する。

53・54は突帯がつき、上下方向に緩やかな湾曲をもつ。53には細身の突帯がつく。調整は内外面とも斜位のハケおよびナデである。53は胎土には砂礫を多く含み、焼成は良好で、色調はにぶい明褐色を呈する。54は器面の風化が著しい。調整は外面が縦位のハケ、内面が斜位のハケである。胎土は砂粒

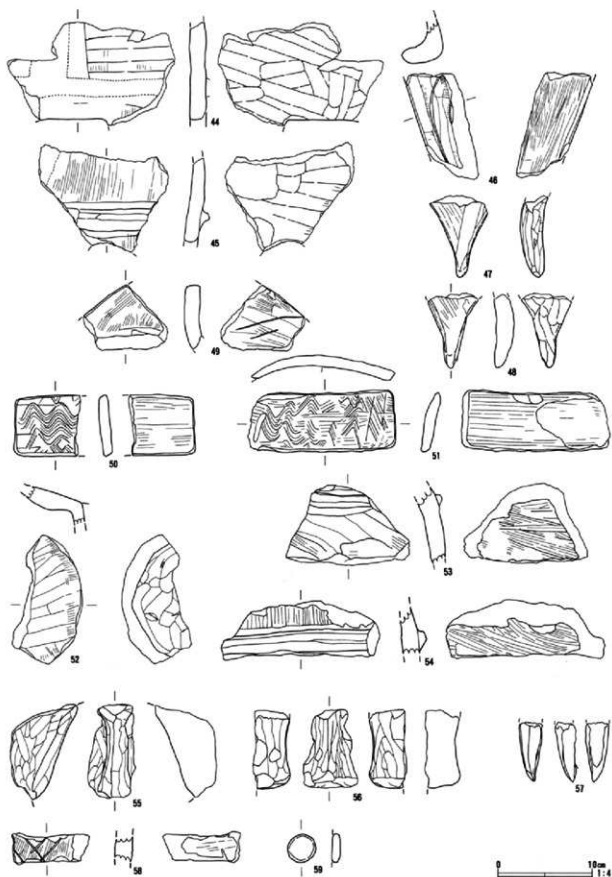


图56 御手長山古墳出土土形象埴輪実測图(6)

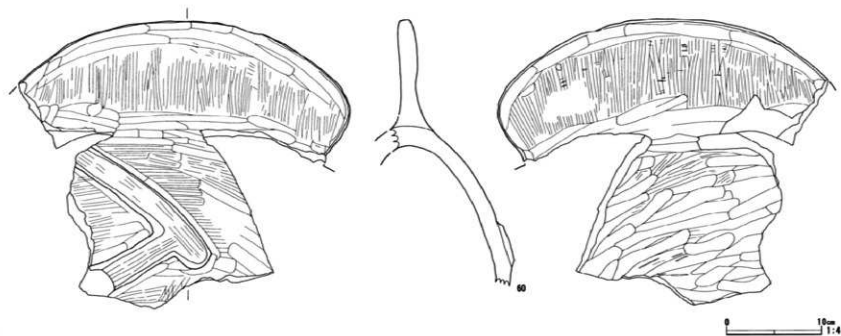


図57 御手長山古墳出土形象埴輪実測図(7)

を含み、焼成は良好で、色調は明黄褐色を呈する。

55・56は不整形の粘土塊で、調整は全面に粗いナデが施している。57は先端の尖る部品である。調整は全面に粗いナデである。58は斜格子状の線刻が入る部品である。調整は外面が縦位のハケ、内面は横位のナデである。55～58の胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調はにぶい明橙褐色を呈する。

59は本体から剝離した小型円板である。大型人物の首飾を構成していた可能性がある。胎土は精製され粗砂をほとんど含まず、焼成は良好で、色調は明橙褐色を呈する。

60は馬の首部から鬣にかけての表現に似るが、頸部の断面形、頸部表面の粘土帯、鬣の形状などが馬形埴輪に酷似することから器種不明の個体として扱った。調整は外面がハケ、内面がナデおよびハケである。胎土は精製され粗砂をほとんど含まず、焼成は良好で、色調は明橙褐色を呈する。

### C. 土器

#### 須恵器高坏 [1] (図58、写真47)

1次調査時の出土資料であるが、観察の結果、1次調査報告に掲載の実測図と実物とがやや異なることが判断されたため、再実測のうえ本書に掲載した。

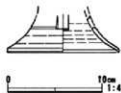


図58 御手長山古墳出土土器実測図

須恵器高坏の脚部の小片である。四方透しと推定され、透し下端に沿って1条の凹線がめぐる。胎土に石英を含み、焼成は良好である。色調は内外面ともオリーブ黒色を呈するが、断面はにぶい赤褐色を示す。

#### 御手長山古墳出土土器観察表

番号	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	須恵器 高坏	口径 — 底径 (11.9) 器高 —	下端幅1.5cm前後の4方透しと推定される。底部は外反して閉き、底部下方に折れる。透し下端に凹線1条。ロクロ成形。	ロクロ整形。	石英 内外—オリーブ黒 器内—にぶい赤褐色	裾部小片。

### (3) 小 結

御手長山古墳の築造時期は、1次調査出土の副葬遺物から6世紀末葉と考えられる。古墳の規模は、東側周堀の様相が明らかではないものの、現状で墳丘径約49m、周堀を含む外径約78mを測る。この数値は、旭・小島古墳群中の後期古墳では最大であり、6世紀末葉の円墳としては、西関東でも有数の規模を誇る。後期段階には前方後円墳に集中する挂甲を副葬遺物に含むことから、この地域の盟主的な被葬者の存在が推測される。



## 8 堂場12号墳

[A地点]

調査期間 平成8年12月4日～平成8年12月26日

調査面積 45㎡

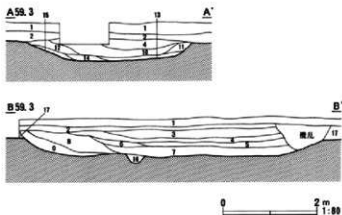
調査原因 区画整理に伴う宅地造成

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司

### (1) 遺構

本庄市小島3丁目地内にあって、中心をX=27,457、Y=-59,537付近におく。周囲には北側に堂場13号墳、北東側にやや離れ上原原16号墳が所在する。調査着手の時点で墳丘盛土を完全に失っており、確認調査によってはじめて所在が判明した。トレンチ調査により墳丘西側から北西側にかけての周堀の一部を検出した。面的な調査を経ていないため必ずしも正確ではないが、墳丘径18m前後の円墳と推定される。表土が直接ローム層を被覆する状態で、墳丘盛土、旧表土とも完全に失われている。埋葬施設の痕跡は見られない。

周堀の立ち上がりは、内側がほぼ整円を描くと推測されるのに対し、外側は北西側が大きく外に張り出し、結果として周堀幅にはかなりの広狭が見られる。周堀底面には緩やかな凹凸が見られる。確認面での周堀上幅は、Aトレンチで6.4m、Cトレンチで3.6m、深さはAトレンチで40cm、Cトレンチで30cmを測る。



堂場12号墳土層説明

- |         |         |                              |
|---------|---------|------------------------------|
| 1 表土    | 9 暗灰褐色土 | 暗褐色土ブロック、砂粒、礫(径5~20mm)を少量含む。 |
| 2 灰褐色土  | 10 黒褐色土 | ローム粒子を少量含む。                  |
| 3 黒灰褐色土 | 11 暗褐色土 | ローム粒子を少量含む。                  |
| 4 黒灰褐色土 | 12 暗褐色土 | ローム粒子を多量に含む。                 |
| 5 黒灰褐色土 | 13 暗褐色土 | ロームブロックを多量に含む。               |
| 6 黒褐色土  | 14 褐色土  | ローム粒子を少量含む。                  |
| 7 黒褐色土  | 15 褐色土  | ロームブロックを多量に含む。               |
| 8 暗褐色土  | 16 暗褐色土 |                              |
|         | 17 褐色土  | 地山層                          |

図59 堂場12号墳土層断面図

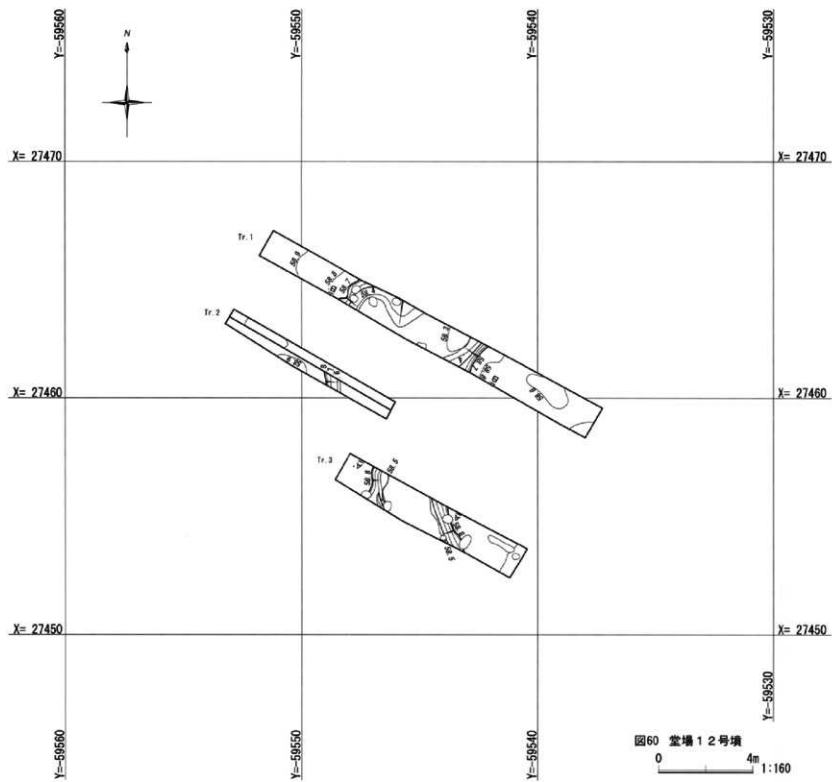


图60 堂場12号墳  
 0 4m 1:160



周堀覆土は14層に分けられる。上位の2～4層中にはAs-Bの混入が認められる。5層以下には全体にロームブロックを含んでいる。7～9層には砂礫を含む土層が、下層の13～15層にはロームブロックを多量に含む土層が見られる。Hr-FAの堆積は確認できない。

## (2) 遺物

出土遺物は、周堀覆土、表土を含め、時期の限定できない少数の土師器片のみであった。埴輪は全く出土していない。

## (3) 小 結

伴出遺物がないため構築時期は確定できない。周堀の平面形が不規則な広がりを見せ、埴輪をもたないことから、7世紀まで降下する可能性が考えられる。

## 9 堂場13号墳

### [A地点]

調査期間 平成3年4月10日～平成3年4月26日

調査面積 420㎡

調査原因 区画整理に伴う市道建設

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 長谷川勇・佐藤好司

備 考 同一調査区内で堂場15号墳の周堀 [堂場15号墳A地点] を検出

### [B地点]

調査期間 平成8年12月4日～平成8年12月26日

調査面積 45㎡

調査原因 区画整理に伴う宅地造成

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司

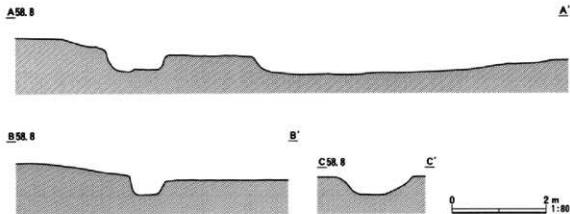
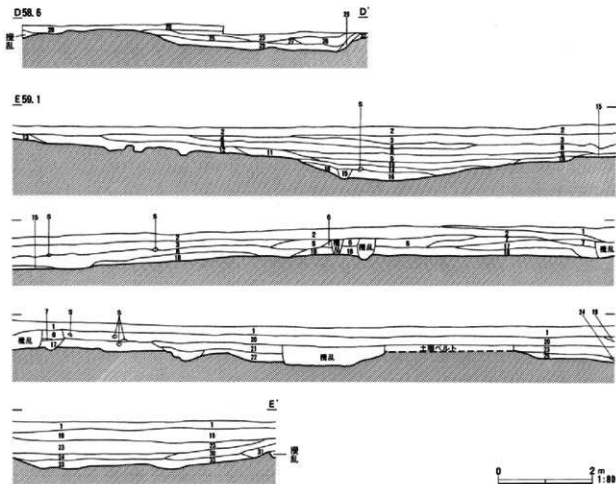


図61 堂場13号墳土層断面図(1)



堂場13号墳A地点土層説明〔D-D'E-E'〕

- |          |                               |          |                                       |
|----------|-------------------------------|----------|---------------------------------------|
| 1 灰褐色土   | 白色バミスを多量に含む。                  | 18 暗褐色土  | ローム質土を主体とする。礫(径50~100mm)を少量含む。        |
| 2 灰褐色土   | 白色バミスを多量に含む。しまり欠。             | 19 黒灰褐色土 | 白色バミスを多量に含む。                          |
| 3 暗灰褐色土  | 白色バミスを多量に含む。                  | 20 黒褐色土  | 白色バミスを多量に含む。礫(径100~200mm)を少量含む。       |
| 4 暗灰褐色土  | 白色バミスを多量に含む。ロームブロックを少量含む。     | 21 暗褐色土  | 白色バミスを多量に含む。                          |
| 5 灰褐色土   | ロームブロックを多量に含む。                | 22 暗褐色土  | 白色バミスを多量に含む。礫(径50~100mm)を少量含む。        |
| 6 黒褐色土   | 白色バミス、ロームブロックを少量含む。           | 23 暗褐色土  | ロームブロック、黒色土ブロックを少量含む。                 |
| 7 黒灰褐色土  | 暗褐色土ブロックを多量に含む。               | 24 黒灰褐色土 | As-Bを多量に含む。礫(径50~100mm)を少量含む。         |
| 8 暗褐色土   | ローム質土を主体とする。                  | 25 暗褐色土  | ロームブロックを少量含む。                         |
| 9 黒灰褐色土  | As-Bを多量に含む。                   | 26 暗褐色土  | ロームブロックを少量含む。                         |
| 10 黒灰褐色土 | As-B、暗褐色土ブロックを多量に含む。          | 27 灰褐色土  | ロームブロックを多量に含む。                        |
| 11 暗褐色土  | 暗褐色土ブロック、黒色土ブロックを多量に含む。       | 28 暗褐色土  | ロームブロックを多量に含む。                        |
| 12 暗灰褐色土 | As-Bを多量に含む。礫(径50~100mm)を少量含む。 | 29 暗黄褐色土 | ロームブロックを多量に含む。                        |
| 13 暗褐色土  | ロームブロックを多量に含む。                | 30 暗褐色土  | 白色粒子を少量含む。                            |
| 14 暗黄色土  | ローム質土を主体とする。                  | 31 灰褐色土  | ロームブロックを少量含む。                         |
| 15 暗褐色土  | ロームブロック、黒色土ブロックを多量に含む。        | 32 暗黄褐色土 | ロームブロックを多量に含む。                        |
| 16 暗黄褐色土 | ローム質土を主体とする。                  | 33 暗黄褐色土 | ローム土を主体とする。黒色土ブロック、礫(径50~100mm)を少量含む。 |

図62 堂場13号墳土層断面図(2)

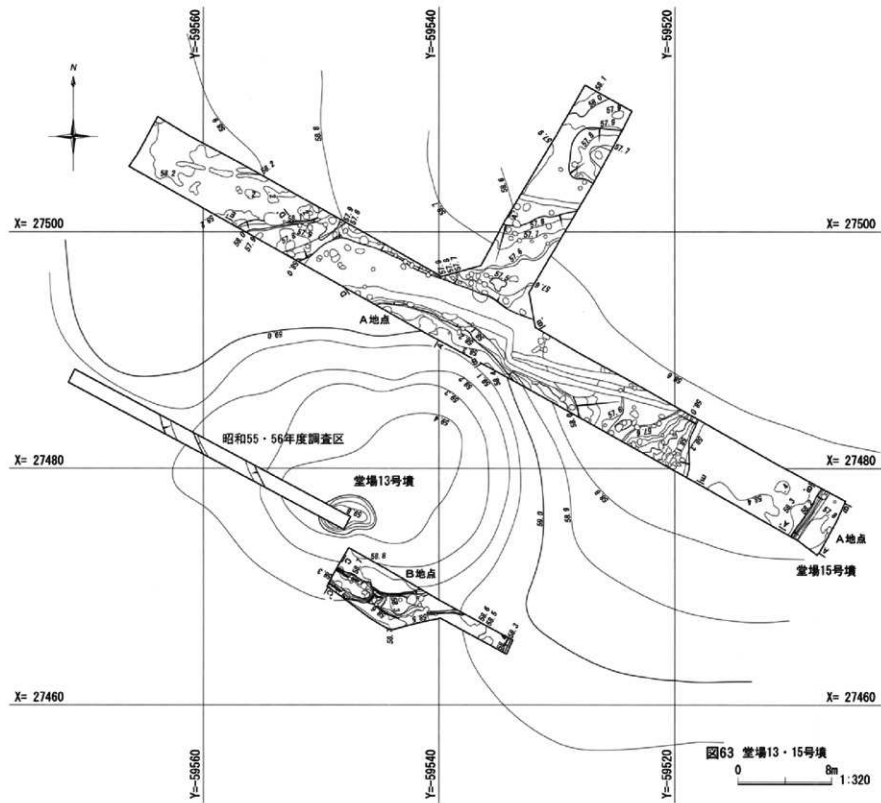


図63 堂場13・15号墳  
 0 8m 1:320



### (1) 遺 構

本庄市小島3丁目地内において、中心をX=27,482、Y=-59,542付近におく。周囲には南側に堂場12号墳、東側に堂場15号墳が所在する。

堂場14号墳は昭和56年度の範囲確認調査報告で蛭子塚支群第1号墳とされた古墳である。範囲確認調査を実施した時点では、現地に低平な地彫れ状の高まりを観察しているが、墳丘盛土の存在は確認していない。一部のトレンチでは周堀内に崩落した葺石と家形埴輪の破片を検出している。

今回報告の調査に着手した時点では、かつて存在した地彫れ状の高まりは完全に消滅し、平坦な畑地となっていた。A・B地点とも表土が直接ローム層を被覆する状態であり、墳丘盛土、旧表土ともに失われている。埋葬施設の痕跡は見られない。

A地点では、調査区の南西壁際に円弧を描く一段の落ち込みがあり、広く緩やかな傾斜面を隔てて周堀が存在する。一方、B地点では、幅の狭い溝が、一見、周堀状に弧を描いてめぐっているが、調査区南東端には、緩傾斜面を隔てて、さらにもう一段の落ち込みを認める。B地点の幅の狭い溝は、北西側に隣接する昭和55・56年度の調査区には延長しないことから局所的に存在するらしい。平面的な位置関係や遺構面の水準を勘案すると、A・B地点で検出したこれらの遺構の関係は、A地点の弧状の落ち込みがB地点の狭い溝と、A地点の周堀がB地点南東端の落ち込みと対応するようである。すなわち、堂場14号墳の原状は中央に盛土による墳丘が存在し、周囲に地山削り出しによる幅広いテラスを設け、その外側に周堀がめぐる構造であったと推測される。A・B地点とも墳丘端部にかかる調査区であり、必ずしも正確ではないが、墳丘径30m前後の円墳と推定される。

周堀の立ち上がりは、内側がほぼ整円を描くのに対し、A地点の墳丘北東側では著しく幅を増す箇所が存在し、周堀幅にはかなりの広狭が見られる。確認面での周堀上幅は、A地点の墳丘東で8.8mを測る。堀底には凹凸があり、確認面からの深さ0.3~0.4mを測る。B地点で検出した溝は、確認面での上幅1.6~2.5m、深さ30~40cmを測り、ほぼ整円を描いてめぐっている。

周堀覆土は地点により様相が異なる、E-E'の9~10層中にはAs-Bの混入が認められる。また、5~20cm台の礫を含む層が目立つ。Hr-FAの堆積は確認できない。

### (2) 遺 物

出土遺物は、周堀覆土、表土を含めて、時期限定できない少数の土師器片のみであった。埴輪は全く出土していない。

### (3) 小 結

今回の調査でも、周堀覆土から昭和55・56年度の調査と同様に、相当量の礫を出土している。墳丘には葺石を施設していた可能性が高い。

伴出遺物がないため構築時期は確定できない。昭和55・56年度の調査では家形埴輪を検出しているが、今回の調査では埴輪は出土していない。築造時期は7世紀末以降の可能性が考えられる。



## 10 堂場14号墳

### [A地点]

調査期間 平成3年7月10日～平成3年7月17日

調査面積 100㎡

調査原因 区画整理に伴う宅地造成

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 長谷川勇・佐藤好司

### [B地点]

調査期間 平成3年9月10日～平成3年9月21日

調査面積 180㎡

調査原因 区画整理に伴う宅地造成

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 長谷川勇・佐藤好司

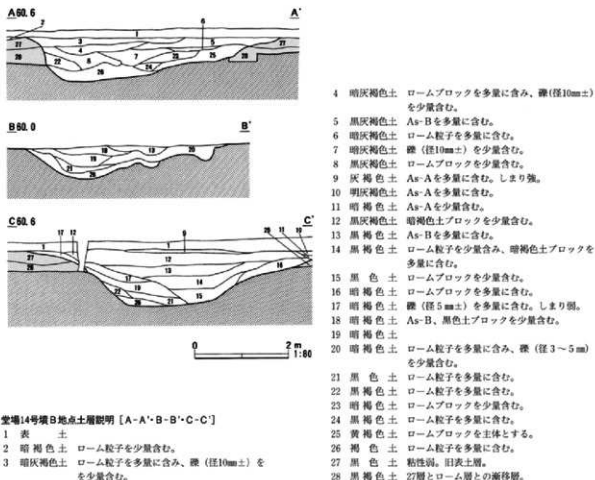
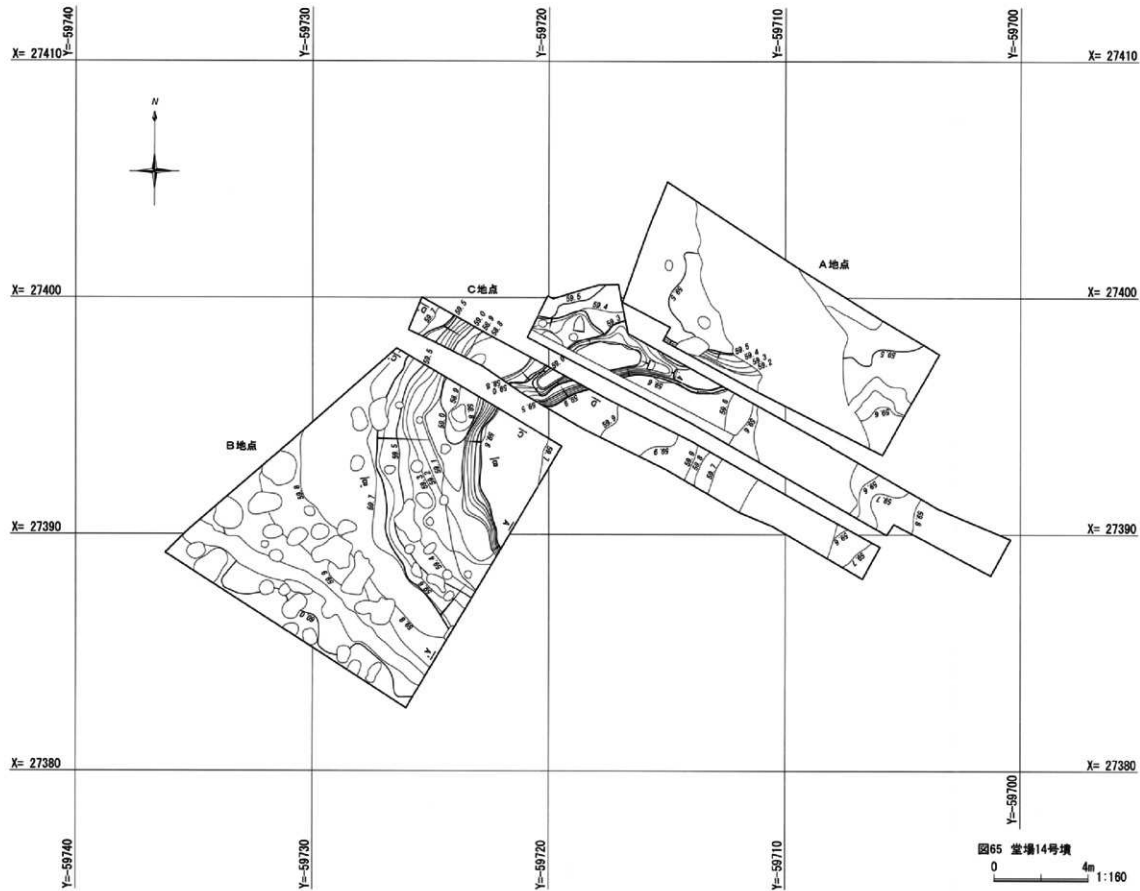


図64 堂場14号墳土層断面図(1)





[C地点]

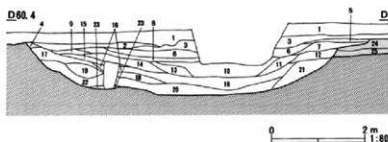
調査期間	平成4年7月14日～平成4年7月20日
調査面積	165m <sup>2</sup>
調査原因	区画整理に伴う市道建設
調査担当	本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司

(1) 遺 構

本庄市下野堂字堂場地内にあつて、中心をX=27,393、Y=-59,715付近におく。周囲にはやや距離をおいて北側に内出前1号墳、南側に永不2号墳が所在する。調査着手の時点で墳丘盛土を完全に失っており、確認調査によってはじめて所在が判明した。A～C地点の調査により全体の約1/2を検出した。表土層は現地地表35cm前後の厚さを測り、墳丘盛土、旧表土ともに失われている。とくにA地点およびC地点の東半に、大規模な攪乱が存在する。埋葬施設の有無は不明である。墳丘径10mの前後の円墳になるものと思われる。

周堀は内外の立ち上がりともかなりの乱れを生じ整円を描かない。B地点の墳丘南西側から徐々に堀幅を増してC地点の墳丘北側へと延長するが、墳丘真北側で周堀が途切れ、墳丘北東側から東側にかけては所在が確認できない。確認面での周堀上幅は、B地点の狭い部分で4.0m、広い部分では4.4mを測る。堀底には起伏があり、深さは40～60cmであるが、北西側には一段と深くなる箇所があり、この部分では約80cmを測る。

周堀覆土は地点により様相が異なる。上位に堆積する5・13層中にはAs-Bの混入が認める。Hr-FAの堆積は確認できない。墳丘部分には現表土下に黒色の旧表土層が残っている。



堂場14号墳C地点土層説明【D-D'】

1 客 土	14 暗褐色土	ローム粒子、礫(径5mm土)を少量含む。
2 灰褐色土	15 暗褐色土	ローム粒子、礫(径5mm土)を少量含む。
3 灰褐色土	16 暗褐色土	ローム粒子、礫(径2～10mm)を少量含む。
4 暗灰褐色土	17 黒灰褐色土	ロームブロックを多量に含む、砂粒を少量含む。
5 灰褐色土	18 暗黄褐色土	ロームブロックを多量に含む。
6 暗灰褐色土	19 暗黄褐色土	ローム粒子を多量に含む。
7 黒灰褐色土	20 暗褐色土	ローム粒子、黒色土ブロックを多量に含む。
8 黒灰褐色土	21 暗黄褐色土	ローム粒子、黒色土ブロックを多量に含む。
9 暗褐色土	22 暗灰褐色土	ローム粒子、暗褐色土ブロックを多量に含む。
10 黒褐色土	23 暗黄褐色土	ロームを主体とする。
11 黒褐色土	24 黒 色 土	旧表土層。
12 黒灰褐色土	25 暗黄褐色土	ソフトローム層。
13 暗褐色土		

図66 堂場14号墳土層断面図(2)



図67 堂場14号墳出土土器実測図

堂場14号墳出土土器観察表

番号	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 環	口径 (10.1) 底径 — 器高 (3.2)	体部は丸みを持って立ち上がり、 口縁部は短く内彎する。底部は丸 底。	外面一口縁部ココナダ、体部へ底部 ヘラケズリ。内面一口縁部ココナダ、 体部へ底部分ナダ。	石英・白色粒・黒 色粒 内外一色	1/3。
2	土師器 小型甕	口径 (9.2) 底径 — 器高 —	口縁部は短く外反気味に開く。	外面一口縁部ココナダ、胴部ヘラケ ズリ。内面一口縁部ココナダ、胴部 ヘラナダ。	石英・白色粒・黒 色粒 内外一色	口縁部片。
3	土師器 小型甕	口径 — 底径 — 器高 —	底部は丸底。	外面一底部ヘラケズリ。内面一底部 木口状工具ナダ。	石英・白色粒・黒 色粒 内外一色	底部片。

## (2) 遺物 (図67、写真47)

遺物は、B地点の覆土から少数の土師器小片を検出している。2・3の土師器小型甕はともに細片である。1は土師器内屈口縁環で1/3ほどが残る。体部をヘラケズリし、口縁部にはココナダを加えている。

## (3) 小 結

1の土師器内屈口縁環は7世紀後葉の所産と考えられ、本古墳の築造時期ないし追加的祭祀行為の継続期間の一端を示すものである。いずれにせよ、埴輪が全く出土していないことからすれば、築造時期は7世紀のうちにあると考えられる。

## 11 堂場15号墳

### [A地点]

調査期間	平成3年4月10日～平成3年4月26日
調査面積	420㎡
調査原因	区画整理に伴う市道建設
調査担当	本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 長谷川勇・佐藤好司
備考	同一調査区内で堂場13号墳の周堀 [堂場13号墳A地点] を検出

### (1) 遺 構

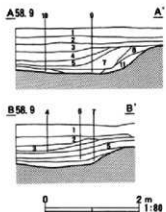
本庄市小島3丁目地内において、堂場13号墳A地点と同一調査区の南東端に位置する。周堀西側の外側立ち上りの一部を検出したのみである。覆土にAs-Bの混入を認めることなど他の古墳の周堀と同様の堆積状況を示す覆土を観察することから古墳と認定している。墳丘規模、埋葬施設など詳細は不明である。

### (2) 遺 物

出土遺物は皆無である。

### (3) 小 結

上前原16号墳との位置関係から、さほどに規模の大きな古墳でないと思われる。上前原16号墳の周堀が全周せず、本古墳の側で途切れていることから、両者の墳丘はきわめて近接した位置に存在するようである。



#### 堂場15号墳土層説明

- 1 灰褐色土 白色パミスを多量に含む。
- 2 暗褐色土 白色パミスを多量に含む。
- 3 暗褐色土
- 4 黒色土 As-Bを少量含む。
- 5 黒褐色土 黒色土ブロックを多量に含む。粘性強。
- 6 暗褐色土 礫(径20～50mm)を少量含む。
- 7 黒褐色土 礫(径20～50mm)を少量含む。
- 8 暗黄褐色土 黒色土ブロックを少量含む。
- 9 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 10 暗黄褐色土 黒色土ブロックを多量に含む。
- 11 暗黄褐色土 ロームブロックを多量に含む。

図68 堂場15号墳土層断面図

## 12 内出前1号墳

[A地点]

調査期間 平成7年1月7日～平成7年2月9日

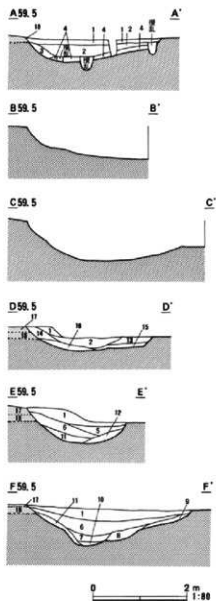
調査面積 740㎡

調査原因 区画整理に伴う宅地造成

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 佐藤好司

### (1) 遺構

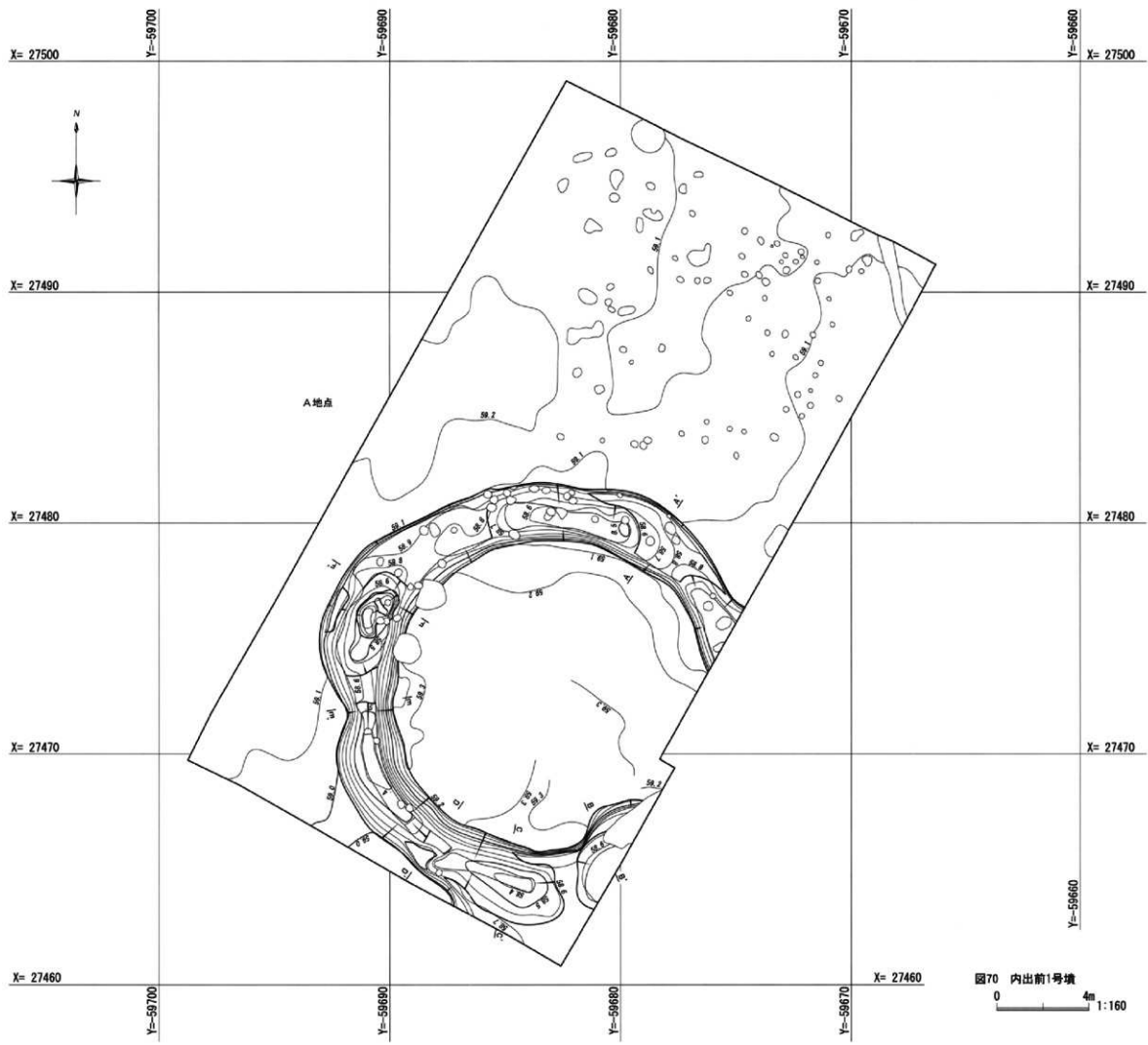
本庄市大字下野堂字内出前地内において、中心をX=27,473、Y=-59,682付近におく。周囲にはやや距離を置いて北東側に内出前2号墳が存在する。調査着手の時点で墳丘盛土を完全に失っており、



#### 内出前1号墳土層説明

- 1 暗灰褐色土 白色パミスを多量に含む。
- 2 暗灰褐色土 白色パミスを少量含む。
- 3 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 4 暗褐色土 ローム粒子を少量含む。
- 5 黒灰褐色土 白色パミス、ローム粒子を少量含む。
- 6 暗灰褐色土 白色パミス、ローム粒子を少量含む。
- 7 灰褐色土 ローム粒子を多量に含む。
- 8 暗褐色土 ローム粒子を多量に含む。
- 9 黒褐色土 ローム粒子を多量に含む。
- 10 黒褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 11 暗灰褐色土 ローム粒子を多量に含む。
- 12 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 13 暗灰褐色土 白色パミスを少量含む。
- 14 黒灰褐色土 白色パミスを少量含む。
- 15 暗灰褐色土 白色パミス、ローム粒子を少量含む。
- 16 褐色土 ローム粒子を多量に含む。
- 17 黒灰褐色土 田表土。
- 18 暗灰褐色土 田表土とローム層との漸移層。

図69 内出前1号墳土層断面図



X= 27500

Y=59700

Y=59690

Y=59680

Y=59670

Y=59660

X= 27500

X= 27490

X= 27490

X= 27480

X= 27480

X= 27470

X= 27470

X= 27460

Y=59700

Y=59690

Y=59680

Y=59670

Y=59660

X= 27460

图70 内出前1号坑

0 4m 1:160





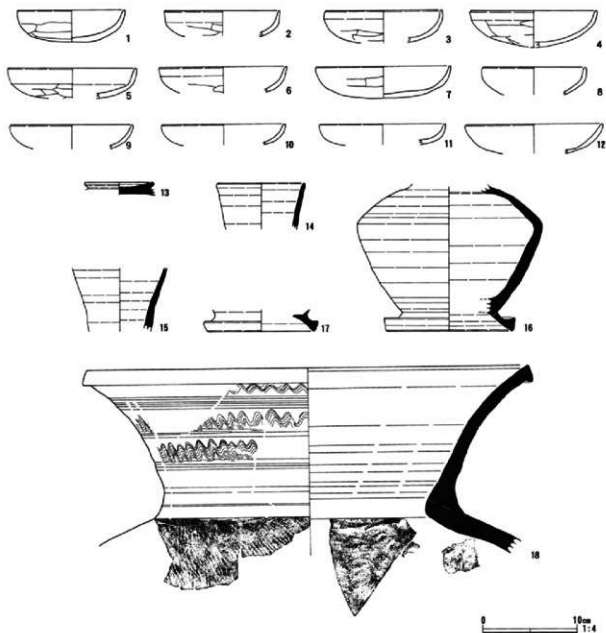


図71 内出前1号墳出土土器実測図

内出前1号墳出土土器観察表(1)

番号	器種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 坏	口径 11.2 底径 — 器高 3.4	体部は丸みを持って立ち上がり、 口縁部はわずかに内彎する。底部 は丸底。	外面—口縁部ヨコナデ、体部～底部 ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ、 体部～底部ナデ。	石英・白色粒・黒 色粒 内外一褐色	ほぼ完形。
2	土師器 坏	口径 (10.8) 底径 — 器高 —	体部は丸みを持って立ち上がり、 口縁部はわずかに内彎する。	外面—厚紙のため調整不明瞭。 内面—厚紙のため調整不明瞭。	石英・白色粒・黒 色粒 内外一褐色	1/4。
3	土師器 坏	口径 (14.4) 底径 — 器高 —	体部は丸みを持って立ち上がり、 口縁部は内彎気味に開く。	外面—厚紙のため調整不明瞭。 内面—厚紙のため調整不明瞭。	石英・白色粒・黒 色粒 内外一褐色	1/4。
4	土師器 坏	口径 (14.2) 底径 — 器高 3.3	体部は丸みを持って立ち上がり、 口縁部は内彎気味に開く。底部は 丸底気味。	外面—口縁部ヨコナデ、体部～底部 ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ、 体部～底部ナデ。	石英・白色粒・黒 色粒 内外一褐色	1/2。

内出前1号墳出土土器観察表(2)

5	土師器 坏	口径 (13.2) 底径 — 器高 —	体部は丸みを持って立ち上がり、 口縁部は内彎気味に開く。	外面—摩耗のため調整不明瞭。 内面—摩耗のため調整不明瞭。	石英・白色粒・黒色粒 内外—橙褐色	口縁部片。 内外—橙褐色
6	土師器 坏	口径 13.4 底径 — 器高 —	口縁部は体部との境に弱い稜を持ち、 やや外傾する。	外面—口縁部ヨコナデ、体部～底部 ヘラクスリ。内面—口縁部ヨコナデ、 体部～底部ナデ。	石英・角閃石・白色粒 内外—橙褐色	1/3。
7	土師器 坏	口径 (13.2) 底径 — 器高 (3.9)	口縁部は体部との境にわずかな稜を 持ち、やや外傾して立ち上がる。 底部は丸底。	外面—口縁部ヨコナデ、体部～底部 ヘラクスリ。内面—口縁部ヨコナデ、 体部～底部ナデ。	石英・白色粒・黒色粒 内外—ぶい い橙褐色	1/4。
8	土師器 坏	口径 (12.9) 底径 — 器高 —	体部は丸みを持って立ち上がり、 口縁部は内彎する。	外面—摩耗のため調整不明瞭。 内面—摩耗のため調整不明瞭。	石英・白色粒・黒色粒 内外—ぶい い橙褐色	1/6。
9	土師器 坏	口径 (12.2) 底径 — 器高 —	体部は丸みを持って立ち上がり、 口縁部は内彎する。	外面—口縁部ヨコナデ、体部～底部 ヘラクスリ。内面—口縁部～底部ナ デ。	石英・角閃石・白色粒 内外—ぶい い橙褐色	1/5。
10	土師器 坏	口径 (13.6) 底径 — 器高 —	体部は丸みを持って立ち上がり、 口縁部はやや外傾する。	外面—口縁部ヨコナデ、体部ヘラク ズリ。内面—口縁部～体部ナデ。	石英・白色粒・黒色粒 内外—ぶい い橙褐色	口縁部片。 外面、体部以 下を黒色処 理。
11	土師器 坏	口径 (12.2) 底径 — 器高 —	体部は丸みを持って立ち上がり、 口縁部はわずかに外傾する。	外面—口縁部ヨコナデ、体部ヘラク ズリ。内面—口縁部～体部ナデ。	石英・白色粒・黒色粒 内外—ぶい い橙褐色	口縁部片。
12	土師器 坏	口径 (13.2) 底径 — 器高 —	体部は丸みを持って立ち上がり、 口縁部は内彎気味に開く。	外面—口縁部ヨコナデ、体部ヘラク ズリ。内面—口縁部ヨコナデ、体部 ナデ。	石英・白色粒・黒色粒 内外—ぶい い橙褐色	口縁部片。
13	須恵器 蓋	口径 — 底径 — 器高 —	中央部が窪む円盤状の駒み。径は 大きめ。	外面—回転ナデ。内面—静止ナデ。	白色粒・黒色粒 内外—灰白色	駒み部径(7. 4)。
14	須恵器 甕	口径 (9.2) 底径 — 器高 —	口縁部は直線的に外傾する。	外面—回転ナデ。内面—回転ナデ。	白色粒・黒色粒 内外—灰白色	口縁部片。
15	須恵器 甕	口径 — 底径 — 器高 —	口縁部はわずかに外反して開く。	外面—回転ナデ、静止ナデ。内面—回 転ナデ。	石英・黒色粒 内外—灰白色	口縁部片。
16	須恵器 長頸甕	口径 — 底径 (13.2) 器高 —	頸部はわずかに丸みを持って内側 に屈曲する。底部は外方にふんば る高台が付く。	外面—頸部～胴部中位及び高台部回 転ナデ、胴部下位回転ヘラクスリ。 内面—回転ナデ。	石英・チャート 内外—灰褐色	頸部～高台部 片。
17	須恵器 長頸甕	口径 — 底径 (11.4) 器高 —	外方にふんばる高台。胴部は上方 に伸びる。	外面—回転ナデ。内面—回転ナデ。	石英・黒色粒 内外—灰褐色	高台部片。 内外—灰褐色
18	須恵器 甕	口径 (46.8) 底径 — 器高 —	口縁部は外反して開き、口唇部は 下方に延びる。	外面—口縁部ヨコナデで橋掛き波状 文と沈線、胴部平行タキ。内面—口 縁部ヨコナデ、胴部出貝痕・ナデ。	石英・白色粒・黒色粒 内外—黄灰色	口縁～胴部上 外片。

確認調査によってはじめて所在が判明した。南東側の一部を除く全体の約80%を検出した。表土が直接旧表土層を被覆する状態であり、墳丘盛土は完全に失われている。埋葬施設の痕跡は見られない。墳丘径15mの円墳である。

周堀の立ち上がりは、内側がほぼ整円を描くのに対し、外側はかなり乱れており、周堀幅は一定しない。西側には幅の狭くなる箇所がある一方、北西側と北東側には一段と幅を増す部分が存在する。また、南側は周堀幅が大きく広がっているようで、外側の立ち上がりは調査区外に及んでいる。

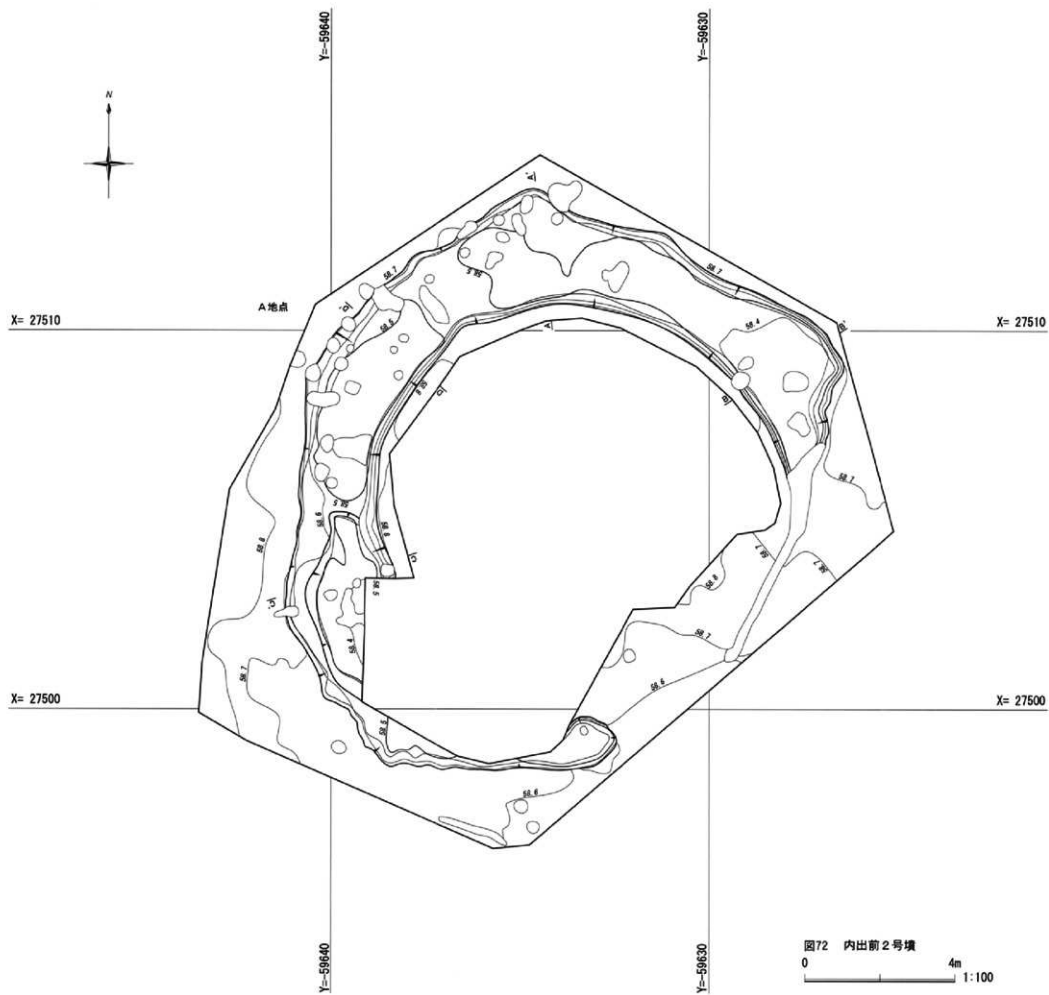


图72 内出前2号壕

0 4m  
1:100



確認面での周堀上幅は、墳丘北西側の広がった部分で3.6m、墳丘北側で2.6m、墳丘北側で2.8mを測る。周堀底面には著しい起伏があり、随所に土坑状の落ち込みが存在する。深さは最深部で80cmを超える。

周堀覆土は上・中位に堆積する白色パミスを含む灰褐色系の土層と、下位に堆積するロームブロックを含む黒・暗褐色系の土層とに大別される。As-B、Hr-FAの堆積は確認できない。

## (2) 遺物 (図71、写真48)

遺物は墳丘南側の周堀覆土を中心に土師器環、須恵器坏蓋・長頸壺・大甕などが出土している。

1の土師器環がほぼ完形である以外は細片が多い。埴輪は存在しない。

## (3) 小 結

伴出遺物は細片が主体で、年代の下る資料も多いことから築造時期の認定は難しい。6世紀代の土器を含まず、埴輪も全く出土していないことから、築造時期はおおよそ7世紀の内にあると考えられる。

# 13 内出前2号墳

## [A地点]

調査期間 平成11年7月15日～平成11年8月15日

調査面積 160m<sup>2</sup>

調査原因 区画整理に伴う宅地造成

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 増田一裕

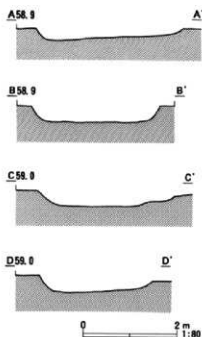


図73 内出前2号墳土層断面図

## (1) 遺 構

本庄市大字下野堂字内出前地内において、中心をX=27, 505、Y=-59,634付近におく。周囲にはやや距離をおいて南西側に内出前1号墳が存在する。調査着手の時点で墳丘盛土を完全に失っており、確認調査によってはじめて所在が判明した。構造物が存在した南側の一部を除き、ほぼ全掘している。表土が直接ローム層を被覆する状態であり、旧表土、墳丘盛土は完全に失われている。埋葬施設の痕跡は見られない。墳丘径11mの円墳である。

周堀の立ち上がりは、内側がほぼ整円を描くのに対し、外側はかなり乱れており、周堀幅は一定しない。墳丘南東側では、周堀が大きく途切れている。本来この部分にも浅い周堀が存在した可能性があるが、旧表土層まで削平されているため判然としない。西側には幅の狭くなる箇所が存在する。

確認面での周堀上幅は、墳丘北側で1.9～3.1m、墳丘西側で1.9mを測る。堀底にはおおむね平坦であるが、墳丘南西側には浅い土坑状の落ち込みが存在する。深さは周堀北半部で30cm前後、南西側の落ち込み部で40cmを測る。

## (2) 遺物

遺物は時期の不明確な少数の土師器小片のみであった。

## (3) 小結

伴出遺物がなため築造時期は確定できないが、周堀が不整形形状を呈し、埴輪が全く出土していないことから、7世紀代まで降下する可能性が考えられる。

# 14 永不1号墳

## [A地点]

調査期間	平成4年1月7日～平成4年1月6日
調査面積	870㎡
調査原因	区画整理に伴う宅地造成及び市道建設
調査担当	本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 長谷川勇・佐藤好司

## (1) 遺構

本庄市大字下野堂字永不地内にあって、中心をX=27,255、Y=-59,800付近におく。周囲にはやや距離をおいて北東側に永不2号墳が存在する。調査着手の時点で墳丘盛土を完全に失っており、確認調査によってはじめて所在が判明した。北西側周堀の一部を除きほぼ全面を検出した。旧表土、墳丘盛土は完全に失われている。埋葬施設の痕跡は見られない。墳丘の平面形は北東-南西方向に長い楕円形を呈し、長径15m、短径12mを測る。

周堀の立ち上がりは、外側がとくに乱れており、周堀幅は一定しない。墳丘南東側には、周堀の途切れている部分がある。墳丘西側にも著しく幅を減じている箇所が存在する。墳丘南東側の周堀端部は4.8×3.2mを測る北西-南東方向に長い平面楕円形の土坑状の落ち込みをもって終わっている。墳丘西側にも南北方向に長い同様の落ち込みが存在する。北西側の周堀は調査区外へ大きく張り出し、いったん幅を減じたのち、墳丘北側でふたたび大きく外方へ広がっている。確認面での周堀上幅は、墳丘南西側で3.6m、墳丘北側の広がった箇所では6.4mを測る。

周堀底面は墳丘東側の周堀端から北半部にかけては緩やかな起伏があり、南半部ではさらに凹凸が著しい。周堀南東側端部の土坑状の落ち込み以外にも、墳丘南側の周堀底面にも一段落ち込む箇所があり、墳丘西側の周堀が幅を減じる箇所では段をもっていったん浅くなり、さらにその北側の土坑状の落ち込みへ連続している。確認面からの深さは、南東側端部の落ち込みと墳丘南側の最深度で60cm、墳丘北側で40cmを測る。

周堀覆土は全体にロームブロックを含むほか、径20mmまでの小礫を含む層が目立つ。最上位の1層はAs-Bを多量に含んでいる。Hr-FAの堆積は確認できない。

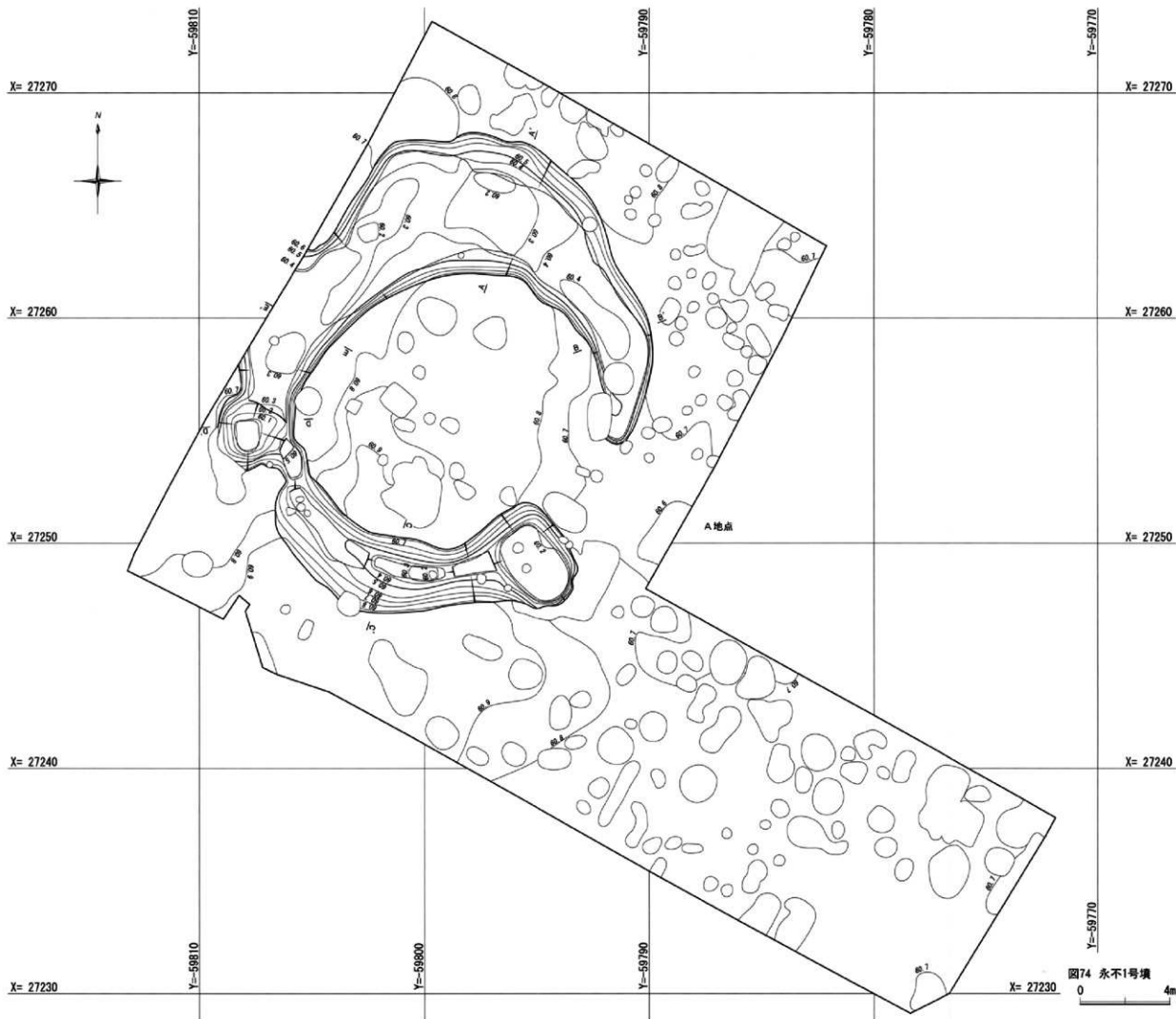
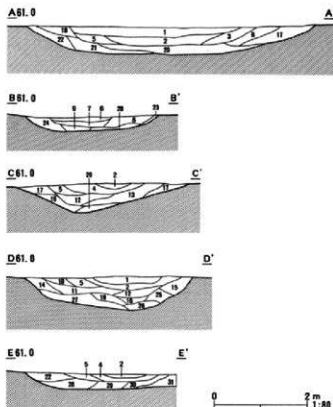


图74 永不1号坝

0 4m 1:160







#### 永不1号墳土層説明

- 1 黒灰褐色土 As-Bを多量に含む。
- 2 黒褐色土 ローム粒子を少量含む。
- 3 暗灰褐色土 ローム粒子、暗褐色土ブロックを多量に含む。
- 4 暗褐色土 ローム粒子を多量に含む、礫(径10~20mm)を少量含む。
- 5 暗灰褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 6 暗灰褐色土 ローム粒子、ロームブロックを多量に含む。
- 7 暗褐色土 ローム粒子を多量に含む。
- 8 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む、礫(径10mm土)を少量含む。
- 9 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 10 暗褐色土 ローム粒子を多量に含む、礫(径5mm土)を少量含む。

- 11 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む、礫(径5mm土)を少量含む。
- 12 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む、砂粒、礫(径5~15mm)を少量含む。
- 13 暗灰褐色土 暗褐色土ブロックを多量に含む、礫(径2~3mm)を少量含む。
- 14 暗灰褐色土 細砂粒、ローム粒子を多量に含む。
- 15 暗灰褐色土 ローム粒子、暗褐色土ブロックを多量に含む、3層に同じ。
- 16 暗褐色土 ローム粒子を多量に含む、砂粒、礫(径5mm土)を少量含む。
- 17 暗黄褐色土 風化ロームの堆積層。
- 18 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む、礫(径5mm土)を少量含む。
- 19 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む、砂粒、礫(径5~10mm)を少量含む。
- 20 暗褐色土 ローム粒子を多量に含む、砂粒、礫(径5~10mm)を少量含む。
- 21 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む、砂粒、礫(径5~10mm)を少量含む。19層に同じ。
- 22 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む、礫(径5~10mm)を少量含む。
- 23 暗黄褐色土 風化ロームの堆積層。17層に同じ。
- 24 暗褐色土 ローム粒子を多量に含む。
- 25 暗褐色土 暗褐色土ブロックを多量に含む、礫(径5mm土)を少量含む。
- 26 暗灰褐色土 細砂粒を多量に含む、ローム粒子、礫(径2~5mm土)を少量含む。
- 27 暗灰褐色土 ローム粒子、細砂粒を多量に含む。
- 28 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む、細砂粒、礫(径5mm土)を少量含む。
- 29 暗褐色土 ローム粒子を多量に含む、礫(径5~20mm)を少量含む。
- 30 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む、礫(径10mm土)を少量含む。8層に同じ。
- 31 暗褐色土 ローム粒子を多量に含む、砂粒、礫(径5mm土)を少量含む。16層に同じ。

図75 永不1号墳土層断面図

#### (2) 遺物 (図76、写真47)

遺物は周堀覆土から土師器環2点のほか土師器・須恵器の小片が若干出土している。埴輪は存在しない。

土師器環2点はほぼ完形の内屈口縁環で、このうち2は口径17.0cmを測る大型品である。ともに口縁部の屈曲が明瞭で、体部をヘラケズリし、口縁部にヨコナデを加える技法が共通する。

### (3) 小 結

出土した内屈口縁の土師器坏2点は7世紀後半の年代が与えられ、永不1号墳の築造もしくは追葬時期の一端を示すものであろう。埴輪を伴わない点を併せれば、永不1号墳の築造時期は7世紀のうちにあるものと推定できる。

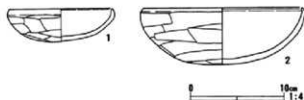


図76 永不1号墳出土土器実測図

### 永不1号墳出土土器観察表

番号	器 種	法量 (cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備 考
1	土師器 坏	口径 10.9 底径 — 器高 3.4	体部は丸みを持って立ち上がり、 口縁部は短く内彎する。底部は丸 底。	外面一口縁部ココナデ、体部～底部 ヘラクズリ。内面一口縁部ココナデ、 体部～底部ナデ。	石英・角閃石・白 色粒 内外一色	ほぼ完形。
2	土師器 坏	口径 17.0 底径 — 器高 6.0	体部は丸みを持って立ち上がり、 口縁部は短く内彎する。底部は丸 底。	外面一口縁部ココナデ、体部～底部 ヘラクズリ。内面一口縁部～体部コ コナデ、底部ナデ。	石英・角閃石・白 色粒 内外一色	ほぼ完形。

## 15 永不2号墳

### [A地点]

調査期間 平成3年8月1日～平成3年8月17日

調査面積 100㎡

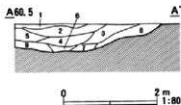
調査原因 区画整理に伴う宅地造成

調査担当 本庄市教育委員会社会教育課文化財保護係 長谷川勇・佐藤好司

### (1) 遺 構

本庄市大字下野堂字永不地内において、中心をX=27,313、Y=-59,738付近におく。周囲にはや距離をおいて北東側に堂場14号墳、南西側に永不1号墳が存在する。調査着手の時点で墳丘盛土を完全に失っており、確認調査によってはじめて所在が判明した。古墳の北東側にあたる周堀の一部を検出した。墳丘径6m程度のきわめて小型の円墳と推定される。調査範囲には墳丘部分がかからず、旧表土、埋葬施設の痕跡については不明である。

周堀は内外の立ち上がりともかなりの乱れを生じ整形を描かない。確認面での周堀上幅は3.0m以上を測る。堀底はおおむね平坦である。深さは50～60cm測る。



### 永不2号墳土層説明

- 1 黒褐色土 As-Bを多量に含む。
- 2 黒褐色土 ローム粒子を多量に含む。
- 3 暗黄褐色土 ローム粒子を多量に含む。
- 4 暗褐色土 ローム粒子を多量に含む。
- 5 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。墳丘の崩落土と思われる。
- 6 暗褐色土 ローム粒子を多量に霜降り状に含む。
- 7 黄褐色土 ローム粒子、ロームブロックを多量に含む。
- 8 黄褐色土 風化ローム層
- 9 暗褐色土 ローム粒子、黒色土ブロックを多量に含む。

図77 永不2号墳土層断面図

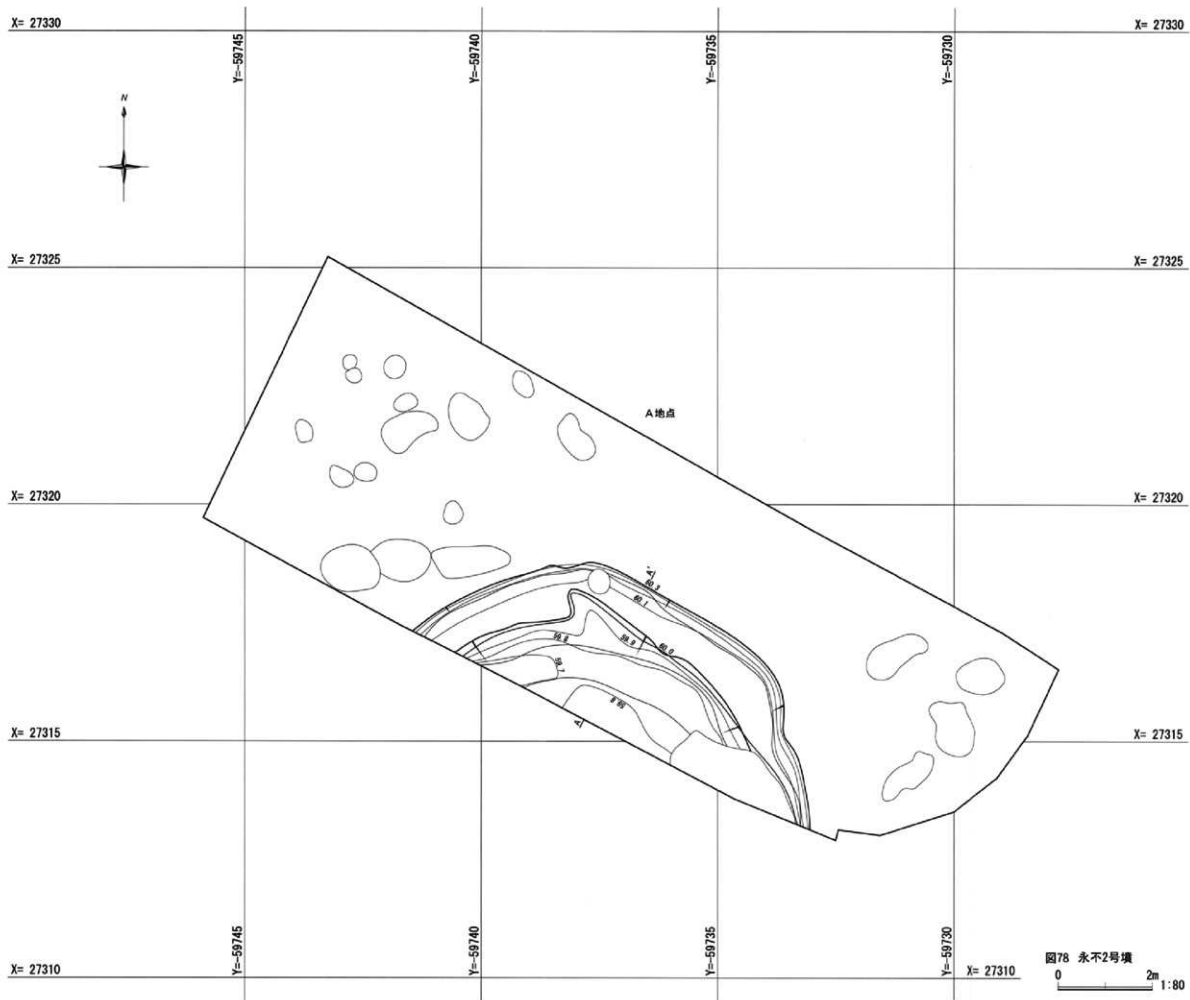
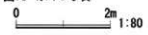


图76 永不2号堤





周堀覆土は全体にロームブロックを多量に含む土層が堆積し、上位に堆積する1層中にはAs-Bの混入を認める。Hr-FAの堆積は確認できない。

## (2) 遺物

遺物は時期の不明確な少数の土師器小片のみであった。

## (3) 小 結

伴出遺物がないため築造時期は確定できない。埴輪が全く出土していないが、5・6世紀代でも小規模墳の場合は埴輪の樹立されないことも多く、必ずしも7世紀代まで降下するとはいえない。築造時期は古墳時代後期から終末期までの幅のうちに考えられる。

## IV 結 語

本書に報告した上原原・堂場・内出前・永不地区に所在する古墳は、東西二群にわかれて分布する旭・小島古墳群の東群を形成するものである。旭・小島古墳群の東群には壘影山古墳、山の神古墳など現在でも比較的良好に墳丘を残すものが含まれ、また、これらに隣接する前の山古墳、小島御手長山古墳なども近年まで墳丘の一部が残存していた。これら上原原地区を中心に存在する古墳は、埋葬施設に横穴式石室を備え、墳丘に葺石を施し、埴輪を樹立する点が共通し、6世紀後葉段階に集中的に築造されたことがわかっている。この中で小島御手長山古墳、山の神古墳はとくに規模が大きく、西群を含め、この時期の旭・小島古墳群の中では中核的な位置を占める古墳と考えてよい。

7世紀に入ると、古墳の規模は縮小し、上原原地区の南側から堂場・内出前・永不地区にかけて数多くの小型円墳が造成されるようになる。これらの小型円墳は埴輪をもたず、不整形の周堀をめぐらす点が共通し、主に上原原地区から堂場地区にかけて集中的に分布している。7世紀に造営される古墳も埋葬施設にはひきつづき横穴式石室を採用しているが、ほぼすべての古墳が削平されているためこれらの石室構造はほとんど判明していない。ただ、この段階の石室の多くは前庭部を有していたと考えられ、石室羨門前面にあたる周堀内からは各種の土師器・須恵器が検出される場合がある。このような周堀内出土の土師器・須恵器のなかには7世紀後半から8世紀代にかけての資料も多く見られるが、当然のことながら、これらの土器の年代がただちに古墳の築造年代を示すものではなく、古墳の築造後の追葬や追加的祭祀に伴うものも含まれていると考えられる。

ところで、本報告には含まれないが、旭・小島古墳群東群には、上原原5号墳のように築造年代が5世紀後半にさかのぼる古墳も存在している。上原原5号墳は周堀覆土中にHr-FAの堆積を認め、外面2次調整にBc種ヨコハケ技法を用い、密窯により焼成するIV式の円筒埴輪を出土している。旭・小島古墳群東群は、遅くとも古墳時代中期後半段階には形成を開始していることがわかる。

ただし、東群では現状において、西群のような古墳時代前期段階の古墳を確認できていない。旭・小島古墳群の西群は、古墳時代前期の方墳を多数含み、さらに前期末から中期初頭には万年寺八幡山古墳などの大型円墳が出現してくるが、東群にはこれらの時期の古墳は見当たらず、古墳時代中期後半以降、西群と併存しつつ、古墳時代終末期へと連続しているようである。

ただ、東群も西群と同様に旧中山道以北にも分布域を広げているようで、台地の北縁を画する本庄段丘崖までの範囲に中期後半以前の古墳が存在している可能性は否定できない。現在のところ東群最古の上原原5号墳が、上原原地区の北端に位置し、旧中山道に接して存在していることや、西群においても、旧中山道以北に三笠山2号墳、北浦3号墳などの古式の円墳が分布することから見て、東群にも本庄段丘崖寄りの地点に中期以前の古墳が存在している可能性は残されている。

東・西群の各古墳の築造年代の確定と古墳時代前期から終末期にいたる旭・小島古墳群の形成過程の解明は今後に残された課題である。旭・小島古墳群はJR高崎線以南にも60m級の前方後円墳をさる下野堂二子山古墳を含む相当数の古墳が分布し、また隣接する上里町側にも浅間山古墳をはじめとする有力な古墳が所在している。不十分なながらも小島西区画整理事業地内に分布する古墳の解明が進みつつあるいま、周辺古墳を含めた古墳群全体の総合的理解へ向けての作業が求められている。

蚤影山古墳 円筒埴輪観察表

番号	法 量 (cm)					突帯	高さ	形数	透孔	径	口縁部調整	外面調整		内面調整		底部		焼成	色調	焼印	備考	
	口径	底径	器高	第1段	第2段							第3段	第4段	第5段	調整	ハツ本数 (/2cm)	基部					調整
1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ヨコナデ	1次タテハケ	10本	—	ナメハケ・ナメナデ	—	—	—	良好	褐色	—	断面骨針を含む。
2	—	—	—	—	—	—	2.2	0.7	—	—	—	1次タテハケ	8本	—	タテハケ・タテナデ	—	—	—	良好	明赤褐色	—	片岩を含む。
3	—	—	—	—	—	—	2.2	0.8	—	—	—	1次タテハケ	8本	—	タテナデ	—	—	—	良好	明赤褐色	—	片岩を含む。
4	—	—	—	—	—	—	1.9	0.8	円	—	—	1次タテハケ	12本	—	ナメハケ・タテナデ	—	—	—	良好	明赤褐色	—	片岩を含む。
5	—	—	—	—	—	—	2.3	0.7	—	—	—	1次タテハケ	10本	—	タテナデ	—	—	—	良好	明赤褐色	—	片岩を含む。
6	—	—	—	—	—	—	2.6	0.7	—	—	—	1次タテハケ	7本	—	ナメハケ	—	—	—	良好	明赤褐色	—	片岩を含む。
7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1次タテハケ	8本	—	タテナデ・ヨコナデ	—	—	—	良好	明赤褐色	—	片岩を含む。
8	—	—	—	—	—	—	2.4	0.9	—	—	—	1次タテハケ	10本	—	ナメハケ	—	—	—	良好	褐色	—	朝顔彩。角閃石安山岩粒を含む。
9	—	—	—	—	—	—	2.6	1.0	—	—	—	1次タテハケ	10本	—	ナメハケ・タテナデ	—	—	—	良好	褐色	—	朝顔彩。片岩を含む。

山の神古墳 円筒埴輪観察表

番号	法 量 (cm)					突帯	高さ	形数	透孔	径	口縁部調整	外面調整		内面調整		底部		焼成	色調	焼印	備考		
	口径	底径	器高	第1段	第2段							第3段	第4段	第5段	調整	ハツ本数 (/2cm)	基部					調整	基部
1	25.2	—	—	—	11.7	10.6	7.9	1.6	0.4	②PI ④PI (4.4×4.6) 5.2×(5.3)	ヨコナデ	1次タテハケ	9本	—	ナメハケ・タテナデ・指環圧痕	—	—	—	良好	褐色	60%	第3段外面に線刻。	
2	(25.2)	—	—	—	—	9.4	8.3	2.2	0.7	②— ④PI (4.2×5.1)	ヨコナデ	1次タテハケ	9本	—	ナメハケ・ナメナデ・タテナデ	—	—	—	良好	にぶい褐色	20%		
3	(29.0)	—	—	—	8.8	11.8	7.8	1.8	0.6	②— ④PI 5.6×5.2	ヨコナデ	1次タテハケ	10本	—	ナメハケ・タテナデ・指環圧痕	—	—	—	良好	明赤褐色	45%	第4段外面に線刻。	
4	25.0	—	—	—	9.8	10.3	7.9	1.5	0.3	②PI ④PI —×4.6 4.5×5.2	ヨコナデ	1次タテハケ	9本	—	ヨコハケ・タテナデ・指環圧痕	—	—	—	良好	褐色	45%	第4段外面に線刻。	
5	(22.0)	—	—	—	—	—	11.5	1.5	0.4	④PI	ヨコナデ	1次タテハケ	7本	—	ヨコハケ・ナメハケ	—	—	—	良好	にぶい褐色	15%	片岩を含む。	
6	(24.2)	—	—	—	—	—	7.3	1.3	0.4	④PI	—×5.2	—	1次タテハケ	8本	—	ナメハケ・タテナデ	—	—	—	良好	にぶい黄褐色	15%	第4段外面に線刻。片岩を含む。
7	(23.5)	—	—	—	—	—	8.2	1.3	0.7	④PI	—×6.0	ヨコナデ	1次タテハケ	7本	—	ヨコハケ・タテナデ	—	—	—	良好	明赤褐色	15%	第4段外面に線刻。
8	—	—	—	—	11.6	11.3	—	1.4	0.4	②— ④PI (4.5)×— (5.5×6.5)	—	1次タテハケ	7本	—	タテナデ	—	—	—	良好	褐色	20%	片岩を含む。	
9	—	—	—	—	12.5	12.0	—	1.5	0.6	④PI	(5.1×6.0)	—	1次タテハケ	10本	—	ナメハケ・タテナデ	—	—	—	良好	にぶい褐色	20%	



番号	法 量 (cm)					尖 帯		透 孔		口縁部調整		外 面 調 整		内 面 調 整		底 部		焼成	色 調	焼時	備 考			
	口徑	底径	器高	第1段	第2段	第3段	第4段	第5段	幅	高	形 態	径	調 整	ハブ本数 (1.2cm)	基 部	調 整	基 部					巻 き	圧 痕	
10	—	—	—	—	—	8.6	9.4	—	1.5	0.7	②円 ④円 (4.0×5.4)	—	1次タテハケ	8本	—	ナナメハケ・タテ ナデ	—	—	—	良好	褐色	25%		
11	—	—	—	—	—	12.6	—	—	1.4	0.3	②— ④円 (5.2×5.2)	—	1次タテハケ	8本	—	ナナメハケ・タテ ナデ・指頭圧痕	—	—	—	良好	にぶい褐色	30%	片岩を含む。	
12	—	—	—	—	—	—	—	—	1.7	0.5	(円)	—	1次タテハケ	7本	—	タテナデ・ナナメ ナデ	—	—	—	良好	にぶい褐色	5%	片岩を含む。	
13	—	—	—	—	—	—	—	—	1.6	0.6	(円)	—	1次タテハケ	8本	—	タテナデ	—	—	—	良好	明赤褐色	10%	角閃石安山岩粒を含む。	
14	—	18.3	—	19.5	10.5	—	—	—	1.8	0.6	②円	4.6×5.5	—	1次タテハケ	9本	—	ココナデ・タテナ デ	—	—	棒状	良好	にぶい褐色	45%	片岩を含む。
15	—	(16.3)	—	11.8	8.5	—	—	—	2.0	0.5	②半円	4.8×6.3	—	1次タテハケ	11本	—	タテナデ・ナナメ ナデ・指頭圧痕	—	右	棒状	良好	明赤褐色	30%	片岩を含む。
16	—	14.5	—	16.7	—	—	—	—	1.3	0.7	—	—	—	1次タテハケ	8本	板押圧	タテナデ・ヨコナ デ	ヨコケ ズリ	—	棒状	良好	にぶい褐色	25%	
17	—	(16.7)	—	12.3	—	—	—	—	1.7	0.6	—	—	—	1次タテハケ	7本	—	タテナデ	木目圧 痕	—	木目状	良好	明赤褐色	15%	片岩を含む。
18	—	(16.4)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1次タテハケ	8本	—	タテナデ・ヨコナ デ	—	—	—	良好	にぶい褐色	15%	
19	(24.8)	—	—	—	—	—	—	9.8	1.7	0.5	—	—	—	1次ナナメハ ケ・ナデ	15本	—	ヨコナデ・タテナ デ	—	—	—	良好	褐色	10%	第5段内面に線刻。
20	(32.8)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ヨコナデ	1次タテハケ	7本	—	ヨコハケ・ナナメ ハケ	—	—	—	良好	明赤褐色	5%		
21	—	—	—	—	—	—	—	7.8	2.1	0.6	—	—	ヨコナデ	1次タテハケ	8本	—	ヨコハケ・ナナメ ハケ・タテナデ	—	—	—	良好	にぶい褐色	5%	
22	—	—	—	—	—	—	—	7.8	1.3	0.5	—	—	ヨコナデ	1次タテハケ	8本	—	ヨコハケ・ナナメ ハケ・タテナデ	—	—	—	良好	にぶい黄褐色	5%	
23	—	—	—	—	—	—	—	9.4	1.8	0.4	—	—	1次タテハ ケ・ナデ	11本	—	ココナデ・ナナメ ナデ	—	—	—	良好	にぶい褐色	5%		
24	—	—	—	—	—	—	—	7.9	1.5	0.7	—	—	ヨコナデ	1次タテハケ	9本	—	ヨコハケ・ナナメ ハケ・ナデ	—	—	—	良好	褐色	5%	角閃石安山岩粒を含む。
25	—	—	—	—	—	—	—	7.2	1.7	0.6	④円	—	ヨコナデ	1次タテハケ	9本	—	ナナメハケ・タテ ハケ・ナデ	—	—	—	良好	にぶい褐色	5%	角閃石安山岩粒を含む。
26	—	—	—	—	—	—	—	8.2	1.6	0.5	—	—	ヨコナデ	1次タテハケ	9本	—	ヨコハケ・タテナ デ	—	—	—	良好	にぶい褐色	5%	角閃石安山岩粒を含む。
27	—	—	—	—	—	—	—	10.1	1.4	0.6	—	—	1次タテハケ	7本	—	ヨコハケ・ナナメ ハケ・タテナデ	—	—	—	良好	褐色	5%		
28	—	—	—	—	—	—	—	8.3	1.5	0.4	—	—	ヨコナデ	1次タテハケ	9本	—	ヨコハケ・ナデ・ 指頭圧痕	—	—	—	良好	褐色	5%	
29	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ヨコナデ	1次タテハケ	7本	—	ヨコハケ・ナナメ ハケ・ナナメナデ	—	—	—	良好	明赤褐色	5%	内面整形粗雑。 片岩を含む。
30	—	—	—	—	—	7.4	(10.1)	—	1.4	0.6	②円	—	1次タテハケ	8本	—	ナナメハケ・タテ ナデ	—	—	—	良好	にぶい黄褐色	10%	片岩を含む。	

番号	法 量 (cm)						尖 帯	透 孔	口縁部 調 整	外 面 調 整			内 面 調 整			底 部		構成	色 調	乾分	備 考		
	口徑	底徑	器高	第1段	第2段	第3段				第4段	第5段	幅	高さ	形 態	径	調 整	ハケ本数 (1/2cm)					基部	調 整
31	—	—	—	—	—	10.1	—	1.8	0.5	④円	5.1×—	—	1次タテハケ	10本	—	ナナメハケ・タテハケ・タテナデ	—	—	—	良好	にぶい褐色	5%	
32	—	—	—	—	—	—	—	1.7	0.7	—	—	—	1次タテハケ	7本	—	タテナデ	—	—	—	良好	にぶい褐色	10%	角閃石安山岩粒を含む。
33	—	—	—	—	—	—	—	1.2	0.5	(円)	—	—	1次タテハケ	9本	—	ナナメハケ・タテナデ	—	—	—	良好	にぶい黄褐色	5%	片岩を含む。
34	—	—	—	—	—	—	—	1.3	0.3	②円	—	—	1次タテハケ	9本	—	タテハケ・タテナデ	—	—	—	良好	褐色	10%	
35	—	—	—	—	—	—	—	1.4	0.8	—	—	—	1次タテハケ	8本	—	ナナメハケ・タテナデ	—	—	—	良好	褐色	10%	角閃石安山岩粒を含む。
36	—	—	—	—	—	—	—	1.6	0.6	—	—	—	1次タテハケ	8本	—	ナナメナデ・タテナデ・指環圧痕	—	—	—	良好	明赤褐色	5%	角閃石安山岩粒を含む。
37	—	—	—	—	—	—	—	1.4	0.6	(円)	—	—	1次タテハケ	7本	—	タテナデ	—	—	—	良好	にぶい褐色	5%	
38	—	—	—	—	—	—	—	1.5	0.7	(円)	—	—	1次タテハケ	8本	—	タテナデ	—	—	—	良好	にぶい褐色	5%	角閃石安山岩粒を含む。
39	—	—	—	—	—	—	—	1.3	0.4	円	—×4.2	—	1次タテハケ	9本	—	タテナデ・指環圧痕	—	—	—	良好	褐色	5%	
40	—	—	—	—	—	—	—	2.3	1.0	(円)	—	—	1次タテハケ	7本	—	タテナデ・ナナメナデ	—	—	—	良好	明赤褐色	5%	内面整形粗雑。 片岩を含む。
41	—	—	—	—	—	—	—	1.1	0.4	(円)	—	—	1次タテハケ	11本	—	タテナデ	—	—	—	良好	褐色	5%	角閃石安山岩粒を含む。
42	—	—	—	—	—	—	—	1.5	0.5	(円)	—	—	1次タテハケ	10本	—	タテナデ	—	—	—	良好	にぶい褐色	5%	角閃石安山岩粒を含む。
43	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(円)	—	—	1次タテハケ	12本	—	ナナメハケ	—	—	—	良好	褐色	5%	角閃石安山岩粒を含む。
44	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(円)	—	—	1次タテハケ	9本	—	タテナデ	—	—	—	良好	褐色	5%	角閃石安山岩粒を含む。
45	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1次タテハケ	8本	—	ナナメハケ・タテナデ	—	—	—	良好	にぶい褐色	5%	外面に線刻。
46	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1次タテハケ	11本	—	—	—	—	棒状	良好	にぶい褐色	5%	下に構成前小孔2あり。 内面大半は剥落。
47	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1次タテハケ	12本	—	タテナデ	ヨコズリ	—	木目状	良好	にぶい褐色	5%	片岩を含む。
48	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1次タテハケ	9本	—	タテナデ・ヨコナデ	—	—	—	良好	にぶい褐色	5%	角閃石安山岩粒を含む。
49	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1次タテハケ	8本	—	ナナメハケ	—	—	—	良好	にぶい褐色	5%	構成前の小孔あり。 角閃石安山岩粒を含む。
50	(41.6)	—	—	最上段(第6段): 15.3			—	2.7	0.9	—	—	ヨコナデ	1次タテハケ	8本	—	ヨコハケ・ナナメハケ	—	—	—	良好	褐色	15%	糊状。 角閃石安山岩粒を含む。

番号	法 量 (cm)					突帯 幅 高さ	透孔 形態 径	口縁部 調整	外面調整		内面調整		底 部		焼成	色 調	残存	備 考						
	口径	底径	器高	第1段	第2段				第3段	第4段	第5段	調整	ハブ本数 ( $\varnothing$ 2cm)	基部					調整	基部	巻き	圧痕		
51	(41.6)	—	—	最上段(第6段):14.8			1.7	0.7	—	—	ヨコナデ	1次タテハケ	8本	—	ヨコハケ・ナナメハケ	—	—	—	良好	にぶい褐色	15%	朝顔形。 内四石安山岩粒を含む。		
52	—	—	—	—			2.2	0.7	—	—	—	1次タテハケ	8本	—	ナナメハケ・タテハケ・ナナメナデ	—	—	—	—	—	良好	褐色	10%	朝顔形。 内四石安山岩粒を含む。
53	—	—	—	—			2.0	0.6	—	—	—	1次タテハケ	10本	—	ヨコハケ・タテナデ・指頭圧痕	—	—	—	—	—	良好	褐色	10%	朝顔形。 内四石安山岩粒を含む。
54	—	—	—	(第5段):9.5			2.8	0.8	—	—	—	1次タテハケ・ナナメハケ	8本	—	ナナメハケ・ナナメナデ・指頭圧痕	—	—	—	—	—	良好	明赤褐色	25%	朝顔形。 片岩を含む。
55	—	—	—	(第4段):11.7			1.7	0.5	円	—	(6.0)	1次タテハケ	9本	—	ナナメハケ・ナナメナデ	—	—	—	—	—	良好	褐色	15%	朝顔形。 片岩を含む。
56	—	—	—	—			1.8	0.9	—	—	—	1次タテハケ	8本	—	ナナメハケ・ナナメナデ	—	—	—	—	—	良好	褐色	5%	朝顔形。 内四石安山岩粒を含む。
57	—	—	—	—			2.2	0.5	—	—	—	1次タテハケ	7本	—	ナナメハケ・ナデ	—	—	—	—	—	良好	褐色	5%	朝顔形。 内四石安山岩粒を含む。
58	—	—	—	—			1.7	0.8	—	—	—	1次タテハケ	8本	—	ナナメハケ・ナデ	—	—	—	—	—	良好	褐色	5%	朝顔形。 内四石安山岩粒を含む。剥離部多い。
59	—	—	—	—			2.2	0.7	—	—	—	1次タテハケ	8本	—	ナナメハケ・ナデ	—	—	—	—	—	良好	褐色	5%	朝顔形。 外面に縁刻。
60	—	—	—	—			1.7	0.7	円	—	—	1次タテハケ	8本	—	タテナデ・ナナメナデ	—	—	—	—	—	良好	褐色	5%	(朝顔形)。 内四石安山岩粒を含む。

御手長山古墳 円筒埴輪観察表

番号	法 量 (cm)					突帯 幅 高さ	透孔 形態 径	口縁部 調整	外面調整		内面調整		底 部		焼成	色 調	残存	備 考							
	口径	底径	器高	第1段	第2段				第3段	第4段	調整	ハブ本数 ( $\varnothing$ 2cm)	基部	調整					基部	巻き	圧痕				
1	(22.4)	—	—	—	12.5	9.3	6.9	1.6	0.7	㊦円 ㊧円	—	4.8×(5.0)	ヨコナデ	1次タテハケ	5本	—	タテハケ・ナナメハケ	—	—	—	良好	明赤褐色	30%	片岩を含む。	
2	22.5	—	—	—	9.6	8.0	7.9	2.0	0.7	㊦円 ㊧円	—	(6.1)×5.3 5.1×(5.3)	—	1次タテハケ	9本	—	ナナメハケ	—	—	—	良好	にぶい褐色	40%	片岩を含む。	
3	(24.2)	—	—	第4段:8.6 第5段:6.6			1.5	0.5	㊦- ㊧円	—	(4.6)×4.5	ヨコナデ	1次タテハケ	6本	—	ナナメハケ・タテハケ	—	—	—	—	良好	にぶい赤褐色	20%	外面(第4段)に縁刻。 片岩を含む。	
4	(33.4)	—	—	—	—	—	8.7	2.1	0.6	㊦円	—	—×(5.7)	—	1次タテハケ	9本	—	ヨコハケ・ナナメハケ	—	—	—	良好	黄褐色	10%	片岩を含む。	
5	(22.7)	—	—	—	—	—	5.9	2.0	0.6	㊦円	—	—×(5.6)	ヨコナデ	1次タテハケ	8本	—	ナナメハケ	—	—	—	良好	褐色	10%	内四石安山岩粒を含む。	
6	—	—	—	—	—	—	(14.5)	—	1.9	0.5	㊦円 ㊧円	—	6.8×(6.4)	—	1次タテハケ	10本	—	ナナメナデ・ナナメハケ	—	—	—	良好	褐色	30%	片岩を含む。
7	—	—	—	—	—	—	10.8	—	1.7	0.5	㊦円 ㊧-	—	(6.5×6.6)	—	1次タテハケ	7本	—	ナナメハケ・タテナデ	—	—	—	良好	明赤褐色	20%	片岩を含む。
8	—	—	—	—	—	—	9.0	—	1.6	0.6	㊦円 ㊧円	—	—	—	1次タテハケ	11本	—	タテナデ	—	—	—	良好	にぶい橙	10%	内四石安山岩粒を含む。

番号	量 (cm)							突部		透孔		口縁部	外面調整			内面調整			証部		焼成	色調	良率	備考	
	口径	底径	器高	第1段	第2段	第3段	第4段	幅	高さ	形態	径	調整	調整	ハツ本数 (/2cm)	基部	調整	基部	巻き	圧痕						
9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	(円)	×(7.0)	—	1次タテハケ	9本	—	ナナメナデ	—	—	—	—	—	良好	黄灰～橙色	10%	片岩を含む。
10	—	—	—	—	—	—	—	1.6	0.5	④ ③円	—	—	1次タテハケ	9本	—	タテハケ	—	—	—	—	良好	にぶい赤褐色	10%	片岩を含む。	
11	—	—	—	—	—	—	—	1.8	0.5	—	—	—	1次タテハケ	6本	—	タテハケ・タテナデ	—	—	—	良好	にぶい褐色	5%	片岩を含む。		
12	—	(14.8)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1次タテハケ	6本	板押圧	タテハケ・タテナデ	—	—	—	良好	橙色	10%	片岩を含む。		
13	—	12.3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1次タテハケ	10本	板押圧	タテハケ・タテナデ・指頭圧痕	—	右	—	良好	明赤褐色	15%	チャート・片岩を含む。		
14	—	(21.4)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1次タテハケ	8～10本	—	ナナメハケ・タテナデ・ナナメナデ	—	—	棒状	良好	にぶい褐色	10%	砂礫・チャート、微量の片岩を含む。		
15	—	—	—	—	—	—	8.2	1.8	0.5	—	—	—	1次タテハケ	10本	—	ナナメハケ	—	—	—	良好	明赤褐色	5%	片岩を含む。		
16	—	—	—	—	—	—	6.3	1.8	0.7	③円	—	—	1次タテハケ	9本	—	ナナメハケ	—	—	—	良好	明赤褐色	5%	片岩を含む。		
17	—	—	—	—	—	—	7.2	1.6	0.7	—	—	ヨコナデ	1次タテハケ	8本	—	ナナメハケ	—	—	—	良好	橙色	5%	角閃石安山岩粒を含む。摩滅が著しい。		
18	(20.5)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ヨコナデ	1次タテハケ	5本	—	タテハケ・タテナデ	—	—	—	良好	明赤褐色	5%	片岩を含む。		
19	(23.4)	—	—	—	—	—	6.2	—	0.5	—	—	ヨコナデ	1次タテハケ	7本	—	ナナメハケ・タテハケ	—	—	—	良好	橙色	5%	片岩を含む。		
20	(24.5)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ヨコナデ	1次タテハケ	6本	—	ヨコハケ・ナナメハケ	—	—	—	良好	橙色	5%	片岩を含む。砂礫を多く含む。		
21	(21.9)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ヨコナデ	1次タテハケ	5本	—	ナナメハケ	—	—	—	良好	明赤褐色	5%	片岩を含む。		
22	—	—	—	—	—	—	6.3	1.9	0.5	—	—	—	1次タテハケ	6本	—	ナナメハケ・タテハケ	—	—	—	良好	橙色	5%	片岩を含む。		
23	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ヨコナデ	1次タテハケ	6～9本	—	ナナメハケ	—	—	—	良好	橙色	破片	砂礫・チャート、微量の片岩を含む。		
24	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ヨコナデ	1次タテハケ	10本	—	ナナメハケ	—	—	—	良好	明赤褐色	5%	片岩を含む。		
25	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ヨコナデ	1次タテハケ	9本	—	ナナメハケ	—	—	—	良好	明赤褐色	5%	片岩を含む。		
26	—	—	—	—	—	—	2.5	0.9	—	—	—	—	1次タテハケ	5本	—	ナナメハケ・指頭圧痕	—	—	—	良好	にぶい橙	5%	片岩を含む。		
27	—	—	—	—	—	—	2.5	0.5	(円)	—	—	—	1次タテハケ	7本	—	タテハケ	—	—	—	良好	明赤褐色	5%	片岩を含む。黒色物付着。		
28	—	—	—	—	—	—	2.3	0.9	(円)	—	—	—	1次タテハケ	7本	—	タテナデ	—	—	—	良好	橙色	破片	チャート、微量の片岩を含む。		
29	—	—	—	—	—	—	2.5	0.8	(円)	—	—	—	1次タテハケ	10本	—	ナナメハケ・タテナデ	—	—	—	良好	にぶい褐色	破片	砂礫・チャート、微量の片岩を含む。		

番号	法 規 (cm)								突 帯 幅 高さ	透 孔 形 態 径	口 縁 部 調 整	外 面 調 整			内 面 調 整			底 部		焼 成 色 調	特 徴	備 考
	口径	底径	器高	第1段	第2段	第3段	第4段	調 整				ハア本数 (/2cm)	基 部	調 整	基 部	巻 き	正 規	焼 成				
																			調 整			
30	—	—	—	—	—	—	—	2.8 0.6	(円)	—	—	1次タテハケ	7本	—	ナナメハケ・タテナデ	—	—	—	良好	棕色	破片	砂礫・チャート、微量の片岩を含む。
31	—	—	—	—	—	—	—	2.5 0.7	(円)	—	—	1次タテハケ	7本	—	タテナデ	—	—	—	良好	棕色	破片	砂礫・チャート、微量の片岩を含む。
32	—	—	—	—	—	—	—	2.3 0.7	(円)	—	—	1次タテハケ	7本	—	ナナメナデ	—	—	—	良好	棕色	破片	チャート、微量の片岩を含む。
33	—	—	—	—	—	—	—	1.7 0.5	—	—	—	1次タテハケ	7本	—	ナナメハケ・タテハケ	—	—	—	良好	にぶい赤褐色	5%	片岩を含む。黒色物付着。
34	—	—	—	—	—	—	—	2.7 0.8	(円)	—	—	1次タテハケ	6本	—	ナナメハケ・タテナデ	—	—	—	良好	にぶい黄褐色	破片	砂礫・チャート、微量の片岩を含む。
35	—	—	—	—	—	—	—	2.1 0.5	—	—	—	1次タテハケ	7本	—	タテハケ・ナナメナデ	—	—	—	良好	明赤褐色	5%	片岩を含む。
36	—	—	—	—	—	—	—	2.2 0.7	円	—	—	1次タテハケ	9本	—	ナナメハケ・指環圧痕	—	—	—	良好	にぶい棕色	5%	片岩を含む。
37	—	—	—	—	—	—	—	1.3 0.4	—	—	—	1次タテハケ	5本	—	タテハケ	—	—	—	良好	棕色	5%	片岩を含む。
38	—	—	—	—	—	—	—	1.8 0.6	②-③円	—	—	1次タテハケ	6本	—	タテハケ	—	—	—	良好	明赤褐色	5%	片岩を含む。
39	—	—	—	—	—	—	—	1.6 0.5	円	—	—	1次タテハケ	6本	—	ナナメハケ・タテハケ	—	—	—	良好	明赤褐色	5%	片岩を含む。黒色物付着。
40	—	—	—	—	—	—	—	1.7 0.5	(円)	—	—	1次タテハケ	7本	—	ナナメハケ	—	—	—	良好	明赤褐色	5%	片岩を含む。
41	—	—	—	—	—	—	—	1.9 0.6	—	—	—	1次タテハケ	6本	—	ナナメハケ・ナデ	—	—	—	良好	明黄褐色	5%	片岩を含む。
42	—	—	—	—	—	—	—	2.1 0.8	—	—	—	1次タテハケ	6本	—	タテナデ	—	—	—	良好	棕色	5%	片岩を含む。
43	—	—	—	—	—	—	—	1.6 0.4	円	—	—	1次タテハケ	6本	—	タテハケ	—	—	—	良好	明赤褐色	5%	片岩を含む。黒色物付着。
44	—	—	—	—	—	—	—	2.0 0.8	—	—	—	1次タテハケ	9本	—	タテハケ・指環圧痕	—	—	—	良好	明赤褐色	5%	片岩を含む。
45	—	—	—	—	—	—	—	1.8 0.6	—	—	—	1次タテハケ	9本	—	タテハケ	—	—	—	良好	明褐色	5%	片岩を含む。
46	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1次タテハケ	8本	—	タテハケ	—	—	—	良好	棕色	5%	外面に鉄屑、内面石炭山岩粉を含む。
47	—	—	—	—	—	—	—	1.9 0.7	—	—	—	1次タテハケ	10本	—	タテハケ・タテナデ	—	—	—	良好	明褐色	5%	片岩を含む。
48	—	—	—	—	—	—	—	2.4 0.7	—	—	—	1次タテハケ	7本	—	ナナメナデ	—	—	—	良好	明黄褐色	5%	片岩を含む。
49	—	—	—	—	—	—	—	2.4 0.7	—	—	—	1次タテハケ	6本	—	ナナメハケ	—	—	—	良好	にぶい黄褐色	5%	砂礫を多く含む。

番号	法 量 (cm)							突 帯		透 孔		口縁部 調整	外 面 調 整			内 面 調 整		底 部		焼成 色 調	用率	備 考	
	口径	底径	器高	第1段	第2段	第3段	第4段	幅	高さ	形数	径		調整	調整	ハク本数 (1/2cm)	基部	調整	基部	巻き				圧痕
50	—	—	—	—	—	—	—	2.9	0.8	②— ③—	—	—	1次タテハケ	7本	—	タテハケ・タテナ ダ	—	—	—	良好	明赤褐色	5%	片岩を含む。
51	—	—	—	—	—	—	—	2.3	0.9	—	—	—	1次タテハケ	8本	—	タテハケ・タテナ ダ	—	—	—	良好	明赤褐色	5%	片岩を含む。
52	—	—	—	—	—	—	—	2.3	0.8	—	—	—	1次タテハケ	10本	—	ナナメハケ・タテ ナダ	—	—	—	良好	にぶい褐色	5%	片岩を含む。
53	—	—	—	—	—	—	—	1.7	0.6	—	—	—	1次タテハケ	6本	—	タテナダ	—	—	—	良好	明赤褐色	5%	片岩を含む。
54	—	—	—	—	—	—	—	2.5	0.8	—	—	—	1次タテハケ	10本	—	タテハケ・タテナ ダ	—	—	—	良好	明赤褐色	5%	片岩を含む。
55	—	—	—	—	—	—	—	1.5	0.8	—	—	—	1次タテハケ	6本	—	ナナメハケ・ナダ	—	—	—	良好	にぶい褐色	5%	
56	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1次タテハケ	7本	—	ナナメハケ・ナ メナダ	ココハ ケ	—	—	良好	褐色	5%	片岩を含む。
57	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1次タテハケ	6本	板押正	タテハケ・タテナ ダ	—	—	—	良好	にぶい褐色	5%	片岩を含む。
58	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1次タテハケ	10本	—	タテハケ・ナダ	—	—	棒状	良好	にぶい黄褐色	5%	角閃石安山岩粒を含む。
59	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1次タテハケ	9本	—	ナナメハケ・タテ ナダ	—	—	—	良好	灰オリーブ 〜にぶい褐色	5%	還元気味の焼成。
60	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1次タテハケ	10本	—	タテハケ・ナダ	—	—	棒状	良好	褐色	5%	角閃石安山岩粒を含む。
61	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1次タテハケ	5本	板押正	タテハケ・タテナ ダ	—	—	—	良好	褐色	5%	片岩を含む。
62	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1次タテハケ	5本	板押正	タテハケ・タテナ ダ	ココハ ケ	—	—	良好	褐色	5%	片岩を含む。
63	—	—	—	①-②	③	④①1.1⑤4.3⑥-	—	1.8	0.8	門	(6.0×5.3)	—	1次タテハケ	7本	—	ナナメハケ・タテ ナダ・ナナメナダ	—	—	—	良好	褐色	30%	片岩を含む。砂礫を多く含む。
64	—	—	—	—	—	—	—	2.1	0.7	—	—	—	1次タテハケ	6本	—	ナナメハケ・タテ ナダ・ナナメナダ	—	—	—	良好	褐色	5%	砂礫・チャート、微量の片岩を含む。

## 【引用・参考文献】

- 広瀬和雄 1992 「前方後円墳の畿内編年」「前方後円墳集成畿内編」 山川出版社 東京 pp.24-26.
- 橋本博文・佐々木幹雄ほか 1980 「有勝寺北裏遺跡」 有勝寺北裏遺跡調査会 東京.
- 恋河内昭彦 1996 「第V章まとめ」「辻堂遺跡Ⅰ—県営水田農業確立排水対策特別事業（やばり川地区）に伴う辻堂遺跡B地点発掘調査報告書Ⅰ」 児玉町文化財調査報告書第19集 児玉町教育委員会児玉郡児玉町 pp.63-90.
- 松本 完 2002 「大久保山遺跡浅見山Ⅰ地区（第2次）・北郷前山古墳群（第2・3次）発掘調査報告書—新幹線本庄新駅（仮称）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査Ⅰ—」 本庄市遺跡調査会報告第6集 本庄市遺跡調査会 本庄.
- 美里町 1986 「第二章第四節 古墳時代」「美里町史」 通史編 児玉郡美里町 pp.135-191.
- 中村倉司 1999 「埼玉県における5世紀代の土器—和泉式土器の行方—」 『東国土器研究』 第5号 東国土器研究会 藤沢 pp.91-118.
- 並木 隆 1976 「7 本庄市旭古墳群の調査」「第9回遺跡発掘報告会発表要旨」 埼玉考古学会・埼玉県遺跡調査会・埼玉県教育委員会 浦和 pp.8-9.
- 南毛古墳文化研究会 2001 「本庄市域における古式古墳調査の成果と課題」 第5回群馬県古墳時代研究会・南毛古墳文化研究会合同検討会資料 本庄.
- 太田博之 1991 「本庄遺跡群発掘調査報告書Ⅴ—公卿塚古墳—」 本庄市埋蔵文化財調査報告第19集 本庄市教育委員会 本庄.
- 太田博之 2001 「旭・小島古墳群—前の山古墳—」 本庄市埋蔵文化財調査報告第23集 本庄市教育委員会 本庄.
- 太田博之 2004 「旭・小島古墳群—上前原1～3・5～11号墳—」 本庄市埋蔵文化財調査報告第27集 本庄市教育委員会 本庄.
- 埼玉県 1982 「下野堂（しものどう）古墳群」「新編埼玉県史」 資料編2 原始・古代 弥生・古墳 浦和 pp.674-677.
- 坂本和俊 1985 「埼玉県における円筒埴輪編年の諸問題」「埴輪の変遷—その普遍性と地域性—」 北武蔵古代文化研究会 pp.63-69.
- 1986 「埼玉における前期古墳の形成」「埼玉県古式古墳調査報告書」 埼玉県史編さん室 浦和 pp.204-207.
- 埼玉県教育委員会 1994 「埼玉県古墳詳細分布調査報告書」 浦和.
- 菅谷浩之 1976 a 「下野堂遺跡」「本庄市史」 資料編 考古資料 本庄市 本庄 pp.59-62.
- 1976 b 「有勝寺北裏埴輪窯跡」「本庄市史」 資料編 考古資料 本庄市 本庄 pp.100-103.
- 1976 c 「赤坂埴輪窯跡」「本庄市史」 資料編 考古資料 本庄市 本庄 p.103.
- 1984 「北武蔵における古式古墳の成立—児玉地方からみた北武蔵の古式古墳—」 児玉町史資料調査報告 古代第1集 児玉町教育委員会・児玉町史編纂委員会 児玉郡児玉町.
- 山川守男・盛敬彰・金子彰男・中村正明・橋本雅夫・松本和弘 1981 「新発見の埴輪窯跡群」「いぶき」 12号 埼玉県立本庄高等学校考古学部 本庄 pp.29-40.
- 早稲田大学有勝寺北裏遺跡調査会 1979 「埼玉県本庄市前山有勝寺北裏遺跡発掘調査概要」 東京.

# 写 真





写真1



上前原13号墳B地点  
調査区全景【北西から】



上前原13号墳B地点  
周堀検出状況【南西から】



上前原13号墳B地点  
周堀検出状況【南東から】

写真2



上前原14号墳A地点  
周堀検出状況【北西から】



上前原14号墳B地点  
周堀検出状況【北東から】



上前原15号墳B地点  
周堀検出状況【南西から】



上前原15号墳A地点・16号墳B地点  
周堀検出状況【南西から】



上前原16号墳A地点  
周堀検出状況【北西から】



上前原16号墳A地点  
周堀検出状況【南東から】

#### 写真4



蚕影山古墳B地点  
調査区全景【北西から】



蚕影山古墳B地点  
周堀検出状況【西から】



蚕影山古墳B地点  
周堀検出状況【南西から】



蚤影山古墳B地点  
周堀検出状況【南から】



蚤影山古墳B地点  
周堀検出状況【南東から】



蚤影山古墳B地点  
周堀検出状況【南東から】

写真6



蚤影山古墳B地点  
冨堀および葺石検出状況【北から】



蚤影山古墳B地点  
葺石検出状況【北から】



蚤影山古墳B地点  
葺石検出状況【北西から】



蟹影山古墳B地点  
墓石検出状況【北西から】



蟹影山古墳B地点  
墓石検出状況【北から】



蟹影山古墳B地点  
墓石検出状況【南西から】



写真8



山の神古墳A地点  
調査区全景〔北から〕



山の神古墳A地点  
周堀検出状況〔南東から〕



山の神古墳A地点  
周堀検出状況〔南から〕



山の神古墳B地点  
調査区全景【南東から】



山の神古墳B地点  
周辺検出状況【南から】



山の神古墳B地点  
周辺検出状況【南西から】

写真10



山の神古墳C地点  
調査区全景【北西から】



山の神古墳C地点  
周堀検出状況【南西から】



山の神古墳C地点  
周堀検出状況【東から】



山の神古墳D地点  
調査区全景【南西から】



山の神古墳D地点  
周堀検出状況【北東から】



山の神古墳D地点  
周堀検出状況【西から】

写真12



山の神古墳 E 地点  
調査区全景 [南東から]



山の神古墳 E 地点  
周堀検出状況 [北東から]



山の神古墳 E 地点  
周堀検出状況 [南西から]



山の神古墳E地点  
墳丘裾部検出状況〔南東から〕



山の神古墳E地点  
墳丘裾部検出状況〔南東から〕



山の神古墳E地点  
墓石崩落状態検出状況〔南東から〕

写真14



山の神古墳F地点  
調査区全景〔南西から〕



山の神古墳F地点  
周堀内遺物検出状況〔南東から〕



山の神古墳F地点  
周堀内遺物検出状況



御手長山古墳A地点  
周堀検出状況〔南西から〕



御手長山古墳A地点  
周堀内遺物検出状況〔西から〕



御手長山古墳B地点  
調査区全景〔南西から〕



写真16



御手長山古墳B地点  
周堀内遺物検出状況【北西から】



御手長山古墳B地点  
周堀内遺物検出状況【北東から】



御手長山古墳E地点  
調査区全景【南東から】

写真17



御手長山古墳E地点  
調査区全景【北東から】



御手長山古墳C地点  
調査区全景【北西から】



御手長山古墳F地点  
調査区全景【東から】

写真18



堂場13号墳A地点  
調査区全景 [北西から]



堂場13号墳A地点  
調査区全景 [南東から]



堂場15号墳A地点  
周堀検出状況 [南東から]



堂場14号墳A地点  
調査区全景【北西から】



堂場14号墳B地点  
調査区全景【北東から】



堂場14号墳B地点  
周堀検出状況【北西から】

写真20



堂場14号墳C地点  
調査区全景 [南東から]



堂場14号墳C地点  
調査区全景 [北西から]



堂場14号墳C地点  
周堀検出状況 [北西から]



内出前1号墳A地点  
調査区全景【北から】



内出前1号墳A地点  
周堀状況【北西から】



内出前1号墳A地点  
周堀状況【南西から】

写真22



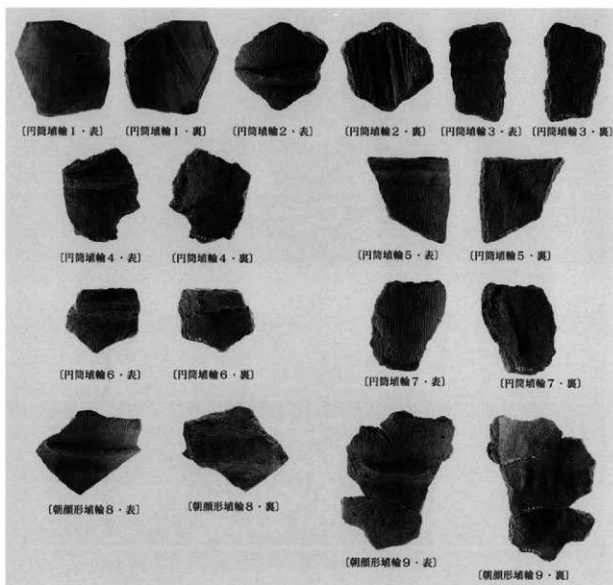
永不1号墳A地点  
周堀検出状況【南東から】



永不1号墳A地点  
周堀検出状況【北西から】



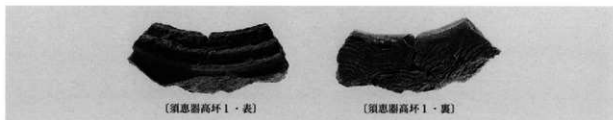
永不1号墳A地点  
周堀検出状況【南から】



壹影山古墳出土円筒・朝顔形埴輪

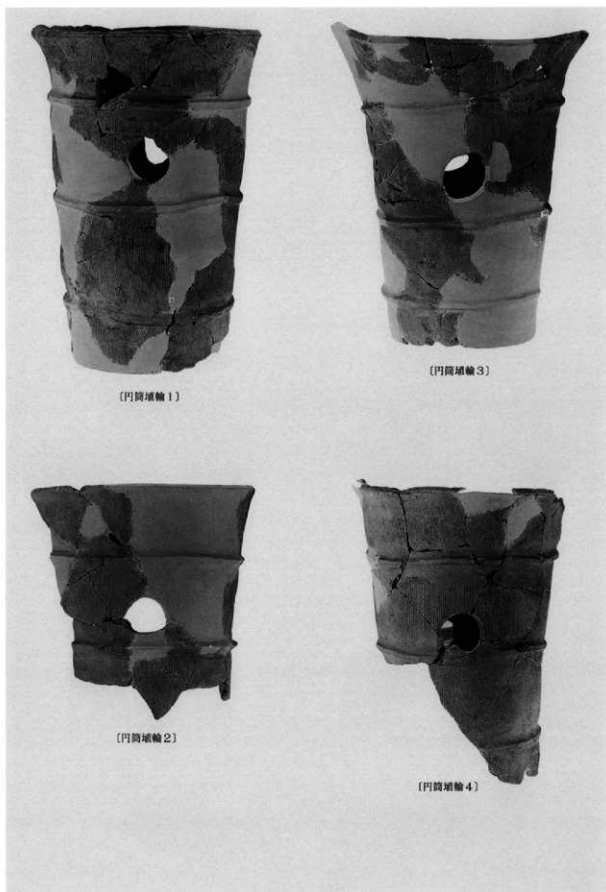


壹影山古墳出土形象埴輪



壹影山古墳出土土器





山の神古墳出土円筒埴輪（1）



【円筒埴輪 5】



【円筒埴輪 6】



【円筒埴輪 8】



【円筒埴輪 7】

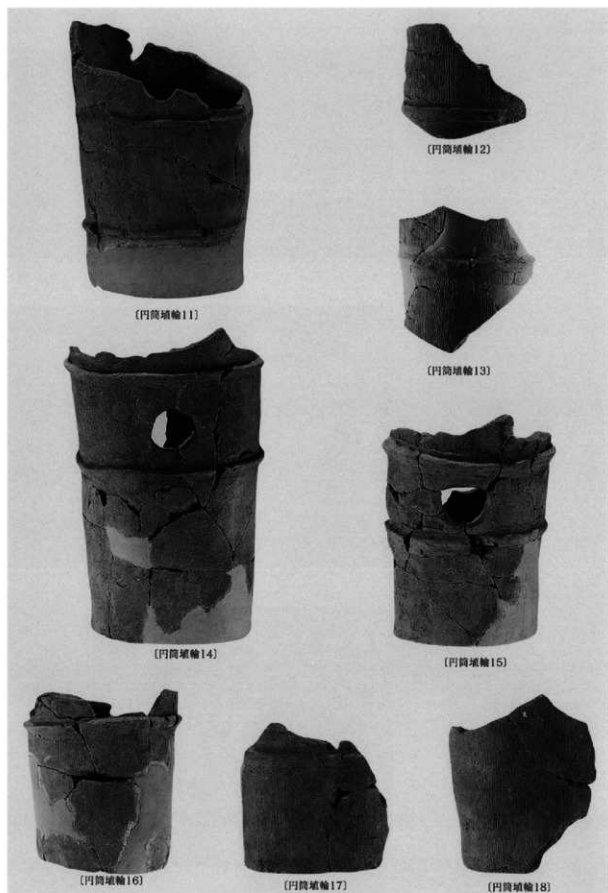


【円筒埴輪 9】

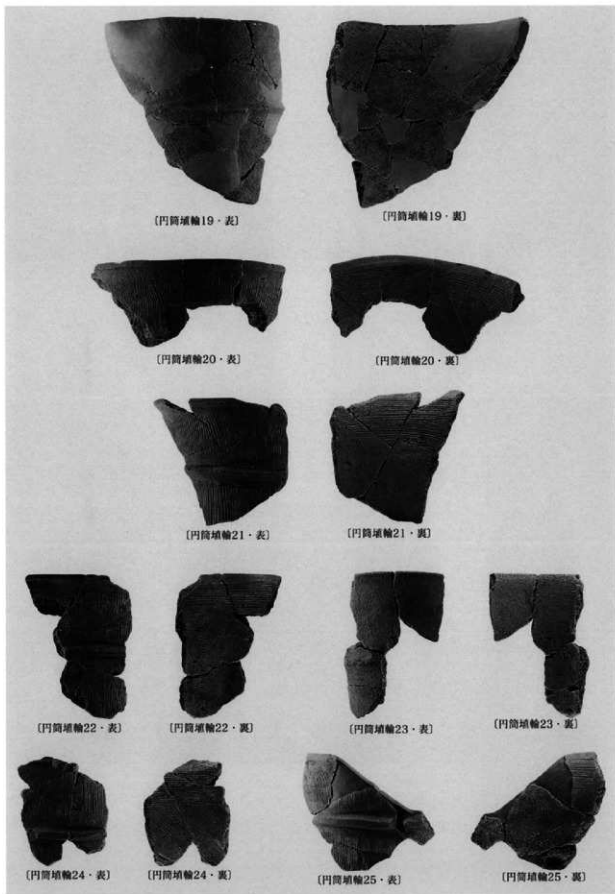


【円筒埴輪 10】

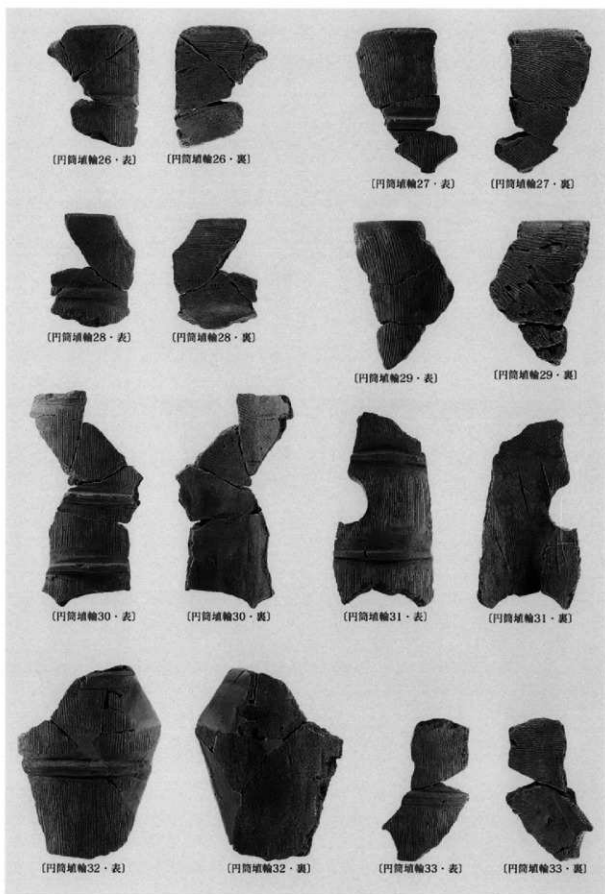
山の神古墳出土円筒埴輪（2）



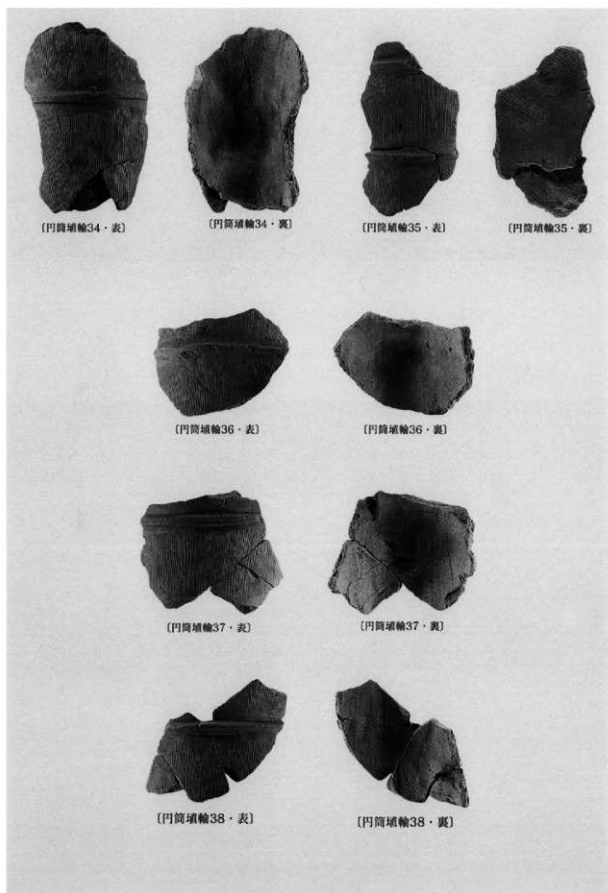
山の神古墳出土円筒埴輪 (3)



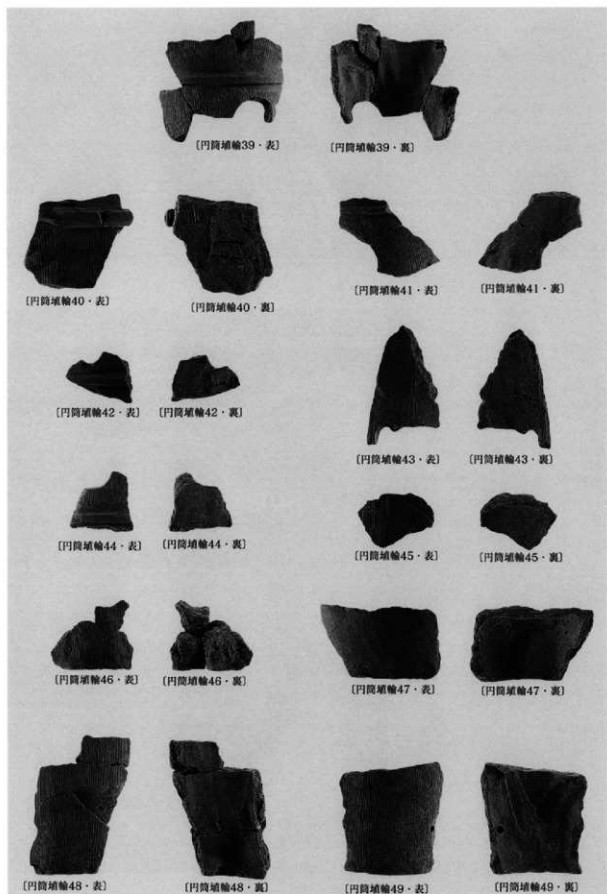
山の神古墳出土円筒埴輪 (4)



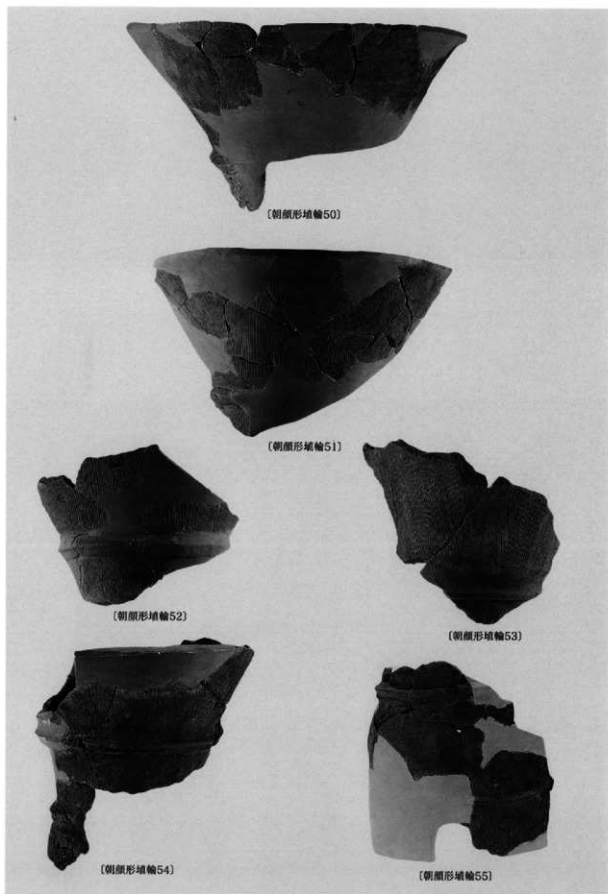
山の神古墳出土円筒埴輪 (5)



山の神古墳出土円筒埴輪 (6)



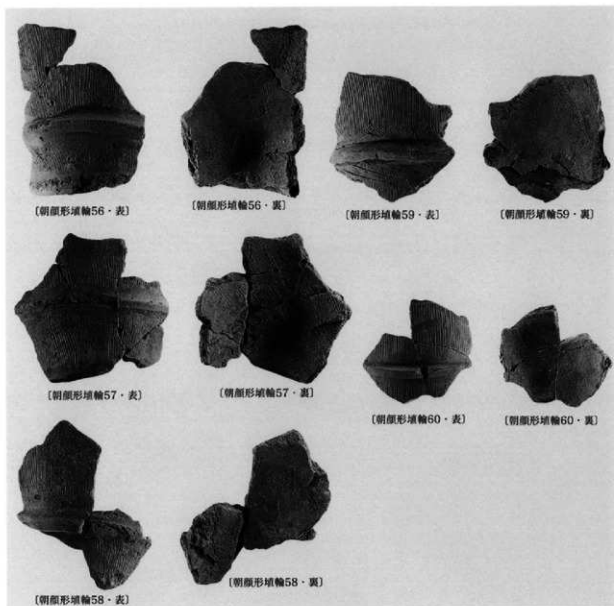
山の神古墳出土円筒埴輪 (7)



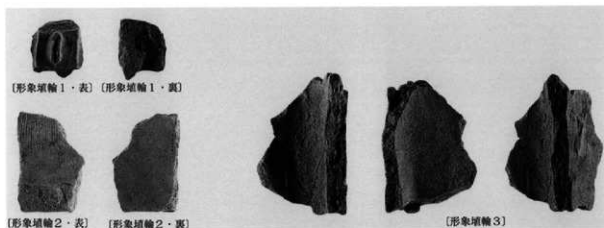
山の神古墳出土朝顔形埴輪（1）



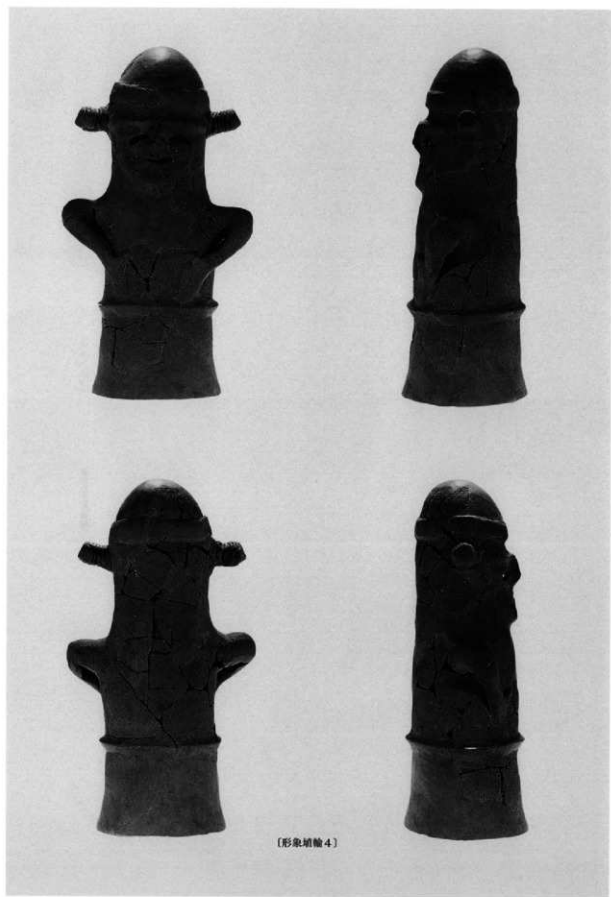
写真32



山の神古墳出土朝顔形埴輪（2）

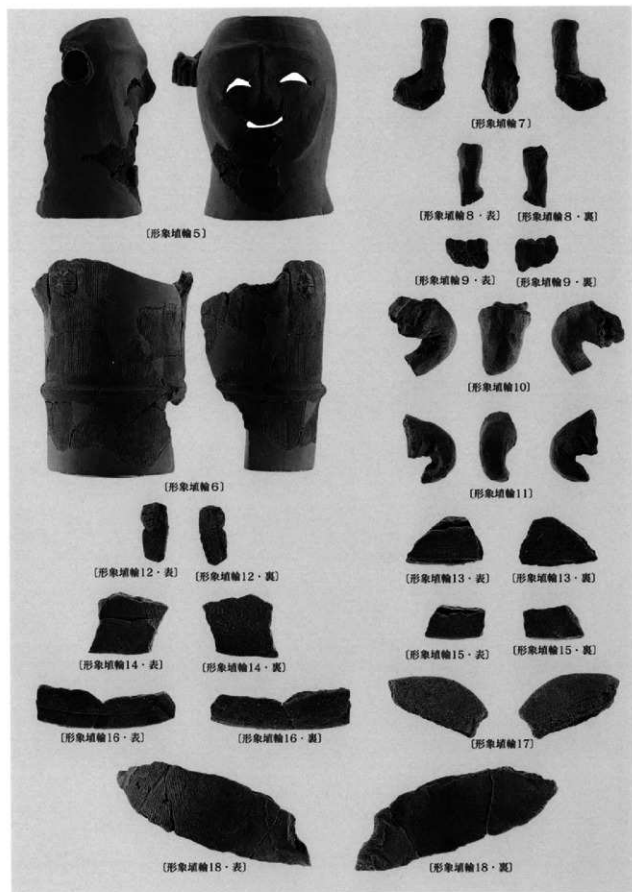


山の神古墳出土形象埴輪（1）

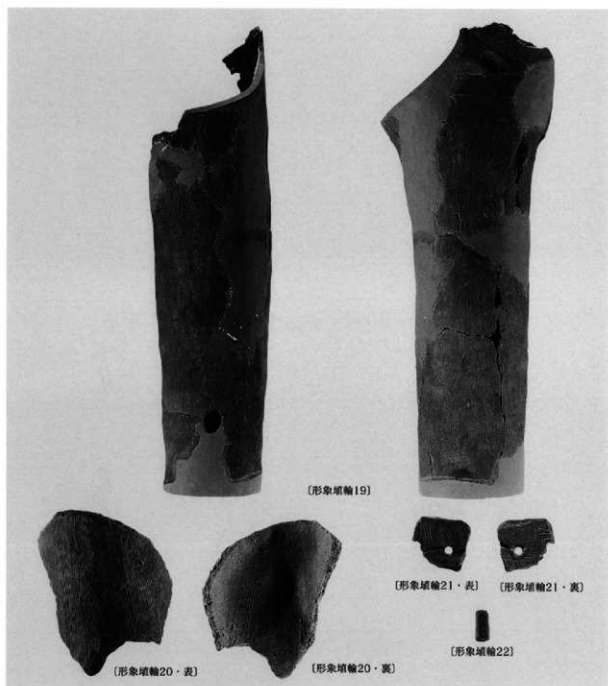


〔形象埴輪4〕

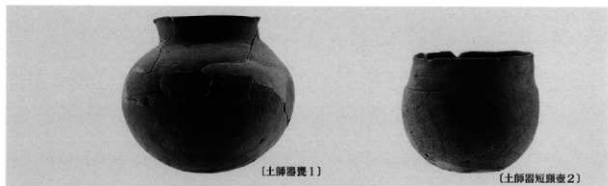
山の神古墳出土形象埴輪（2）



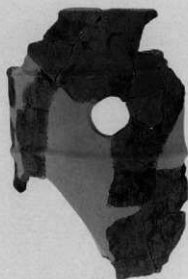
山の神古墳出土形象埴輪 (3)



山の神古墳出土形象埴輪 (4)



山の神古墳出土土器



〔円筒埴輪 1〕



〔円筒埴輪 2〕



〔円筒埴輪 3〕



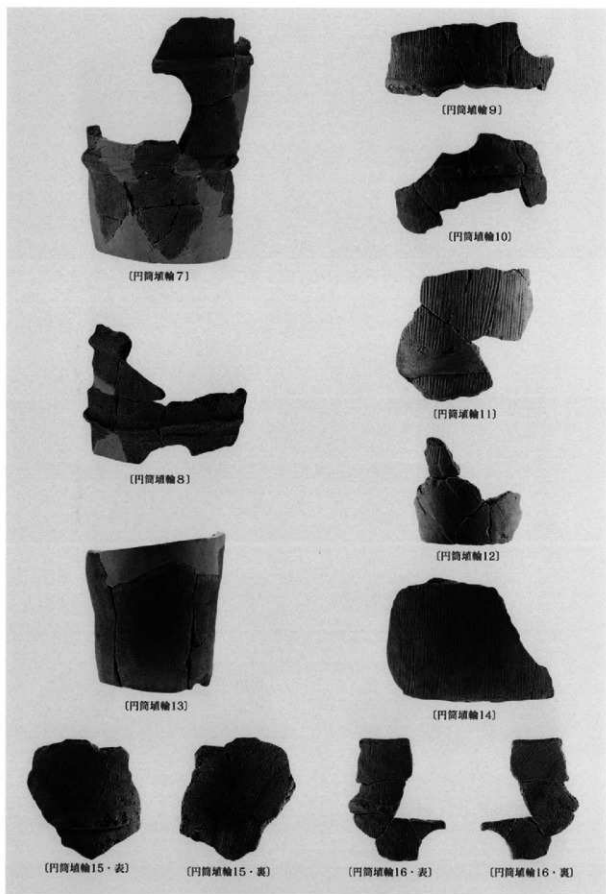
〔円筒埴輪 4〕



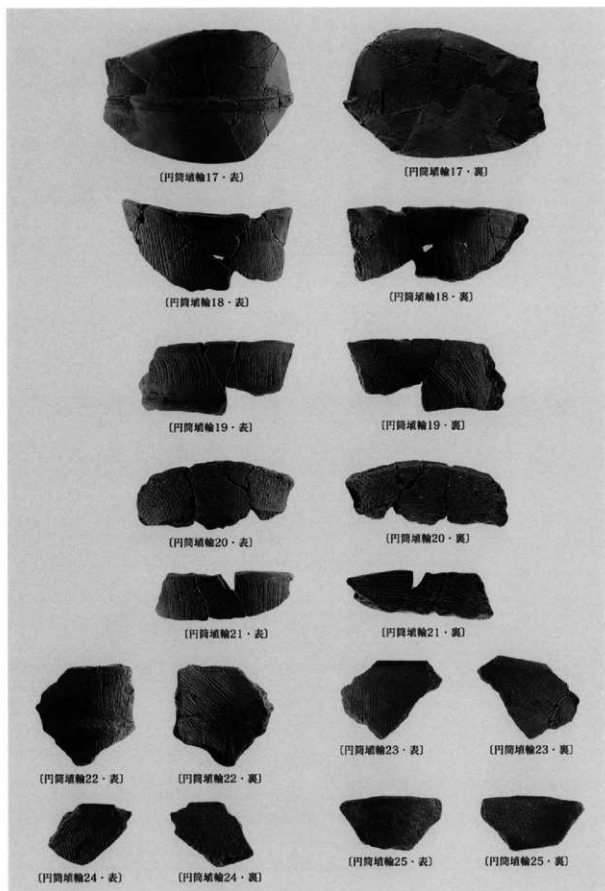
〔円筒埴輪 5〕



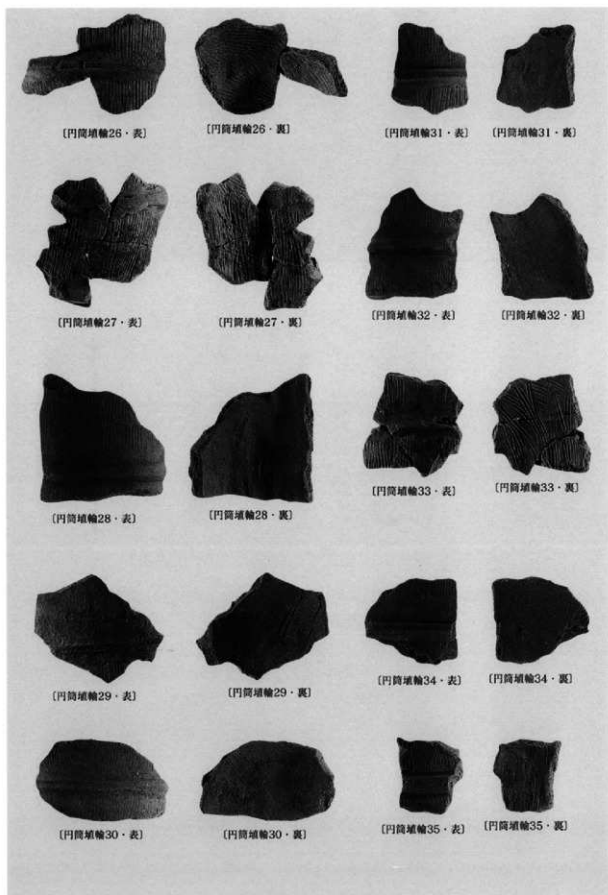
〔円筒埴輪 6〕



御手長山古墳出土円筒埴輪(2)



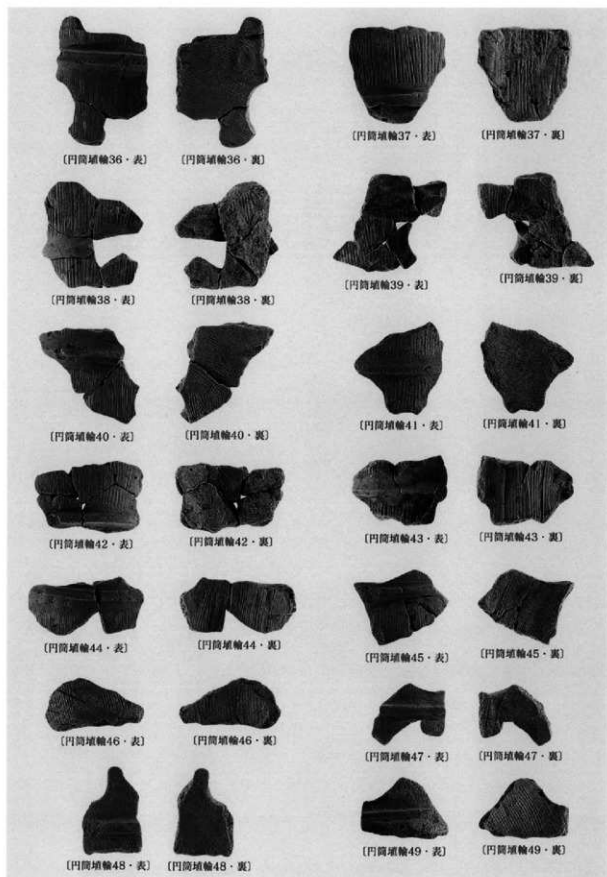
御手長山古墳出土円筒埴輪 (3)



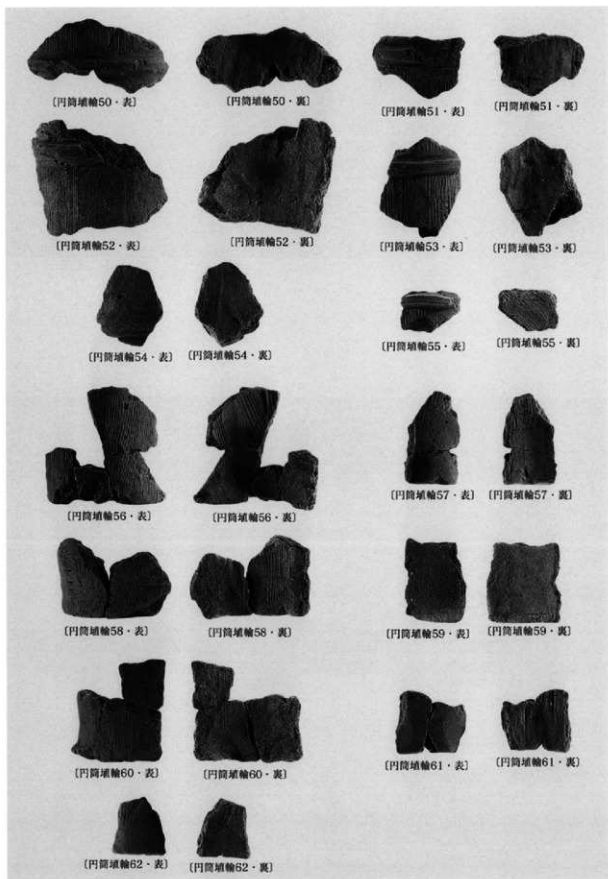
御手長山古墳出土円筒埴輪(4)



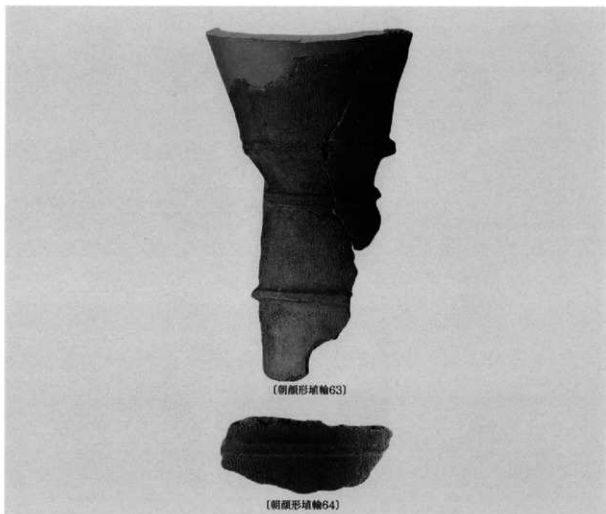
写真40



御手長山古墳出土円筒埴輪 (5)



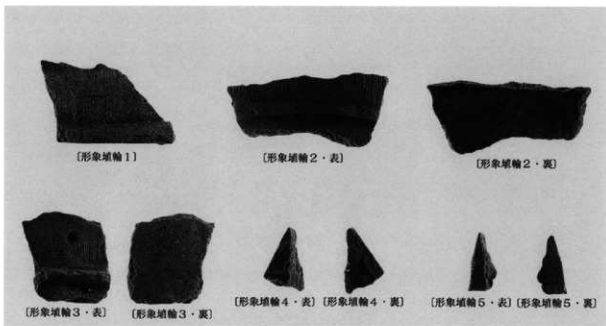
御手長山古墳出土円筒埴輪 (6)



〔朝顔形埴輪63〕

〔朝顔形埴輪64〕

御手長山古墳出土朝顔形埴輪



〔形象埴輪 1〕

〔形象埴輪 2・表〕

〔形象埴輪 2・裏〕

〔形象埴輪 3・表〕

〔形象埴輪 3・裏〕

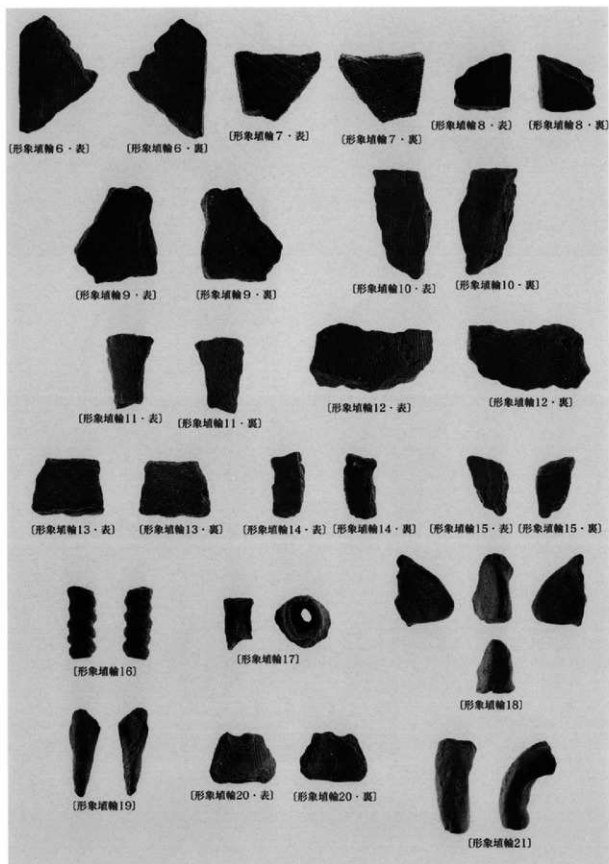
〔形象埴輪 4・表〕

〔形象埴輪 4・裏〕

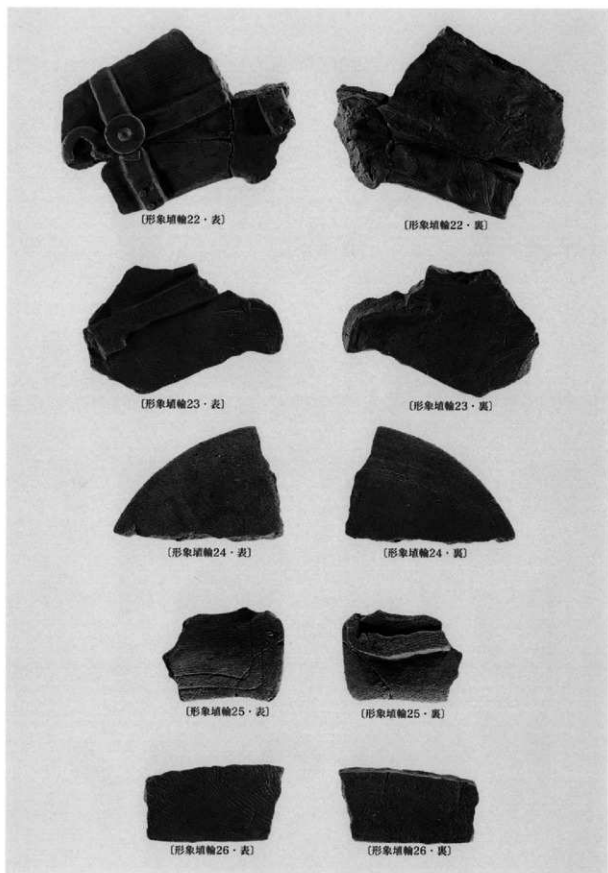
〔形象埴輪 5・表〕

〔形象埴輪 5・裏〕

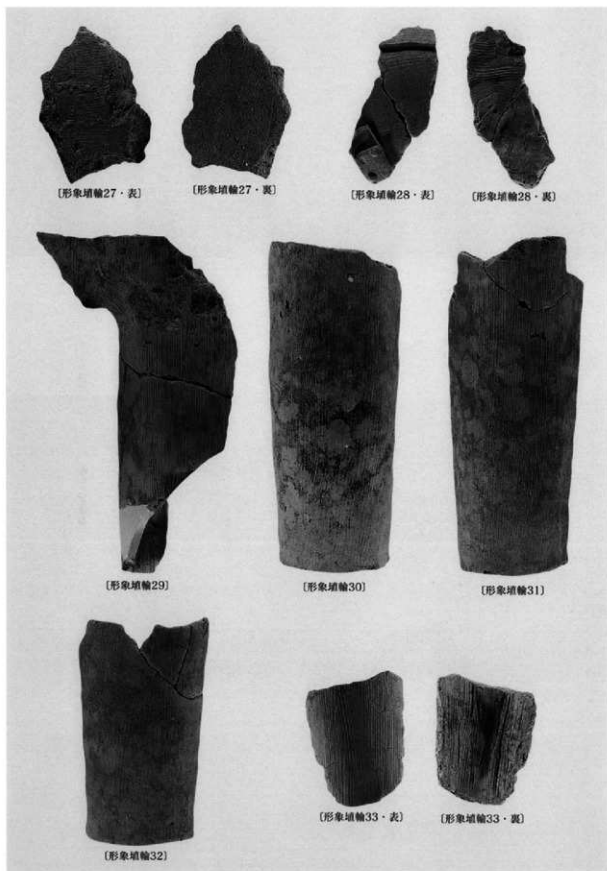
御手長山古墳出土形象埴輪 (1)



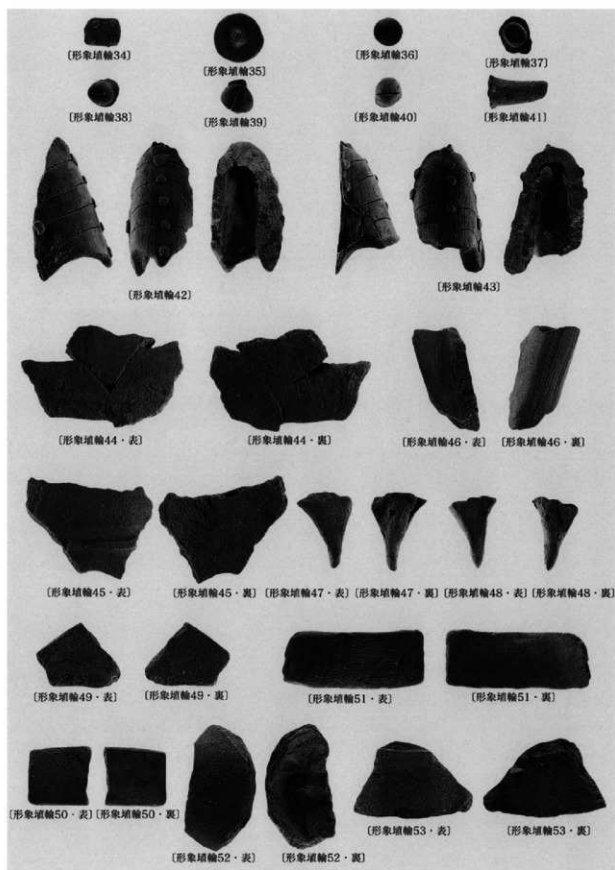
御手長山古墳出土形象埴輪 (2)



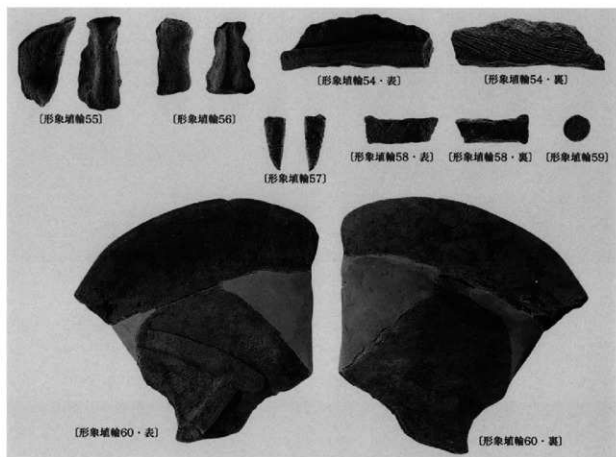
御手長山古墳出土形象埴輪 (3)



御手長山古墳出土形象埴輪 (4)



御手長山古墳出土形象埴輪 (5)



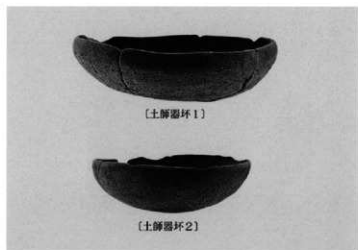
御手長山古墳出土形象埴輪 (6)



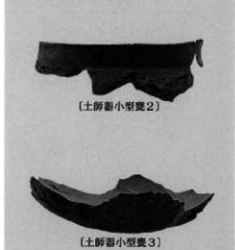
御手長山古墳出土土器



[土師器坏1]

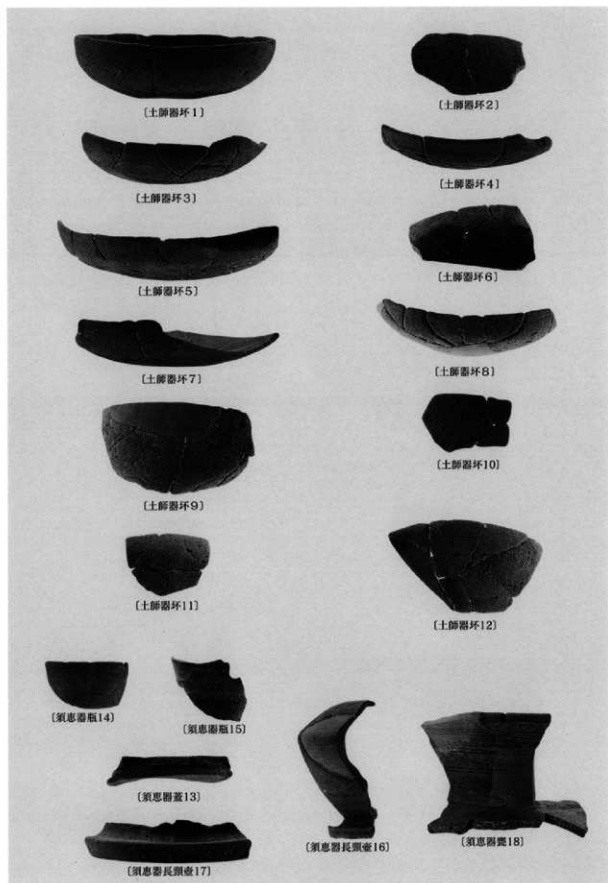


永不1号墳出土土器



堂場14号墳出土土器





内出前1号墳出土土器

## 報告書抄録

ふりがな	あさひ・おじまこふんぐん かみまえはら どうぼ うちでまえ えいふちく							
書名	旭小島古墳群 上前原・堂場。内出前・永不地区							
副書名	小島西土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書Ⅲ							
巻次								
シリーズ名	本庄市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第30集							
編著者名	太田博之							
編集機関	本庄市教育委員会							
所在地	〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号 本庄市教育委員会 電話0495-25-1186							
発行年月日	西暦 2005 (平成17) 年3月31日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
旭・小島古墳群	埼玉県本庄市 小島2・3丁目 及び大字下野堂 地内	112119	171	36°14'48"	139°10'19"	19900305～ 20030609	12,162㎡	区画整理
所収遺跡	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
旭・小島古墳群	古墳	古墳時代後期・終末期		古墳		埴輪、土師器、須恵器		



---

本庄市埋蔵文化財調査報告 第30集

**旭・小島古墳群**

一上前原・堂場・内出前・永不地区一

小島西土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書田

---

平成17年3月25日 印刷

平成17年3月31日 発行

発行／本庄市教育委員会

〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号

電話 0495-25-1186

印刷 朝日印刷工業株式会社







